

平成 27 年度博士学位論文

“半山”作家林海音の主婦像
—台湾と北京・日本を漂泊した家庭

お茶の水女子大学大学院
人間創成科学研究科 比較社会文化学専攻

天神 裕子

平成 28 年 3 月

目次

はじめに.....	1
第一章 遷台女性作家と「婦女與家庭」.....	4
第一節 遷台女性作家とは	4
第二節 国民政府による文芸政策	9
一. 光復直後の社会と文壇の状況	9
二. 官界主導型文芸政策の開始	10
三. 台湾省婦女写作協會の設立	12
第三節 「婦女與家庭」における主婦言説	13
一. 遷台女性作家の受け皿「婦女与家庭」	13
二. 主編武月卿の編集戦略—読者と作家の双方向交流	15
三. 「婦女與家庭」における主婦言説	16
(一) 創刊号—賢く主体性ある主婦	17
1. 「創刊詞」(1949.3.13)—武月卿	17
2. 「職業婦人的痛苦和矛盾」(1949.3.13)—謝冰瑩	18
3. 「熊掌與魚」(1949.3.13)—徐鍾珮	19
(二) 各作家の連載	20
1. 謝冰瑩「潜齋書簡」	20
2. 惠香「家事瑣談」	21
3. 林海音「灯下漫筆(家常閑話)」	22
4. 孟瑤「給女孩子的信」	24
5. 鍾梅音「每週漫談」	26
6. 艾雯「主婦隨筆」	27
四. 近代家族と良妻賢母	28
五. 「婦女與家庭」をとりまく女性政策と背景	31
(一) 元旦講和と三八節講話	31
(二) 中華婦女反共抗ソ聯合会	32
小結	34
第二章 鍾梅音—風と緑に囲まれた海辺の“小家庭”.....	36
第一節 病魔と闘い続けた写真の名手—プロフィールと評価	36
第二節 鍾梅音の主婦言説	40
一. 賢く、知的で、使命感をもった主婦	40
二. “自由中国”の良妻賢母として	43
三. 二つの家庭	46
(一) 大陸時代—暗闇のなかの希望の光	46
(二) 遷台後の小家庭—自然に囲まれた海辺の我が家	50
小結	51

第三章 林海音—大陸・台湾・日本を漂泊する家庭.....	52
第一節 “半山”の女性作家	52
一. プロフィールと評価	52
二. 「城南旧事」のイメージ—郷愁からジェンダーへ	55
第二節 自己肯定感の強い近代主婦—「婦女與家庭」の散文を中心に	59
第三節 北京における家庭観の形成	65
一. 異郷の自由な小家庭—「我的北京回憶録」	65
(一) 父と母の漂泊	65
(二) 北京での生活	67
(三) 父の死	71
(四) 世界日報の女性記者	73
(五) モダンな職業婦人、同僚との恋愛結婚	75
二. 大家族の6番目の嫁—「婚姻的故事」	77
(一) “古老的大家庭”—旧式の大家族	77
(二) 夏家の人々	81
(三) 三哥と三嫂	83
(四) 結婚と同時に寡婦となった花嫁	84
(五) 婆婆と姨娘	85
(六) 緩む大家族のヒエラルキー	89
三. 近代主婦としての視点	89
(一) 「燭」と「百金鯉魚的百欄裙」にみられる旧女性	89
(二) 新旧交代の時代への視点	92
第四節 “半山”のアイデンティティ—「兩地」と日本	99
一. 異郷人としての林海音—疎外感	99
二. 『兩地』—故郷の再構築	99
三. 日本に関する文章（1950年代～1990年代）	104
(一) 仇としての日本	105
(二) 疎外感からの開放	107
(三) 日本統治への批判	108
(四) 台湾を故郷に持つ身の使命感	109
(五) 語られはじめた日本との繋がり	110
小結	112
おわりに.....	114
参考文献	118
付録：林海音とその時代 年譜	
あとがき	

“半山”作家林海音の主婦像—台湾と北京・日本を漂泊した家庭

はじめに

本稿は、“半山”作家林海音の散文に描かれた主婦像について分析し、1920年代から1950年代にかけて中国大陆と台湾に跨り形成・発信された、一知識人女性の家庭観の意味を考察するものである。“半山”とは、日本の植民地時代に大陸に居住し、光復後台湾へ戻った台湾籍の人々のことをいう。¹

林海音という作家については、もとは民国期の北京を舞台にした映画『城南旧事』の原作者として知っているに過ぎなかった。のちに、彼女の両親が台湾籍であり、北京では台湾人コミュニティのなかに暮らしていたこと、作家・編集者としての活動は戦後台湾へ渡ってからで、その創作の背景には、常に「北京」と「台湾」が存在していたことに興味を覚えた。

一方、今回その“主婦像”をテーマとして選定したのは、林海音が1950年代に書いたエッセイ「今日は星期天（今日は日曜日）」を読んだことが発端である。そこには「日曜日に妻を休ませようと家事に奮闘する夫」と「活発で可愛い子どもたち」の姿が、彼らへの愛情に溢れる主婦「私」の眼から、軽妙かつ楽しげに描かれる。当時の台湾といえば、蒋介石政権による白色テロが横行していた混乱の時代であり、国民党サイドの—光復後大陸から台湾へ渡った知識人—だということを差し引いても、戦時体制と空前の物価高のなかで生活の不安はあったはずだ。そんなことを微塵も感じさせないこの完璧に“幸福”な主婦像に違和感を覚えた。さらに、同時期に大陸から台湾へ渡りデビューした女性作家が多数存在していたこと、林海音と同様に女性や家庭に関する文章を多く発表していたことも、主婦像をとりあげるに至った理由の一つである。

林海音は、1918年に日本の大阪に生まれ、1923年に両親とともに北京に渡り、光復後の1948年に再び台湾へ渡った。台湾へ戻ってからの林海音は、作家として、また編集者・出版人として1990年代まで精力的に台湾文壇に貢献するが、作家としての活動は1950年代～60年代が最も旺盛であった。その作品には一貫して女性・家庭という題材が好んで用いられるが、本稿では、そこに林自身の分身のように度々出現する“自己肯定感の強い近代主婦”像に注目する。大陸反攻の戦時体制のもと、文学が政治と緊密に結びつけられようとした1950年代の台湾で、林のこのような主婦像は何を意味していた

¹ “半山”（または“半山仔”）とは、日本の統治時代に大陸へ行き、二次大戦後に中華民国政府とともに台湾へ戻ってきた台湾人を指す。光復（1945年の祖国復帰）後の台湾で、本省人が外省人を“唐山仔”と呼称していたことに因み、半分大陸人の意味でこう呼称された。林海音も時折自らを“半山”ということばで表現している。

のか。林海音は上述の「城南旧事」がつとに有名で、大陸時代を懐かしむ“郷愁文学”の作家というイメージが定着していた。しかし、その散文・小説に描かれる主要なテーマは、単なる“郷愁”としてより、近年の研究ではむしろ女性や家庭の問題として読まれることが多くなってきている。

国民党の撤退前後に台湾へ移住した人々は、80万の軍人を含み約150万～200万人²とされている。そのなかには林海音と同様、大陸で相応の教育を受けた一群の女性知識人が含まれていた。これらの女性たちは、国民党政府の主導する台湾文壇で作家として一斉にデビューし、多数の作品を発表したことから、現在の台湾文学研究界においては“五〇年代女作家”³、“第一代遷台女作家”⁴などと称される。大陸時代に一定の教育を受け、五四文化運動の洗礼を受けたとされるそれらの女性知識人のなかには、すでに作家や新聞記者などの職業を持っていた者もあり、北京時代に新聞記者の経験をもつ林海音も、その代表的な一人であった。本稿ではこれらの作家を“遷台女性作家”と呼ぶことにする。

1950年代の台湾文壇では、政治に対する文学の作用を重視した蒋介石により、政府主導型の文芸政策が推し進められた。メディアにおける日本語／台湾語の使用が禁止されたため、言語的に優位な立場にあった外省人作家が文壇を独占し、女性文芸においても、北京語に堪能な遷台女性作家たちが、日本時代の女性作家にとって代わった。

ただ、こうした遷台女性作家の創作は、家庭や女性、生活の細々した内容を主なテーマとしていたために、1980年代以前の台湾文学史の中では「社会的視点の欠落した主婦文学」と評価され、長らく周縁的な研究対象とされてきた。しかし1990年代に入ると、複数の女性研究者によって、細やかな日常の描写に読みとれるそれらの作品の社会性と、台湾の女性文学の基礎形成における重要性などが指摘されるようになった。1950年代の台湾における女性・家庭に関する言説が、外省人の遷台女性作家によって発信されていたものだったという事実は注目に値する。また大陸から台湾という異郷へ渡った知識人女性—多くは主婦で母親でもある—の描く主婦像に、どのような背景が反映されていたかという問題は興味深い。とりわけ、“半山”というプロフィールをもつ林海音の描く主婦像には、他の遷台女性作家と異なる、より複雑な要素が含まれていた可能性が推測できる。林海音の描く主婦像とはどのような経緯によって形成され、それが台湾において発信されたことは何を意味するのか。

本稿ではこのような問題意識に基づき、林海音と同時期に発表された遷台女性作家の言説をとりあげながら、林海音の主婦像について考察する。まず第一章では、遷台女性

² 葉石涛『台湾文学史』（中島利郎・澤井律之訳 研文出版、2000）p.89による。

³ 王鈺婷『女聲合唱—戰後台灣女性作家群的崛起』（国立台湾文学館、2012）p.5

⁴ 封德屏『『遷台初期文學女性的聲音』—武月卿主編《中央日報・婦女與家庭週刊》為研究場域』『永恆的溫柔：琦君及其同輩女作家學術研討會論文集』（李瑞騰主編、国立中央大学琦君研究中心、2006）p.5

作家に関する先行研究と、遷台女性作家らが誕生した当時の台湾文壇の状況を概説する。さらに遷台女性作家の創作発表の場となった国民党機関紙『中央日報』「婦女與家庭」欄について、同欄で連載を掲載していた6人の作家、謝冰瑩、惠香、林海音、孟瑤、鍾梅音、艾雯を中心に分析する。また、近代中国における家族・主婦の概念の変容に触れ、それが作家たちの主婦像にどのような背景を提供していたのかを分析する。第二章では、「婦女與家庭」欄に最多の文章を発表していた鍾梅音の散文をとりあげ、新天地の台湾で幸せな小家庭を築こうとする外省人女性の意識の形成について分析し、林海音との比較とする。そして第三章では、第一、二章をふまえ、本稿の主要な考察の対象である林海音の散文を改めて分析し、そこに描かれた主婦像とその形成過程、発露の意味を詳細にみていく。第三章第一節では、まず林海音のプロフィールと文学界での評価、代表作「城南旧事」について述べる。第二節では、「婦女與家庭」など1950年代の散文を中心に分析し、そこに描かれた“自己肯定感の強い近代主婦”像を浮き彫りにする。第三節では「我的北京回憶録」と「婚姻的故事」を中心に、その家庭観を形成した北京時代について述べる。さらに女性に関するその他の散文をとりあげ、林の散文にみられる主婦・女性像の二つのモデルを示し、その近代主婦としての視点を考察する。加えて第四節では、林の散文集『兩地』及び日本に関する散文を分析し、北京と台湾という二つの地に跨る複雑なアイデンティティと、生誕地であり敵国としての日本への描写も含めてみていき、最後に、上述の様々なファクターが林海音の主婦像にいかに関与していたかについて考察する。

なお、本稿の文中における表記はすべて日本語の常用漢字を用いるが、原文の書名・雑誌名・論文名については、中国語の繁体字を用いることとする。また各作品のタイトルに付した（ ）内の日本語訳、及び太字で記した日本語訳はすべて筆者による。

第一章 五〇年代の文壇状況と「婦女與家庭」

第一節 遷台女性作家とは

“遷台女性作家”とは、1949年の国民党政府台湾撤退に伴い台湾へ渡り、1950年代の文壇でデビューした女性作家群をさす。それは大陸時代に一定の教育を受け、五四新文化運動の洗礼を受けたとされる知識人女性であり、すでに新聞記者や作家などの職業を持っていた者もいた。

遷台女性作家が創作を開始した1949年前後には、いくつかの女性向け雑誌・副刊（新聞の文芸欄）⁵が創刊されている。このうち国民党機関紙『中央日報』の文芸欄「婦女與家庭（婦人と家庭）」は、同紙が台湾に正式に移転し発行された翌日、1949年3月13日から掲載を開始したもので、1950年代の女性文学を研究するうえで代表的なテキストとしてしばしば用いられる。遷台知識人女性の一人武月卿⁶が主編を務め、毎週日曜日（後に水曜日に変更）、主に第7面に掲載された。掲載される内容の特徴として、料理や裁縫など生活情報も一部あったものの、内容の大半は女性や家庭を題材とした散文や小説など文芸作品が占めていたことが挙げられる。林海音も同欄の主要な作家の一人であり、1980年代に当時を回顧して書いた「武月卿—當年一個抗議（あの年のある抗議）」のなかで次のように述べている。

『婦週（「婦女與家庭」をさす）』のスタイルとしては、文芸性が実用性に勝っており、生活の散文や小説、婦人問題に関する論説が多数を占め、料理や掃除、裁縫の類はごく少数だった。これも作者の大半が女性文芸作家だったゆえんだろう。月卿が台湾の女性作家にこの創作の場を提供してくれたことは、大きな貢献であり、多大な影響力を及ぼしたと言える。⁷

光復後の台湾は、国民党の統治のもと、言語政策においても大きな転換期を迎えた。国民党長官公署が1946年10月25日の光復一周年に日本語の廃止を決定すると、全省のすべての新聞の副刊は中国語（北京語）一色となり、日文作家の大多数が沈黙を余儀

⁵ 1950年代の女性文芸において重要な役割を担った媒体としては他に雑誌『自由中国』の文芸欄（聶華苓主編、1951～1957）、『聯合報』副刊（林海音主編、1953～1963）などがある。「婦女與家庭」週刊はこれらに先んじて1949年3月から掲載が開始された。

⁶ 武月卿、1941年に国民党中央政治学校大学部新聞系（学部）の第10期生として卒業後、『中央日報』に就職し『報學』隔週刊の編集を担当。1949年に遷台し『中央日報』「婦女與家庭」週刊の主編を務める。『聯合報』副刊の主編林海音と並んで1950年代台湾文壇における“副刊双妹”と称された。散文作家。

⁷ 林海音『剪影話文壇』（台北：遊目族文化出版、2000）p.16

なくされた⁸。女性文芸においても、台湾現地作家の葉陶（1905-1970）、陳秀喜（1921-1991）、楊千鶴（1921-2011）らは言語及び政治的要因によって創作の場を失い、これに代わって遷台女性作家たちが、おのずと優位な地位を得ることとなった⁹。こうした状況を鑑みるに、国民党遷台直後の台湾において大量に発せられた主婦に関する言説もまた、台湾本土の作家ではなく、中国語ネイティブであった遷台女性作家によるものであったことに気づかされる。

ここで、先行研究をふまえながら、1950年代の遷台女性作家がどのように評価されてきたかについて述べたい。現在、この問題に関心をもつ台湾の研究者が異口同音に指摘するのは、“1950年代”“女性作家”といったキーワードは、従来の台湾文学史においてさほど注意を払われてこなかったということである。たとえば張瑞芬は「台湾」「当代」「女性」「散文」は、四重の周縁化を形成しており、その原因は台湾国内の文学研究が小説に偏重し過ぎ、またジェンダーの問題に対する認識が極めて遅れていたためだと指摘する。¹⁰ 陳芳明は「静寂は静寂である必要はなく、また沈黙は沈黙と同等ではない。文学史上沈黙を守ってきた物静かな女性は、実は想像されるように一言も物言わず沈黙してきたわけではない」¹¹と述べ、研究の周縁的立場におかれてきた女性創作への注意を促した。

ただ今日では、遷台女性作家の存在は徐々に再評価されており、この経緯については王鈺婷の『女聲合唱—戦後台湾女性作家群的崛起』に詳細な記述がある。それによれば、1970年代以前の国民党による文芸評論、及び1980年代の台湾本土の歴史家による台湾文学史では、いずれも“五〇年代”を“反共文学”と同義語であるとみなしてきた¹²点で共通している。とくに後者の第一人者である葉石涛は、今や台湾文学史の経典とされる著書『台湾文學史綱』（1987）¹³において、1950年代から1960年代までの10年間、台湾省籍作家は中国語を使って創作できず¹⁴、台湾文学は來台した大陸の作家の完全支配下にあ

⁸ 葉石涛『台湾文学史』（中島利郎・澤井律之訳 研文出版、2000）p.81

⁹ 王鈺婷『女聲合唱—戦後台湾女性作家群的崛起』（国立台湾文学館、2012）p.9

¹⁰ 張瑞芬「被邊緣化的台灣當代女性散文研究」『文訊』第205号（文訊雜誌社、2000）p.55-57

¹¹ 陳芳明「在母性與女性之間—五〇年代以降台灣女性散文的流變」『霜後的燦爛：林海音及其同輩女作家學術研討會論文集』（国立中央大学中文系主編、国立文化資産保存研究中心籌備処、2003）p.295

¹² 王鈺婷『女聲合唱—戦後台湾女性作家群的崛起』（国立台湾文学館、2012）p.20

¹³ 葉石涛『台湾文学史』（原著：『臺灣文學史綱』文学界雜誌社、1987）は、台湾の本省人（国民党の遷台以前に大陸から台湾へ移民していた人々を指す。日本の統治時代を経験しており、国民党遷台以降台湾へ移民したいわゆる外省人とは異なる歴史的経験を有する）によって初めて著わされた文学史として知られる。

¹⁴ 光復以前の台湾では、1895～1945年という50年間の日本統治時代を経て、文壇・メディアともに日本語が国語として使用されていた。国民政府は1946年、「台湾省国語推進委員会」を正式に成立し、各縣市に国語推進所を設けて北京語の普及運動を積極的に推進した。さらに1951年にはすべての教育機関において北京語の教育を徹底し、方言の使用を禁止し

ったことを指摘し、この時期の文学は、国を追われたエリートの失意と憎悪の心境を反映したものであり、「1950年代の文学が咲かせた花は、白色で荒涼としていた」¹⁵と批判した。また葉は1950年代に女性作家が多数輩出されたことにも言及しているが「社会的観点の希薄な、家庭、男女関係、倫理などを主題とした女流作家の作品が大道を歩いた」¹⁶と述べている。王鈺婷はさらに、1970年代以前の国民党の文芸評論として劉心皇の「自由中国五十年代的散文」の記述を挙げている。劉は遷台女性作家の作品について、豊かな抒情性を長所だとしながらも「惜しいことに、彼女たちの書いたものはほぼ身近のとりたらない事からである。その作品は、このような動乱の大変革の時代にあることを知らないかのような」¹⁷と指摘した。以上のように、五〇年代における文学の主流は「反共文学」または大陸時代を懐かしむ「懷郷文学」であって、他にとりあげるべき作品は存在せず、遷台女性作家の作品には社会性が欠如している、という評価が従来の一般的な論調であった。

しかし1990年代に入ると、複数の女性研究者たちが五〇年代・遷台女性作家について女性の視点から注目しはじめ、伝統的經典に対する挑戦を開始した¹⁸。このうち応鳳凰は、五〇年代を国民党政府の主導によって特殊な“文学場”¹⁹が形成された重要な時期であるとして捉えなおし、反共文学の実態や文学雑誌の発刊状況などについてその著書『五〇年代臺灣文學論集—戦後第一個十年的臺灣文学生態』²⁰で分析し、この時期の文学を研究する重要性を示した。また遷台女性作家の評価については、范銘如が著書『衆裏尋她—台湾女性小説縦論』のなかで再評価をおこなっている。范は、国民党遷台以降何十年も続く大陸からの新移民（外省人）と日本の統治時代を経た台湾の旧住民（本省人）の間の族群の問題を考えると、この時期の女性文芸の存在は疎かにできないことを指摘し、男性評論家による従来の評価は、戦争を主題とした著作がより重要だとする男性的

た。

¹⁵ 葉石濤『台湾文学史』（中島利郎・澤井律之訳 研文出版、2000）p.94

¹⁶ 葉石濤『台湾文学史』（中島利郎・澤井律之訳 研文出版、2000）p.102

葉石濤によれば、主な女流作家は潘人木、蘇雪林、謝冰瑩（1907-2000）、林海音、郭良蕙、童真、張秀亞、張漱茵、繁露、嚴友梅、劉枋、艾雯、孟瑤などを挙げている。また五〇年代は時代の風潮により散文が流行したとし、この時期成果を上げた女流エッセイストとして徐鍾珮、艾雯、張秀亞、琦君、鍾梅音、王文漪、張漱茵、劉枋、王淡如、林海音（1918-2001）、陳香梅、張雪茵、郭晋秀、羅蘭、葉蟬貞、邱七七、葉蘋、心蘂、侯榕生などを挙げている。

¹⁷ 劉心皇『当代中国新文学大系—資料與索引』（台北：天視出版社、1981）p.70

¹⁸ 王鈺婷『女聲合唱—戦後台湾女性作家群の崛起』（国立台湾文学館、2012）p.24

¹⁹ 「文学場」とはフランスの社会学者ピエール・ブルデューの用語。政治、芸術、市場など文学をとりまくあらゆる要素を含んだ構造を指す。文学の分析において作者・作品のみならず社会学的視点から分析しようとするものであり、台湾文学の研究においてもしばしば引用される。

²⁰ 応鳳凰『五〇年代台湾文學論集—戦後第一個十年的台湾文学生態』（春暉出版社、2004）

価値観に基づく見解だと批判した。さらに范は「歴史的文献をたんねんに紐解いてみると、これらのきわめてジェンダー意識の強い女性知識分子たちがテキスト中において探求した主題が、しばしば政府に限定された枠を逸脱していたことがわかる」²¹と述べ、それらの作品は多くが当時の主流であった反共／懐郷文学に呼応しているものの、台湾という新天地を正面から見据えたジェンダーと省籍の問題にかかわる作品がみられることを指摘した。范の論において最も重要なのは、女性作家による“家郷（故郷）概念の転換”という新しい視点を示したことである。すなわち、女性作家のテキストにおける主題は、台湾で故郷を再構築するための努力と方法であって、失樂園に対する未練や思慕ではなかったとする説であり、「女性のテキスト中において、台湾は仮に身を寄せている荒れはてた逗留地から、長く安住するための新しい故郷へと変わっていった」²²とする見解である。また王鈺婷も、単一化されてきた五〇年代の女性文学を再評価する視点に立ち、遷台女性作家の最初の活躍の場となっていた『中央日報』「婦女與家庭」について、女性作家たちが反共文芸政策の範疇に属しつつも、細やかな抒情性と芸術性のある文章によって、個人の精神の需要と自我を表現したと論じた。王は当時国民党政府に伴い来台した大陸出身の女性知識人について「その多数が高学歴で、新式の教育を受けた女性作家であり、「文学場」を形成する要素の一つとされる「文化資本(cultural capital)」²³を有するのみならず、多くの省籍作家が言語政策と政治的圧迫により創作が続けられなくなったと同時に、瞬く間に当時の文壇に登場し活躍した」²⁴として、当時の文壇の状況が彼女たちに与えた時の利を指摘している。またジェンダー的視点からも、女性作家の文章における家庭に関する視点とは、家父長制度のディスコースの一つである「家中天使」²⁵の姿勢が優先的地位を占めていたことを挙げている。さらに王は別の論文でも「婦女與家庭」欄を取り上げ、遷台女性の抒情的な散文が生まれたメカニズムについて分析し、政治による制御と市場主導の需要という二つの要素が存在していたと指摘している²⁶。

21 范銘如『衆裏尋她—台湾女性小説縦論』（麦田出版、2008）p.15

22 范銘如『衆裏尋她—台湾女性小説縦論』（麦田出版、2008）p.15

23 「文化資本」とは、もともとフランスの社会学者ピエール・ブルデューが構築した概念であり、文化の保有が資本として機能することを提唱した概念である。ここでは女性作家が有する言語的優位性、知識や外省人としての身分などを指す。

24 王鈺婷「語言政策與女性主体之想像—解讀《中央日報・婦女與家庭週刊》中女性散文家之美學策略」『台湾文学研究学報』第七期（台南：国立台湾文学館、p.45-77）p.56

25 “家中天使”とは、1854年にイギリスの詩人コヴェントリー・パットモア（Coventry Patmore）が発表した流行詩「家里的天使」（The Angel in the House）を引用したものであり、我慢強く自我を犠牲にする理想の妻を示すキーワードである。

26 王鈺婷「抒情之承繼，傳統之演繹—五〇年代女性散文家美學風格及其策略運用」第三章「政治駕馭」與「市場主導」下女性抒情散文之生產機制—以《中央日報》的「婦女與家庭」版（1949.3-1955.4）為論述核心」『現代中文文學學報』（Journal of Modern Literature in

一方、封徳屏の『遷台初期文學女性的聲音』—武月卿主編《中央日報・婦女與家庭週刊》為研究場域²⁷は、「婦女與女性」欄の主編であった武月卿を中心に、武と遷台女性作家との交流、同欄の掲載方針や発刊から停刊までの経緯などが詳述されている。注目したいのは、武月卿がしばしば読者の投稿を奨励し、読者アンケートを実施するなど、読み手との対話に重きを置いていた点が明らかにされていることである。1950年代の文壇状況については、政府主導の文芸政策における作家組織や作家の動向については比較的把握しやすいが、読者についての資料、とくに女性文芸の読者に関する資料が乏しいため、封の指摘には大きな意義がある。封はさらに謝冰瑩(1907—2000)、徐鍾珮(1917—2006)、琦君(1917—2006)、林海音(1918—2001)、孟瑤(1919—2000)、張秀亞(1919—2001)、鍾梅音(1922—1984)、艾雯(1923—2009)という8人の作家を挙げてそれぞれの「婦週」における実績をまとめている。封もまた、これらの遷台女性作家が台湾という新たな環境のなかで好奇心をもって生活し、家事の合間に執筆という自身の天地を築いていったこと、それら多くの散文や小説が、次世代の文学創作の礎となったことを指摘し、次のように述べている。

「反共文学」や「戦闘文学」が50年代において名を轟かせていた反面、われわれはむしろ武月卿主編の「婦週」の6年間から、文学史において長期にわたり軽視されてきた女性作家の声をきくことができるのである。²⁸

以上、1950年代及び「婦女與家庭」に関する主要な先行研究について述べたが、これらの論はいずれも台湾文学研究において周縁化された遷台女性作家に注目し、その功績を再評価しようとするものである。遷台女性作家、すなわち第一世代と呼ばれる女性作家たちの創作が、次世代の作家に大きな基礎を形成したこと、政府の文芸政策のなかにも身を置きながらも独自の世界を築いていたことが、新たな発見として論じられている。

こうした遷台女性作家に関する研究は、上述のように台湾ではすでに再評価がされているものの、日本ではその存在はまだ注目されていない。そのため、本稿ではまず林海音を含む遷台女性作家が誕生した当時の台湾文壇の状況と、『中央日報』「婦女與家庭」での作家たちの主婦像を改めて分析し、その背景にあった女性政策にも触れておきたい。

Chinese)、(香港嶺南大学人文学科研究中心、2009)

²⁷ 封徳屏『『遷台初期文學女性的聲音』—武月卿主編《中央日報・婦女與家庭週刊》為研究場域』『永恒的溫柔：琦君及其同輩女作家學術研討會論文集』(李瑞騰主編、国立中央大学琦君研究中心、2006)

²⁸ 封徳屏『『遷台初期文學女性的聲音』—武月卿主編《中央日報・婦女與家庭週刊》為研究場域』『永恒的溫柔：琦君及其同輩女作家學術研討會論文集』(李瑞騰主編、国立中央大学琦君研究中心、2006) p.26

第二節 国民政府による文芸政策

一. 光復直後の社会と文壇の状況

1945年8月15日、日本は連合軍に無条件降伏し、中国戦区最高総帥であった蒋介石は連合軍の命令により台湾島を接收した。同年10月25日、台湾省行政長官公署長官陳儀と台湾総督安藤利吉により、台北公会堂（現中山堂）で受降式がおこなわれ、台湾は正式に中華民国に復帰した。50年の間日本統治下におかれていた台湾の民衆は祖国復帰の喜びに沸き、熱狂的な期待をもって国府軍の上陸を迎えた。作家吳濁流は、この時の様子を小説「無花果」のなかで以下のように描写している。

「ああ、来た来た、祖国の兵隊さんが……………」

私は背のびをして見た。だれもかれも傘を背負っているのが異様に感じられた。なかには鍋をはじめ食器や夜具をかついでいる者もいた。ちょっと変に思ったが、これがすなわち陳軍長所属の陸軍第七十軍だった。私はしいて自分の感情を抑制して、たとえ見かけが悪くとも八年間日本軍と勇ましく戦ったのではないか、じつに勇ましい、いまのこの姿はやむをえないのだと思い返すと、やはりある満足感をおぼえた。けれども、これは私の一人よがりに過ぎなかった。²⁹

吳濁流によれば、熱望していた祖国の政府による台湾接收は期待に反し、「いよいよ接收の段ともなれば、私利私欲のために不正をあえてし、いわゆる『発国難財』（国難をくいものにして金もうけをする）のために血眼になっていた。彼らのめざすものは『五子』といって、第一に金子、第二に房子、第三に女子、第四に車子、第五に面子であった」³⁰。国民政府は「台湾には政治的人材がない」「台湾同胞は国語国文を解さない」を理由に、台湾の知識人を中・高級職位から排除し、主要な職務は大陸から来た人士によりほぼ独占された。³¹ 軍米の輸出と備蓄のために米価は瞬く間に大高騰し、さらに台湾銀行が大量の紙幣を発行して台湾の物資を調達し大陸へ輸出したため、空前のインフレーション

²⁹ 吳濁流「無花果」『夜明け前の台湾 植民地からの告発』（社会思想社、1972）p.160。本書の付記によれば、「無花果」は雑誌『台湾文芸』19-21号（1968）に中国語で連載され、1970年10月に台北の林白出版社から単行本として出版されたが、翌71年初めに発禁処分となった。

³⁰ 吳濁流「無花果」『夜明け前の台湾 植民地からの告発』（社会思想社、1972）p.164

³¹ 李筱峰『台湾史 100件大事（下）』（玉山社、1999）p.7によれば、台湾省行政長官公署の21名の高級幹部のうち、台湾籍の幹部は1名のみであり、長官公署316名の間管理職員のうち台湾籍の職員は17名のみであった。また経済面においても、政府は日本時代の二つの代表的経済機構であった専売局、貿易局をそのまま受け継ぎ、樟脳、マッチ、タバコ、酒などの日用品をすべて専売制とするほか、全台湾の工業・農業製品の販売と輸出を独占した。

ンが発生した。様々な政治的、経済的要因によって、1947年2月27日、ついに二・二八事件³²が勃発し、台湾全島に及ぶ本省人と外省人との対立が激化して、著しい社会的混乱を招いた。

一方、このように混乱した社会にありながらも、1945年～1949年までの4年間には、台湾知識人による新しい文学の受容と取り組みがおこなわれた。葉石涛は著書『台湾文学史綱』のなかで、出版活動と台湾新文学再興への取り組みをおこなった作家楊逵、祖国復帰後影響力を発揮し続けた作家として呉濁流、創作の道を模索し続け台湾文学史に名を遺した鍾理和らを挙げてその功績を述べ、またこの4年間に多くの刊行物や作品が存在していたことを指摘している。さらに、祖国復帰により大陸から訪れた一部の進歩的文化人によって、魯迅、茅盾、巴金らの作品をはじめとする多種多様な大陸の文学が流入し、台湾の知識人の多くが大陸の近代文学のエッセンスを新たに吸収したと述べている³³。しかし、1949年に国民政府が遷台すると、文壇は国民党の文芸政策の完全支配下におかれることとなる。葉石涛はまた、1950年代には約150万～200万人が台湾の新移民となったが、これらの人々は復帰直後に移民した多様な階層の雑多な人々とは異なっていたとして、「五〇年代に共産主義を避けて來台した移民は、大陸で統治実権をもち、軍政、党務、財政、経済、学術界に関わりを持っていたエリートであった」³⁴と述べ、1949年以降遷台した人々が政治体制を迅速に確立したと言及している。そして1950年3月1日、一時的に総統を退いていた蒋介石が復職³⁵すると、祖国復帰以来不安定を極めた政局は整い沈静した。これに伴い、文学の面においても、官界主導の文芸政策が全面的に展開されることとなる。

二. 官界主導型文芸政策の開始

葉石涛によれば、1950年代（1949年の国民党遷台以降）の台湾文学界はそれ以前と完全に異なる様相を呈した。台湾文学は來台した大陸の作家の完全支配下におかれ、言葉の壁と政治弾圧によって省籍作家を怖けさせ、沈黙させ、1930年代の文学の旗手であ

³² 1947年2月28日、台湾省専売局台北分局の取締官が闇タバコを販売していた女性を暴力取り押さえ、それに反発した市民に取締官が発砲、死亡者が出たことから抗議する民衆が省専売局台北分局に押し入った。行政長官公処前でデモに及んだ群衆に憲兵が発砲、数十人が死傷、この騒乱は台北全市に広がり、外省人と本省人の対立として激化した。最終的に政府当局は民衆を武力で鎮圧し、多数の人々がいわれなき罪で処刑された未曾有の重大事件となった。

³³ 葉石涛『台湾文学史』（中島利郎・澤井律之訳 研文出版、2000）p.79-80

³⁴ 葉石涛『台湾文学史』（中島利郎・澤井律之訳 研文出版、2000）p.90

³⁵ 蒋介石は共産党との軍事衝突において劣勢となった1949年1月21日、一旦総統職を辞任し、副総統李宗仁が代理を務めたが、戦局は好転せず、国民党政府は同年2月1日南京から広州へ撤退、さらに9月7日には広州から重慶へ退いた。二カ月後大陸での全面敗退が決定的となり、政府は12月7日、台湾へ移転、蒋介石は翌1950年に総統に復職した。

る老舎、巴金、沈從文、茅盾、田漢、曹禺らの作品はすべて禁止されたため、大陸の來台作家自身もまた、三〇年代、四〇年代文学との繋がりを断った真空状態となった。³⁶ 1950年代の台湾文学について一連の研究がある応鳳凰は、国民党政府は以下の三点に注力して文芸政策を推進したと指摘している。第一に、強制的な言語転換政策である。国民党は台湾接收後まもなく日本語の使用を全面的に禁止し、その一方で大量の人的・物的資源を投入して各層において台湾民衆の「脱植民地化教育」すなわち台湾人から日本の植民地時代の色を「除去」することで、「中国化」した文化政策を実現させようとした。最も有効で顕著な成果を挙げたのは「国語推進運動」³⁷である。第二に、言論の自由を制限した。例えばそれは、戒嚴法の施行によって大陸の三〇年代以降の左翼文学作品を禁止することであった。第三に、党・政府・軍の力を結集し、国を挙げての文芸政策を推進した。具体的には、政府の資金供出によって文学賞を設置し、軍と政界の文人を動員して次々と国策に則った「文芸団体」—中国文芸協会、青年写作協会、婦女写作協会などが設立された。王鳳凰は、上記の三項は互いに密接に連携し、1950年代の文壇に大量の反共文芸を生み出す基礎的背景となったと指摘している。³⁸

官界主導の文芸政策は、国民政府遷台の数カ月後、1950年初頭から急速に展開された。先陣をきったのは1950年3月、蒋介石の支持により張道藩³⁹が設立した中華文芸獎金委員会（文獎金）である。「反共抗ソ」を主旨とする優良作品の奨励を主旨として、1950年代前半⁴⁰の文壇において中心的な役割を果たした。雑誌『文芸創作』（1951年5月創刊）はその受賞作を掲載するための受け皿となった。戦後台湾の文学場形成に関する研究がある赤松美和子は、著書『台湾文学と文学キャンプ』で、国民党政権下の文学賞について詳述している。それによれば、文獎金が設置した獎金は非常に高額⁴¹で、これにより大量の反共抗ソ作品の誕生が促され、「反共という画一的な意図を持った国策による懸賞文学の成功は、戦後の台湾の文学のあり方の基盤を作った。」⁴² 次いで1950年5月4

³⁶ 葉石涛『台湾文学史』（中島利郎・澤井律之訳 研文出版、2000）p.92

³⁷ 国民政府は1946年、「台湾省国語推進委員会」を正式に成立し、各縣市に国語推進所を設けて北京語の普及運動を積極的に推進した。さらに1951年にはすべての教育機関において北京語の教育を徹底し、方言の使用を禁止した。

³⁸ 応鳳凰『五〇年代台灣文學論集』（春暉出版社、2004）p.51-50

³⁹ 張道藩（1897-1968）、1950年遷台。大陸時代から国民党政府の文化事業・宣伝工作の主導的役割を担い、遷台後は陳紀滢、王藍、趙友培らを發起人として中国文芸協会を設立、また中華文芸獎金委員会及びその刊行物『文藝創作』を創刊し、反共抗ソの優良な文学作品を奨励した。

⁴⁰ 文獎金の獎金は1956年で終了した。

⁴¹ 梅家玲「五〇年代台灣小説的性別与家國—以『文芸創作』与文獎金得獎小説為例」『性別、還是家國？五〇與八、九〇年代台灣小説論』（麦田出版、2004）p.119によれば、賞金委員会短編小説3000元、中編小説8000元、長編小説12000元であった。

⁴² 赤松美和子『台湾文学と文学キャンプ』（東方書店、2012）p.74

日には、政府の主導により、陳紀澄⁴³ら大陸出身の著名作家約 200 人からなる中国文芸協会（文協）が発足した。

さらに同年 12 月、当時国防部総政治部主任であった蔣経国によって「文芸到軍中去（文芸を軍中へ）」の方針が打ち出され、“反共抗ソ”の文芸路線を強調し、軍中作家の養成が促進された。1951 年 3 月には、文芸界の連名で「抗議共匪暴行宣言」が公布され、続いて 1953 年 8 月には中国青年写作協会が設置され、政府の反共路線に呼応する反共文学の創作を促した。さらに、1955 年 5 月には、国民政府遷台後初の女性作家団体である台湾省婦女写作協会（婦協）が台北で設立された。

三. 台湾省婦女写作協会の設立

『中華民國文芸年鑑』（1966）によれば、国民政府は反共抗ソの宣伝を強化するために文芸の提唱を重視し、多数の女性作家が誕生した時代の趨勢と環境の需要によって、30 数名の女性作家が発起人となり台湾省婦女写作協会が発足した。1955 年 1 月には台湾省師範学院（現台湾師範大学）の会議室において蘇雪林、李曼瑰、張明、許素玉、王文漪、王琰如、盧月化、辜祖文、潘錦端の 9 名により準備委員会が開かれ、会則や活動計画、会員募集などの打ち合わせがおこなわれた。その後 2 回の準備会議を経て、5 月 5 日、台北市假台湾省民衆服務處において婦女写作協会の設立大会が開かれた。蘇雪林を中心に、台北、岡山、嘉義、台南、台中、新竹など各地から約 100 名が出席し、台湾省省府秘書長・謝東閔、社会処長・傅雲、新聞処長・吳錫沢ら政府高官をはじめ、婦聯總會幹事長・皮以書、中国青年写作協会総幹事・王宇清らが出席して盛大におこなわれた。本会の設立宗旨は、その会則第 2 条に示すように「婦人の創作を奨励し、婦人問題を研究し、三民主義を實踐して、反共抗ソの力を増強する」ことであつた。設立の際、同会は以下のような宣言を發表している。

これは自由中国における各階層の創作を愛好する女性たちの結晶である。私たちは、組織団体の執務室から来た者もいれば、鍋とかまどのある台所から来た者も、学校から来た者もある。しかし、書くことを愛好するという点で私たちは一致している。私たちは一本のペンによって、自分自身の声と、自由中国の復興と、大陸の鉄のカーテンの暗黒を描き出したいという願いをもっている。よって私たちは今日一堂に会し、これまで分散していた力を、今日から一つに集結するのだ、このペン部隊に

⁴³ 陳紀澄（1908-1997）、大陸時代には記者、特派員をはじめ立法委員など国民党の要職を務める。1949 年に遷台後、張道藩らと「中国文芸協会」を設立、1950 年に「重光文芸出版社」を設立。ほかに中華文芸獎金委員会、中央日報、教育部學術委員会などの文化組織の要職も歴任。作家としても反共文学として知られる『荻村傳』など多数の著作があり、戦後台湾で反共文学の担い手として主要な役割を果たした。

よって前線を切り開き、敵の心臓に切り込むのである！⁴⁴

さらに、中華民国文芸年鑑によれば、所属する女性作家は 1955 年設立当初の 100 余名から、1966 年には 335 名にまで増加し、年齢も 20 代～70 代までと幅広かった。⁴⁵このように、官界主導型文芸政策の一環として全国規模の女性作家組織が設立され、女性文芸もまた、反共抗ソの政策の下に組み込まれた。本稿で考察する林海音も、同協会の代表的な構成員の一人であり、遷台女性作家たちは互いに親しく交流していた。社交的だった林は、個人的にも女作家慶生会（女性作家の誕生会）を発足し、毎月、誕生月の作家を祝うこの会は 1953 年 12 月から 30 年間続いて作家同士の交流を深めた。

第三節 「婦女與家庭」における主婦言説

一. 遷台女性作家の受け皿「婦女與家庭」

反共抗ソの文芸政策に沿って設立された婦女写作協会に先んじ、多くの遷台女性作家たちが遷台直後からすでに文壇でデビューし、交流を結んでいた。婦女協会の設立から溯ること 6 年、1949 年に掲載を開始した『中央日報』「婦女與家庭」は、それらの遷台女性作家が作品を発表し、相互の繋がりを深めた代表的な新聞の文芸欄として知られる。中華民国開国 50 周年記念に台湾で出版された『中華民国新聞年鑑』によれば、「婦女與家庭」の本体である『中央日報』は、国民党の機関紙として 1928 年に上海で創刊、その後日中戦争及び国共内戦時期において発行拠点を南京、長沙、重慶から南京へと移し、国民党政府の台湾移動に伴い、1949 年 3 月 12 日から台北での発行を開始した。⁴⁶ 翌 13 日にスタートした「婦女與家庭」欄は、週に一回（主に日曜）、その題名のとおり女性と家庭に関する散文、小説などを中心に掲載した。1950 年代の遷台女性作家に関する研究を重点的におこなっている王鈺婷は「五〇年代の（女性※筆者注）文学のうち、その多数のテキストは婦人、育児、恋愛、婚姻、社交などの問題に集中しており、なかでも『中央日報・婦女與家庭週刊』で発表された文章はとくに重要である」⁴⁷と述べ、国家が文芸創作に介入し、反共抗ソの文芸政策を提唱する主要な組織—「文奨会」、「婦協」、「文協」の成立より以前に、「婦女與家庭」はすでに 6 年に渡り文学史上能動的なプロセスを形成していたことを指摘している。

武月卿主編の「婦女與家庭」は、1949 年 3 月 13 日 - 1955 年 4 月 27 日まで、途中何度か停刊の憂き目に遭いながらも第 264 期まで続いた。⁴⁸ 同欄に作品を発表していた

⁴⁴ 『中華民国文藝年鑑』（台北：平原出版社、1966）p.106

⁴⁵ 『中華民国文藝年鑑』（台北：平原出版社、1966）p.105

⁴⁶ 『中華民国新聞年鑑』（台北市新聞記者会、1961）

⁴⁷ 王鈺婷『女聲合唱—戦後台湾女性作家群の崛起』（国立台湾文学館、2012）p.13

⁴⁸ 武月卿主編による「婦女與家庭」は、1955 年 4 月 27 日の第 264 期が最後の一期であり、

女性作家には、謝冰瑩、張秀亞、徐鍾珮、林海音、劉咸思、琦君、郭良蕙、王淡如、艾雯、孟瑤、張漱茵、劉枋、鍾梅音、王文漪など五〇年代の主要な女性作家が顔を揃えており、この時期の文学を知るうえで「婦女與家庭」は欠かせないテキストの一つとなっている。一方、游鑑明によれば『中央日報』「婦女與家庭」と同時期に発行されていた新聞の婦人向け文芸欄には、『台湾新生報』の「台湾婦女」週刊（1947.8 -）、『中華日報』（1946 -）の「現代婦女週刊」、『大華晚報』（1950. -）などがあり、また雑誌としては中華婦女反共抗ソ聯合会が発行する『中華婦女』（1950.7 -）、中央婦女工作会の『婦友』（1954.10.10 -）、『家庭與主婦』（19）、台湾省婦女会の謝娥らが主編を務めた『台湾婦女』（1946.9 -）などが挙げられる。⁴⁹

また、陳芳明は、第一世代の女性作家は大半が 1930 年以前の生まれであるとして、沉櫻（1907）謝冰瑩（1907）、雪茵（1908）王文漪（1914）、王琰如（1917）、琦君（1917）、徐鍾珮（1917）、林海音（1918）、劉枋（1919）、羅蘭（1919）、張秀亞（1919）、鍾梅音（1921）、胡品清（1921）艾雯（1923）、王明書（1925）、邱七七（1928）、小民（1929）、郭晉秀（1929）、雪韻（1930）らの名前を挙げている。これは「婦女與家庭」でデビューした作家と重複している。陳はこれらの女性作家について「当時文壇の主流の権力を掌握していた男性作家が大陸反攻をスローガンとして唱えていた一方で、彼女たちは生活のこまごました事を書き綴っていた」と述べ、その理由として女性たちが台湾という見知らぬ環境に直面し、生活という現実と向き合わねばならなかったことを挙げている。また時空の変化にかかわらず、その“母性”という役割は少しも変化しなかったと指摘している。⁵⁰

上記各人の年齢層から分かるように、これらの女性作家は遷台時に 30 代～40 代であり、大陸時代に学業、仕事、結婚、出産などを経験し、妻／母親として家族とともに台湾へ渡ってきた女性がほとんどであった。その配偶者は国民党と関わりのある官僚、外交官、教育者などのエリートであり、当時の写真や各人の散文の内容から、経済と社会の混乱する台湾での生活に苦勞しながらも、生活レベルは少なくとも中流以上であったと推察できる。「婦女與家庭」は、このような遷台女性作家の台湾における創作発表の場であり、そこには 1950 年代の台湾における女性自身による言説の一端をみることができる。

5 月 4 日第 265 期からは主編が李青来となり 1961 年 4 月 9 日第 546 期で停刊。1963 年 12 月 30 日に再度復刊し（547 期）、その後は主編の氏名が掲載されておらず、最終的に 1964 年 8 月 31 日第 582 期で再び停刊し現在に至る。本稿での分析は、武月卿が主編であった 1955 年までの時期に対しておこなった。

⁴⁹ 游鑑明「當外省人遇到台灣女性」『戰後台灣報刊中的女性論述』1945-1949」（中央研究院近代史研究所集刊第 47 期 2005.3）p.165-224

⁵⁰ 陳芳明「在母性與女性之間—五〇年代以降台灣女性散文的流變」『林海音及其同輩女作家學術研討會』（2003）p.299

二. 主編武月卿の編集戦略—読者と作家の双方向交流

「婦女與家庭」(武月卿主編、1949.3.13～1955.4.27)の状況については、封徳屏の『遷台初期文學女性的聲音』—武月卿主編《中央日報・婦女與家庭週刊》為研究場域」に詳述がある。それによれば、『中央日報』は、1945年の光復後、南京で復刊した際には、読者の幅広い知識欲に応えるために「新聞の雑誌化」を実施し、10数種類の「週刊(週に一度掲載される記事欄)」が設けられた⁵¹。「婦女與家庭」は『中央日報』の台北移転後、真っ先に掲載が開始された副刊である。主編の武月卿は雲南出身の1919年生まれで、中央政治学校(政治大学の前身)新聞系を卒業後、南京中央日報資料室に勤務し、1949年に遷台した女性知識人であった。武の主編による「婦女與家庭」は、『中央日報』の「週刊」のうち、もう一つの文芸欄である「中央副刊」と比べても、文芸性の点では勝っていたという。封によれば、それはひとえに、この喘息の持病で度々発作に悩まされながらも、編集の仕事への情熱と、女性問題に対する関心と、文芸に対する愛好が人一倍強かった主編の力によるものであった。封はこの論文において1950年代の台湾文学は「反共文学」一色であったという従来の論調に改めて疑問を投げかけ、「婦女與家庭」における女性作家の言説は、1950年代の軽視できない声であり、台湾における女性文芸の基礎形成のうえで大きな意味をもつと主張している。

さらに封論文は、武月卿の編集戦略についても明らかにした。武月卿はまず、女性作家同士の座談会形式や、投稿文の募集によって読者の増加と作者の参加意識の向上を図った。例えば1951年5月4日、中国文芸協会の設立一周年に際し、台湾廣播電台(台湾ラジオ局)で女性作家によるラジオ座談会の内容が掲載された。鍾梅音「文藝與人生(文芸と人生)」、徐鍾珮「寫作題材問題(創作テーマについて)」、童鍾晉「我的寫作生活(私の創作生活)」、艾雯「主婦與文學(主婦と文学)」、王淡如「我的愛好和婦女寫作(私の愛好と婦人の創作)」、林海音「勿忘婦女讀者(女性読者を忘れるなかれ)」など、各作家が文芸の重要性に関するコメントを発信した。このうち林海音は、台湾には女性向けの読物が不足していると呼びかけ、これを受けて武月卿も、女性向け紙面を増やし、女性向け読物の種類を増やす必要性を指摘して、自由中国に多くの女性作家が誕生したことに驚きと喜びを示した。⁵² 武はまた、読者からの投稿募集も頻繁におこなった。例えば「婦女與家庭」第7期(1949.4.24)において「辛勤二十年(20年の功労)」というテーマで第一回の投稿を募集し、第9期(1949.5.8)で選考を通った投稿文を掲載した。また第18期(1949.7.17)には「父の日(8月8日)」をテーマとした投稿を募り、

⁵¹ 封徳屏『遷台初期文學女性的聲音』—武月卿主編《中央日報・婦女與家庭週刊》為研究場域『永恆的溫柔：琦君及其同輩女作家學術研討會論文集』(李瑞騰主編、国立中央大学琦君研究中心、2006) p.8

⁵² 『中央日報』「婦女與家庭」第78期(1951. 5. 9)

第 21 期 (1949.8.7) には集まった 100 篇近くの投稿文から 4 編を掲載するなど、テーマを決めた投稿文の募集をしばしば企画し、読者による創作を促した。武月卿は読者の視線を常に意識し、よりよい紙面づくりのために心を砕いていた。第 198 期 (1953.12.16) では「婦週読者アンケート」を実施し、“紙面の討論のうち最も興味深かった問題は？”“最もお気に入りの作家は？”など、「婦女與家庭」の内容や作家などについて十項目の質問を設け、第 201 期でその結果を掲載している。

このように、武月卿の創意工夫により、作者と読者の双方向交流が図られた「婦女與家庭」であったが、停刊の憂き目には何度も遭っている。最初の停刊は 1950 年 6 月、朝鮮戦争の勃発により国際報道面を拡大するため、他の三つの週刊と同時に停刊となった。林海音はこれに対し「中央副刊」(1951.1.13) に「一個抗議 (一つの抗議)」という文章を發表し、これが功を奏して「婦女與家庭」は 1951 年 2 月 14 日にいち早く復刊を遂げた。林海音は当時の状況を次のように記している。

私は民国 40 年 1 月、「一つの抗議」という文章を『中副』に發表した。その時婦人向け副刊があったのは『中央 (日報)』と『中華 (日報)』の二紙のみであり、当時紙面縮小の状況のもとで、いずれも最初に婦人欄が廃止された。私は、婦人欄をなぜ最初に切り捨てるべきでないか、その理由を述べて抗議した。嬉しいことに、中央日報の「婦週」は以後三度の復刊を果たし、また主編が私の「一つの抗議」のおかげで復刊できたと説明してくれたので、非常に光榮に思い、何よりも本紙の民意尊重の姿勢に敬服した。⁵³

「婦女與家庭」はその後第 86 期 (1951.8.16) で再び停刊し、さらにその一カ月半後に再度復刊した。紙面も、掲載開始当初には紙面一頁の五分の四だったが、五分の三、四分の一まで縮小され、二回目の停刊時には三分の一弱となった。紆余曲折を経ながらも、『中央日報』の読者調査によれば、「婦女與家庭」は同紙のなかで最も人気を博した週刊であったという。⁵⁴

三. 「婦女與家庭」における主婦言説

上述のように、1950 年代初め、「婦女與家庭」は遷台女性作家に創作發表の場を提供し、読者—言語上の問題から、主に外省人女性が主な読者だったと思われる—には家庭や生活に関する散文や読物を提供し、家庭に対する意識が共有されていた。次に、実際に

⁵³ 林海音「武月卿／当年—『抗議』」『剪影話文壇』(台北：遊目族文化出版、2000) p.17

⁵⁴ 封德屏『『遷台初期文學女性的聲音』—武月卿主編《中央日報・婦女與家庭週刊》為研究場域』『永恆的溫柔：琦君及其同輩女作家學術研討會論文集』(李瑞騰主編、国立中央大学琦君研究中心、2006) p.14

そこでどのようなメッセージが発信されていたのかを見ていきたい。1953年12月30日に、第200期を記念して『婦週』二百期散記—『婦週』的『滄桑』和小事（『婦週』二百期の歩み—『婦週』の『変遷』と細々したこと）という記事が掲載されており、各作家が最初に掲載された時期や注目すべきトピックを確認することができる。これに加え、「婦女與女性」に掲載された記事を調査してみると、1949年7月からは、毎回少なくとも一篇の連載が掲載されていたことが分かる。下記は各作家の連載時期を表にしたものである。

1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955
①(謝)7月	→ 6月					
②(惠)9月	→ 6月	③(海)9月	→ 6月			
			④(孟)7月	→ 8月		
			⑤(梅)8月	→ 1月		
					⑥(艾)1月	→ 1月

※「 」内は連載名。

- ①(謝)...謝冰瑩「潜齋書簡」
- ②(惠)...惠香「家事瑣談」
- ③(海)...林海音「灯下漫筆（家常閑話）」
- ④(孟)...孟瑤「給女孩子的信」
- ⑤(梅)...鍾梅音「每週漫談」
- ⑥(艾)...艾雯「主婦隨筆」

1949年3月の創刊後、7月から謝冰瑩、9月には惠香の連載が始まり、その後1955年に武月卿が離職するまで、6人の女性作家が交代で連載している。本章では、創刊号に掲載された主編のコメントと記事をみたくうえで、上記6作家の作品を中心に、その主婦言説について分析する。

(一) 創刊号—賢く主体性ある主婦

1. 「創刊詞（創刊の辞）」（1949.3.13）—武月卿

主編の武月卿は「婦女與家庭」の創刊に際し、本副刊は信念と希望によって誕生した、と述べている。武はこのなかで、家庭は社会組織の最小単位であり、家庭の進歩と社会の進歩は密接な関係にあること、また家は人間にとって最後の安全な避難所であり、拠り所であると主張した。そして、その家を管理するのは一家の主婦であると強調した。

家と個人との関係がこのように深く、家を支配し、家にとって最も影響力をもつのは一家の中心である主婦である。家庭の衣食住のなかで、主婦の心づかいと段取り

を経ていないものがあるだろうか。—中略—夫が落ち着いてよい仕事ができるか、子どもが健康と快活さを保てるか、それらは主婦の聡明な指揮と采配によって実現される。なぜなら、主婦は一家の衣食住の主宰者であり、支配者であるだけでなく、また家庭内の楽と苦のムードを造り出し、コントロールする者であるからだ。本刊が誕生したのも、こうした信念に基づくものであり、本刊の希望もこれと通じている。⁵⁵

家の主宰者として、家庭内を見事な采配で取り仕切る賢い主婦の姿が理想として示されている。武月卿はまた、読者が本刊から何らかの良いもの、何らかの趣味を得て、それを家庭の中に還元してほしいと希望を述べている。さらに、第一期では、現代社会で女性を悩ませる問題である”家事と仕事の両立”というテーマについて、とくに謝冰瑩、任培道、徐鍾珮ら著名な知識人女性に掲載原稿を依頼したと述べている。

2. 「職業婦人的痛苦和矛盾（職業婦人の苦しみと矛盾）」（1949.3.13）—謝冰瑩

主編武月卿が創刊の辞で述べたように、第一期には家庭と仕事の両立についての文章が掲載された。そのうち、「職業婦人的痛苦和矛盾」を執筆した謝冰瑩（1907-2000）は、第一世代の女性作家の中でも年長者の一人である。招聘に応じて1948年9月に来台し、当時の台湾省立師範学院（後の台湾師範大学）教授に就任した。大陸時代に北伐と抗日戦争を経験した女傑であり、すでに『従軍日記』（1928）や『一個女兵的自傳』（1936）などの著者として有名であった。封建的な母親に決められた結婚を強いられ、三度脱走を図るが失敗し、教師の仕事を得てようやく自由を勝ち取ったという自身の経歴はその作品にも描かれており、謝の女性解放や権利獲得に対する主張には重みを感じられる。

抗日戦争8年余の艱難辛苦の歳月に、女性たちが受けた損失と苦しみを誰が知ろうか。それは男性の十倍に匹敵する苦しみであった。多くの職業女性は、社会に奉仕する一方で、良妻賢母兼女中とならねばならない。家庭の主婦たちはしばしば二重の圧力を受けているのだ。外では、学校、職場にかかわらず、子育てに疲れきった女性を歓迎する者はいない（未婚の若い美人が最も歓迎される）。しかしそれでも、彼女たちは一つには夫の経済的負担を軽くするため、二つ目には自らの思想、志と興味によって、外に出て働き知識と経験を増やそうとしている。⁵⁶

謝はまた、志をもった知識人女性が仕事についた後で、出産や子どもの病気、自身の

⁵⁵ 「創刊詞」『中央日報』「婦女與家庭」第1期（1949.3.13）

⁵⁶ 謝冰瑩「職業婦人的痛苦和矛盾」『婦女與家庭』『中央日報』（1949.3.13）

負担の多さから挫折して仕事を続けられないケースがあり、身を挺して仕事を続けたとしても実生活でさまざまな精神的プレッシャーを受けていることを指摘する。

会社や職場で安心して働き続けられたとしても、家に帰れば、いつも夫に小言を言われる。「家の中がめっちゃくちゃだ」でなければ「君の稼ぎはお母さんの□□（※判読不明）にも足りない」である。意味するものは「君はきちんと家にいて、子どもたちの面倒をみて、部屋を整頓して、料理洗濯をし、主婦の務めを全うすべきだ」ということである。⁵⁷

こうした挫折から、外で仕事をしたくない妻も増えてきたものの、実際には経済的逼迫から共働きをしなければならない現実がある。しかし謝は、それでも敢えて女性たちには、志を持ち、プレッシャーに屈せず、自らの充実のために奮闘してほしいというメッセージを投げかける。一方、仕事と家庭の二重苦を解消する方法として、託児所や産前産後の休暇制度などの制度を整備すべきという極めて建設的かつ現実的な意見を述べている。

3. 「熊掌與魚（熊の手と魚）」（1949.3.13）—徐鍾珮

一方、同じく第一期に掲載された徐鍾珮の「熊掌與魚」（1949.3.13）には、軽快な描写で職業婦人のストレスが描かれている。徐鍾珮（1917-2006）は大陸時代、中国初の専門的訓練を受けた女性記者として、中央日報ロンドン支社の特派員を務め、来台以前に『英倫帰来（イングランドから帰って）』の著者としてすでに知られていた。以下は創刊号で掲載された散文である。同じ学校と職場の後輩でもある武月卿の依頼で「婦女與家庭」第一期に書き下ろした散文「熊掌與魚」には、深夜まで働く職業婦人が描かれる。

夜風を受けて帰宅するとき、まるで何か悪いことでもしているかのように、いつも申し訳ない気持ちになる。あたりは寂しく、夜中に外を出歩く女性はほとんどいない。私は車を飛び下り、家路を急ぐ。門をたたくと、犬たちが吠えはじめる。真っ暗な部屋のなか、書斎だけに灯がついていて、カーテンに彼の横顔がくっきりと影を映している。明日8時に出勤するのに、この夜中に、彼は私の帰りを待っていてくれるのだ。⁵⁸

夜中まで残業するほど仕事に没頭する反面、家庭を疎かにしている罪悪感に苛まれる心境を描いている。この女性は経済力を持ち、働き方は男性と対等な立場にあるようだ

⁵⁷ 謝冰瑩「職業婦人的痛苦和矛盾」「婦女與家庭」『中央日報』（1949.3.13）

⁵⁸ 徐鍾珮「熊掌與魚」「婦女與家庭」『中央日報』（1949.3.13）

が、同じように働いても、同じ心情というわけにはいかない。

私は家を愛しているし、仕事も愛している。私はこの矛盾した愛の間で、サンドイッチに挟まれた肉のように、窮屈で窒息してしまいそうだ。新聞社の男の同僚の家で、彼らがまだ高いびきで寝ている時はいつも、奥さんは子どもには小さな声で話すように、女中にも静かに歩くように言い含める。「あのひとは昨日夜遅くに帰ってきたのだから、もう少し寝かせてあげましょう。」その言葉には、夫の仕事に対する尊敬と思いやりが溢れている。彼らは夜中に帰宅しても、堂々と家に入り、大声でドアをたたきださう、むろん私のような罪悪感など、感じるはずもないし、悪いことをしたような感覚などまったくないだろう。⁵⁹

「熊掌與魚」とは、熊の掌と魚という二つの高級料理を両方とも得ることはできないという喩え⁶⁰であり、「婦女與家庭」のなかで女性作家たちはこれを仕事と家庭に当てはめ、しばしば文中に用いている。語り手は悩みながらも、やはり仕事を放棄せず、最後には「いつの日か、テーブルに熊の手と魚の両方を載せるのだ」という決意を示す。ここには仕事に没頭したい一方で、家庭での役割を全うしなければならないという主婦の二重負担の苦しみが顕著に表れている。

(二) 各作家の連載

1. 謝冰瑩「潜齋書簡」

「婦女與家庭」には女性作家による複数の連載があったが、このうち謝冰瑩は最初に連載を開始した作家であった。書簡形式の連載「潜齋書簡」であり、第19期(1939.7.24)～第82期(1951.6.6)、週に一度または三週間に一度の頻度で連載された。「離婚以後怎麼辦?(離婚後どうするか)」「昇業與就業(出世と就職)」「婦女與兒童文學(女性と兒童文學)」「在堅苦中奮闘(苦難の中の奮闘)」「失戀之後(失恋の後)」「忍耐是成功之母(忍耐は成功の母)」「婆婆經(姑の教え)」「我怎樣利用時間寫作(時間をどう使って創作するか)」「和女孩子們談寫作(少女たちと創作について話す)」「女人讀書有什麼用?(女が勉強して何になる?)」など、テーマは毎回異なり、計10回に及んだ。その対象は学生や友人などであり、若者へのアドバイスといった趣がある。下記はそのうち的一篇で、15歳の台湾人の少女に宛てた手紙である。この少女の母親は封建的で、経済的に余裕はあるが女性の進学を許さない。

⁵⁹ 徐鍾珮「熊掌與魚」「婦女與家庭」『中央日報』(1949.3.13)

⁶⁰ 熊掌與魚:熊の手と魚という二つの高級料理を両方とも得ることはできない、すなわち“二つのものを両方得ることはできない”の意。典故は『孟子・告子上』「魚我所欲也」の“熊掌與魚不可兼得”であり、“両方を得られない場合は取捨選択をすべきである”が原意。

お母さんはあなたに言ったそうですね、「女が勉強して何になるの？」と。そしてあなたに洋裁や料理を習い、女性なら皆知っている家庭の細々したことを学びなさいと主張する。あなたのお兄さんは、お母さんよりさらに考え方が封建的で、あなたに大声で話すな、新聞や本を読むな、外に遊びに行くなと言う……なんということでしょう、こんな精神の圧迫に耐えられるはずがありません。あなたのお母さんはおかしな人ですね。自分も師範学校で教育を受け、2年間小学校の教員をしていたというのに、今や「女の勉強は無用」と主張するのですから。⁶¹

謝はこの少女に対し、自分の経験談を伝えながらも、まだ余りにも若すぎるこの読者に「ただ家を飛び出すのはお勧めしない」と前置きし、実際にどう生活していくかという具体的な方法を提案している。たとえば、毎日500字の文章を書き、日記を書き、一週間に二篇の文章を読むこと、母の手伝いはいつも通りにして、早く終わらせて自由な時間を捻出し読書創作にあてること。また「ロビンソンクルーソー」や「アンデルセン童話集」など、読むべき本もアドバイスしている。封建家庭に育ち、母から執拗な圧力を受けた自分自身の経験から、若い世代への関心、とりわけ古い家父長制度に悩む若い女性を助けたいという思いが窺える。ただ家出など過激な方法は否定し、すぐに始められる修練の仕方を伝授し励ましている。

2. 惠香「家事瑣談」

上述の『『婦週』二百期散記』によれば、青年作家兼教師であった⁶²という人物であるが、台湾における研究論文でも、管見の限りでは惠香個人のプロフィールについて触れたものはみあたらない。しかし惠香は第25期(1949.9.4)～第66期(1950.6.25)まで、ほぼ毎週「家事瑣談(家事についての雑談)」を連載し、三十九回まで続いているため、疎かにできない作家である。「親子之愛(親子の愛)」「生活情趣」「貧賤夫妻百事哀(貧しい夫婦は万事哀しや)」「産前的徳育」「児童教育」「詩的啓発」など家庭生活に関するさまざまなテーマが取り上げられている。そのうち、家庭を顧みない主婦について否定的に述べている「別具風格的太太(変わりものの奥さん)」(1950.1.21)から、その主婦言説を見てみよう。

この文章では、語り手がひょんなことから短い間だけ近所に住むことになった友人の奥さんについて語っているが、最初から「一人の女性が、自分を愛せないのだとしたら、周囲の人の不愉快をまねくだらう」と嫌悪感を表している。その女性は二人の子どもを

⁶¹ 謝冰瑩「女人讀書有什麼用？」(1951.6.6)

⁶² 『『婦週』二百期散記』「婦女與家庭」『中央日報』(1953.12.30)

持つ主婦であるが、表面上は子どもを可愛がっているように見えて、実は世話一切を夫にまかせきりである。本人はといえば、他人の噂話と自分の自慢話（演劇を学んだことがあるという）をするのが大好きだ。一人でいることが少なく、頼みもしないのに色々な情報を話しにやって来る。彼女の不安定な情緒が子どもたちに影響しているのか、赤ん坊の泣き声がいつも途切れず、そのうえ彼女の芝居の曲をうなる声や木の下駄でバタバタあるく音がうるさくて安眠できない。

彼女は母親に向いていないし、妻にも向いていない。もし母親・妻という身分から離れ、自分の好きなことをするのなら、皆にそこまで不快感を与えないかもしれない。だが不幸なことに、いま彼女はもう一人の男性の妻であり、二人の子どもの母親になってしまった。⁶³

語り手は、こうした態度と性格を変えなければ、彼女の家庭が幸せになることはできないという言葉で“よくない主婦”についての批判をしめくくっている。家も仕事も両方をこなそうと奮闘する女性が描かれる一方で、このような“非建設的生活を送る主婦”は自分勝手だとして批判の対象にされている。

3. 林海音「灯下漫筆（家常閑話）」

林海音（1918-2001）は 1948 年に来台後、「婦女與家庭」における「跛足的女兒（びっこの娘）」（1949.4.3）で作家としてデビューした。当時は『国語日報』「週末版」の主編を務め、同紙の原稿も執筆する傍らで、『中央日報』の「週末版」に原稿を発表していたが、「婦女與家庭」には計 48 編を発表し、鍾梅音に次いで掲載数の二番目に多い作家である。⁶⁴ 上述した謝冰瑩と惠香の連載が一段落した後、1951 年 9 月 27 日の第 92 期から連載「灯下漫筆（後に「家常閑話」と題名を変更）」がスタートしており、掲載数もこの時期から急増している。1952 年の 6 月まで、毎週一篇ずつ、家庭生活、子どもの教育、夫婦間の問題、生活の雑感などに関する 500 字程度の短文を発表した。「婦女與家庭」での掲載は、林海音が台湾籍作家を含め多くの作家を世に送り出した『聯合報』「副刊」の主編に就任する 1953 年まで続いた。この時期の散文は、1955 年 12 月に出版された初の散文集『冬青樹』（台北：重光出版社）に収められている。林のこれらの散文について、封徳屏は次のように述べている。

⁶³ 惠香「別具風格的太太」「婦女與家庭」『中央日報』（1950.1.21）

⁶⁴ 封徳屏『『遷台初期文學女性的聲音』—武月卿主編《中央日報・婦女與家庭週刊》為研究場域』『永恆的溫柔：琦君及其同輩女作家學術研討會論文集』（李瑞騰主編、国立中央大学琦君研究中心、2006）p.19

特筆すべきは、あの物資がなく生活が貧しかった日々にあつて、林海音の苦勞や悲嘆がついぞみられないことだ。むしろ彼女は普通の日々を送ろうと努力し、一人の家庭の主婦の立場から、書くことを愛し、家庭の生活費を分担し、樂觀と希望に満ちた主婦の心の声を発信した。⁶⁵

封によれば、林海音のこれらの散文は現実的生活により発せられた声であつて、政治的支配や反共文学の影などは微塵も感じられない。「回到厨房(厨房へ帰る)」(1950.1.29)は、日常的な主婦の心境を描いた作品であるが、そこには仕事を続けたいが子どもたちのために専業主婦になろうとする女性が登場する。語り手は、もとは職業婦人で、三人の子どもがある。毎朝使用人にこまごまと指示をして職場に出かけ、仕事が終わると真っ先に職場を出て子どもの待つ家へと向かい、子どもをなだめつつ、即座に食事の支度にとりかかる。このように多忙な毎日を送っていたが、使用人が結婚して辞めてしまうのを機に、自分が家庭に戻ることを“決意”した。実は、この決意は初めてではない。語り手は以前第三子を身ごもった際に仕事を辞めたときのことを回想する。

あの頃私にはもう二人の子どもがいた。下の子にはまだ授乳していた。図書館で目録編纂の仕事をし、家が遠くて昼食には戻れなかったので、家のことはすべて女中さんにやってもらっていた。午後はずっと、自転車で汗びっしょりになりながら、大急ぎで家に帰る。一日中母親に会えなかった子どもは、カチカチに張ったお乳を懸命に吸っていたが、すぐにお腹をこわしてしまった。医者の中には「十数時間も溜めておいた母乳を飲ませるからですよ、やはり断乳しなさい！」⁶⁶

文中の描写は、林海音の実体験と重なるところが多い。大陸時代、林海音は夫夏承楹と結婚し、大家族の嫁として夫の家に入ったが、舅の紹介で図書館の書籍整理の仕事に就いている。その後、大家族から独立して夫と子どもだけの“小家庭”を築いたが、第三子を身ごもってあまりの多忙さに一度仕事を辞めている。文中では、今回、ふたたび家庭に戻るにあたり、前回より徹底して家事を極め、そこに意義を見出そうとする主婦の姿が描かれる。

庭を掃除したり雑草を撮ったりするのは楽しくできる。米の配給に並んだり、□□(※判読不明)するのも見識を深める。家族の食べるご飯は毎回自分で作る。これはあ

⁶⁵ 封徳屏『『遷台初期文學女性的聲音』—武月卿主編《中央日報・婦女與家庭週刊》為研究場域』『永恆的溫柔：琦君及其同輩女作家學術檢討會論文集』(李瑞騰主編、国立中央大学琦君研究中心、2006) p.19

⁶⁶ 林海音「回到厨房」「婦女與家庭」『中央日報』(1950.1.29)

の頃、学生や教授が本を探るとき、すべての本が私の分類した目録を使っていたというのと同じように、有意義なことなのではないか？⁶⁷

文中にはさらに、仕事を辞めた後は以前より節約するようになり、徹底して家事レベルを上げようと努力する姿が描かれる。しかし何より、あっという間に成長してしまう子どもたちをより細やかにケアするために、家に戻る決意をしたことが強調されている。仕事と家庭の両立を理想としながらも、一時的に仕事を辞めて子どもを優先させる、しかし家に入っても家事に意義を見出し、常に満足と達成感を模索する主婦像は、林海音自身の投影でもある。

4. 孟瑤「給女孩子的信（少女たちへの手紙）」

孟瑤（1919-2000）は長編小説・歴史小説を得意とする作家であり、著作に数十編の長編がある。“家庭”というテーマは、創刊号から主流の題材として登場しているが、それらは「家庭を守ることは主婦として当然の任務」という認識でおおむね一致しており、女性問題に関して激しい論争が交わされることも少なかった。これに対し、孟瑤は「弱者，你的名字是女人（弱きものよ、汝の名は女なり）」（1950.5.21）において、かなり強い口調で、家庭が女性の足枷となっている現実を指摘している。本篇は「婦女與家庭」でのデビュー作であり、孟瑤が台湾で初めて発表した作品でもある。

この言葉（弱きものよ、汝の名は女なり）は針のように、私の心を突き刺し、血で真っ赤に濡らす。そう、「母親」は女を跪かせ、「妻」は女の頭を垂れさせる。—中略—家、それは私にすべてをもたらした、しかしそれは同時に私の希望と夢を摘み取っていった。⁶⁸

孟瑤は、家庭は女性を縛り付ける牢獄であるという極めて悲観的な描写をしており、文章の後半ではさらにその表現は激しくなる。

私には家が見えない、見えるのはただ堅牢な鎖だけで、それは私の四肢と脳を無情に縛り付ける。私には子どもが見えない、見えるのはただ恐ろしい蛇と蠍だけで、欲深く私のすべてを飲み込もうとする。⁶⁹

⁶⁷ 林海音「回到厨房」「婦女與家庭」『中央日報』（1950.1.29）

⁶⁸ 孟瑤「弱者，你的名字是女人」「婦女與家庭」『中央日報』（1950.5.21）

⁶⁹ 孟瑤「弱者，你的名字是女人」「婦女與家庭」『中央日報』（1950.5.21）

女性の家庭における矛盾を赤裸々に吐露したこの文章は、少なからず反響を呼んだ。例えば殷俊という読者は「男人、你的名字是弱者(男よ、汝の名は弱者なり)」(1950.5.21、第 61 期)で、孟瑶の文章をもじり『夫』は男の筋をひきつらせ、『父親』は男の皮を剥ぐ」と、男性側の婚姻における苦難を示し、国家の大事においては、男女がともにそれぞれの責務を果たすべきだと述べた。また、伍恵という人物が「弱者的名字是弱者！」(1950.5.21)において、「知恵と能力のある母親ならば、家庭の雑事のなかに理想を埋没させることはない」として、家事や育児の短い隙間をぬって時間を捻出し、少しずつでも前進すべきと述べている。このほか、家庭を守ることこそ妻の賢さであるという女性読者からの批判もみられた。こうした応酬は三期にわたり掲載されたが、孟瑶は正式な答えとして「我的答復」(1950.5.28)という一文を発表している。ただ、それは「伝統的束縛の中に封印され朽ち果てようとしていた希望と夢を、拾い上げ、日の目を見せたい」という内容で終息しており、議論をさらなる論争に発展させようとする姿勢はみられない。孟瑶は、胸の中で押さえつけられていた感情を吐露させるために最初の文章を書いたと述べており、当初の激しさはすでに文中からなくなっている。

一方、孟瑶は 1952 年 7 月 24 日の第 127 期から、林海音に代わって連載「給女孩子的信(少女たちへの手紙)」を開始しており、1953 年 8 月 26 日の第 181 期まで、計 20 回掲載している。それぞれ「談讀書」「談惜時」「談健康」「談器度」「談勤檢」「談清閑」「談交遊」「談婚姻」「談家庭与事業」「談女性」「談人生信念」「談性格修養」「談鎮定」「談朝氣」「談取與予」「好勝與忌妒」「自知與自信」「群居与独居」「勇敢與驕傲」「感情與理知」という副題がつけられている。このうち「談家庭與事業」における言説は、くだんの「弱者…」より冷静で、また女性と家庭、家庭と仕事の両立について、ある意味理想的ともいえる回答を出している。

かつて、私たちが分かっていたいなかったのは、家庭と仕事とを、完全に衝突する両立不可能なものだと頑なに思い込んでいたことだ。そのためにどちらか一つを救い、一つを犠牲にしていたのである。しかし実際には、予め見極めておけば両立できるのである。家庭と仕事の調和をいかにとるか、最も重要なカギは伴侶なのだ。なぜなら夫は妻の仕事が成功するかどうかに直接または間接的な影響を及ぼすからだ。

孟瑶はこのなかで、妻の仕事に理解があり協力的な伴侶を選ぶことが重要だと述べ、それができれば夫婦が互いに助け合える家庭を築けると述べている。また、家事に関しては、今後は電化製品など家事の時間を短縮できる道具が出てくるため、自分の理想をあきらめず、勉学に励んでおかなければならないと呼びかけている。

5. 鍾梅音「毎週漫談」

鍾梅音（1922-1984）は、遷台後、夫余伯旗の仕事の関係で、台湾東北部の海に近い蘇澳に転居した。幼い頃から持病の喘息があり生涯悩まされたが、静かな海辺の家には女性作家仲間がよく訪ねてきて一緒に過ごした。鍾梅音は1949年8月14・15日、まず『中央日報』「復刊」に遷台後初めて「鶏的故事」を発表した。「婦女與家庭」での掲載は同年8月14日第22期の「父親的悲哀（父の悲しみ）」からである。創作は散文が主であり、蘇澳から台北へ転居するまでの6年間に、中央日報の二つの副刊や『大華晚報』などに大量の作品を発表し、1951年には初の散文集『冷泉心影』（重光出版社）を出版している。1950年の5月頃までは、主に『大華晚報』に掲載が集中しており、1952年10月2日から「婦女與家庭」での連載「毎週漫談」が開始する。その後、1954年初めにかけて、ほぼ1年半の間「音」と「小芙」という二つのペンネームを交互に使って散文を発表した。それらを含め「婦女與家庭」には約70編を掲載し、掲載数が最も多い作家である。作家活動のほか、台湾で初めてテレビ番組の女性司会者を務め、また国民党婦工会の雑誌『婦女』の主編としても活躍した。

女性に関する文章を多く扱った「婦女與家庭」欄においては、“賢妻良母（良妻賢母）”についての言説が頻繁に登場するが、鍾梅音の「賢妻良母需要智慧（良妻賢母には知恵が必要）」（1952.1.17）は、孟瑤が同欄で発表した文章にコメントし、良妻賢母を肯定したものである。孟瑤は1951年12月27日の「牝鶏司晨（めんどりが時を告げる）」において、「女性は中学卒業後には各々興味のある方向に進学すればよい、家事が好きなら家政を学び、夫に仕える良い妻となり、仕事が好きなら社会的事業に関わり、科学者や文学者、政治家などを目指せばよい」⁷⁰と主張したが、鍾梅音はこれをやんわりと批判した。

現在の女子教育が満足できるものではないことは、私ももちろん同感である。しかし、孟瑤女史の提案は少し無理があると思う。このようにはっきりと線引きしてしまったとしたら、もし私が男性ならやはり配偶者には良妻賢母の方を選ぶだろう...一番の理想というならなおさらである...、男性なら誰でもきっと私のやり方と同じだと思う。—中略—女性が直接的にせよ間接的にせよ、社会と国家に貢献するためには、気概だけで物事をするにはできないし、良妻賢母の教育を恥とみなすことはできない。形式上の平等を捨てて、人格のうえでの平等を尊重すべきである。⁷¹

⁷⁰ 孟瑤「牝鶏司晨」「婦女與家庭」『中央日報』（1951.12.27）

⁷¹ 鍾梅音「賢妻良母需要智慧」「婦女與家庭」『中央日報』（1952.1.17）

この文章にみられるように、鍾梅音の主張は“賢妻良母”に対し肯定的であり、女性の限定された家庭役割を問題視するよりも、より良い家庭を営むよう努力し、社会と国家に貢献することを優先させる。これは国民党政府が理想としていた内助の功を重視する良妻賢母に通ずるものがある。

6. 艾雯「主婦随筆」

艾雯（1923-2009）は、第一世代の遷台女性のなかでは若手であるが、大陸時代すでに作家として創作を開始しており、1951年には台湾で散文集『青春編』（啓文出版社）を上梓した。遷台後は高雄の崗山に居住して再び筆をとり、「婦女與家庭」におけるデビューは1949年9月25日第28期である。同欄で5編の子育てに関する散文を発表した後、1954年1月13日第202期から連載「主婦随筆」をスタートして、丸一年の間続いている。この連載は武月卿主編の「婦女與家庭」において最後のシリーズとなり、1955年6月に『生活小品』（台北：国華出版社、1955.8）としてまとめられた。1955年には中国青年写作協会の「全国の青年が最も愛する作家」の一位に選ばれている。その誠実で上品、かつ思いやりに溢れた主婦像は「主婦與写作（主婦と創作）」（1952.1.1）にも顕著に現れる。これは語り手からある女性への手紙の形式で、その女性は小さな子どもを抱え、自分の時間をほとんど持てないほどに多忙な生活を送っている。

世間の男性は仕事と名誉を持っており、煩雑な家事からいかに逃れるかを知っているため、「男は外、女は内」という規則をつくり、女性を家の中に閉じ込めました。—中略—女性は結婚したら何でも放棄してしまう。何千年もの間、輝かしい理想は雑事に埋もれ、いかに多くの才能と知恵が、雑多な日常のことがらのために埋もれてしまったでしょうか。⁷²

しかし、語り手は彼女に、視野を広く持ち、自分の時間をもつことを勧めている。さらに家に囚われの身になると、贅沢や墮落の方向へ向かっていくため、何か一つ心を豊かにすることを持って、たましいを潤し心のよりどころをつくるよう注意を促す。

だから、私はどんなに時間に余裕がなくとも、私はやはり隙間の閑をみつけて、一段書いて、また隙をみて何フレーズか書くのです。手で作業をしながら、頭では原稿のことを考える。半分はそれで精神上的の予防接種をするのです。—中略—しかもいくばくかの原稿料ももらえて、少しは好きなものを買ったり、生活費として使ったりできる。創作や読書に興味があるなら、家庭の主婦にとって創作というのは一

⁷² 艾雯「主婦與寫作」「婦女與家庭」『中央日報』（1952.1.1）

番ふさわしいと思います。⁷³

そして最後に、決して日々の生活だけに埋没せず、自分を充実させるよう努力を続けてほしい、と呼びかけている。艾雯は10代後半～20代前半の青年時代に日中戦争を経験しており、戦争による幸せな家庭の崩壊は彼女に挫折感を味わさせた。艾雯にとって創作とは、「寂しいときこそ人は創作ができ、孤独なときこそ思想が慰めとなる」⁷⁴と本人が語っているように、心情を吐露する喜びであった。

以上、6人の作家を中心にみてきたが、国民党機関紙『中央日報』「婦女與家庭」において発信された主婦言説には、以下のような特徴がみられた。第一に、主婦にとっての悩みとして、家事と仕事の両立を挙げている。第二に、主婦は家庭の主宰者であり、主体性をもって幸せな家庭を築いていく存在であると認識している。第三に、主婦は家と日常にのみ埋没するのではなく、自身を高める必要があると常に主張する。第一の“二重負担”の問題については、その言説に各人温度差があった。謝冰瑩、徐鍾珮、孟瑤らは、二重負担の抑圧がもたらす主婦の苦悩を問題視し憂いている。孟瑤に至っては育児・家事は女性の足枷になると断言さえしていた。それに比べて林海音、鍾梅音の言説からは、夫や子どもとの睦まじい家庭を創造することを第一に考え、そのうえで仕事と自己実現をすればよいという主婦像が浮かび上がる。しかし謝、徐、孟、および艾雯は、女性が家庭に縛られることを憂いながらも、その解決方法を、自分自身の向上、精進のなかにも求める傾向がみられ、これは林、鍾にも共通している。第二、第三の特徴に関しては、各作家とも差異がなく、主婦・女性はただ享乐的、軽薄に過ごすのではなく、教育を受けて教養を身につけ、経済力もつけるべきであるという認識は一致している。

四. 近代家族と良妻賢母

上述の遷台女性作家の文章に頻繁にみられる“賢妻良母⁷⁵”という概念について、ここで説明を加えておきたい。日本における“良妻賢母”思想については、小野静子が著書『良妻賢母という規範』⁷⁶のなかで、明治以降の近代国家の建設に伴い登場したものであると述べている。江戸時代には、女は男に比べて愚かなものとされ、夫や舅姑に対し従順な妻である“良妻”像が求められていた。明治以降、近代国家の建設とそれを支えていく国民の養成が国家的課題となり、まず子どもを育て、教育する母役割が、やがては責任

⁷³ 艾雯「主婦與寫作」「婦女與家庭」『中央日報』（1952.1.1）

⁷⁴ 艾雯「寫在前面」『青春篇』（台北：爾雅出版社、1987）p.9

⁷⁵ 日本語では“良妻賢母”という。本稿の文中では、日本語の良妻賢母、または中国語の“賢妻良母”を用いる。

⁷⁶ 小野静子『良妻賢母という規範』（勁草書房、1991）

をもって家事を取り仕切る妻役割が強調され、“良妻賢母”の育成を目的とする女子教育の充実が主張されていった。小野はさらに、女性の仕事とされた家事・育児・内助などは家庭において行われる役割ではあったが、国家の発展にとっても重要な意義をもつものとして価値づけられたとしている。すなわち「男が直接的に生産活動や兵役に従事することによって近代国家の国民となるのと異なり、女はその男の活動を家庭にあって支え、次の世代を育てていくことによって、間接的に国民としてとらえられ、国民統合されていったのである。そしてそれを合理化する思想が良妻賢母思想であった。」⁷⁷ このような思想が 19 世紀末以降、形を変えながらも中国へ流入する。白水紀子は「中国における『近代家族』の形成—女性の国民化と二重役割の歴史—」において、中国の良妻賢母の概念とは近代国家建設のために“近代家族”の中で女性が担うべき新しい役割を言ったものであるとしている。さらに、近代化がいち早く始まった西洋がその起源であることを指摘し「つまり、良妻賢母思想は、ジェンダー規範を一方の極に最大限に推し進めた近代の産物であり、近代国家建設・近代家族の形成を内側から支えるイデオロギーとして女性に作用した、当時としては極めて新しい思想であり規範であった」と述べている。⁷⁸ “近代家族”とは、恋愛によって結ばれた夫婦、子ども中心の核家族、家庭役割（男は外、女は内）などの要素により構築された新しい家庭概念をいう⁷⁹。1911 年の辛亥革命後、帝政は倒れたが、袁世凱による専制政権に代わられ、新たに成立した中華民国は日本から不平等条約対華 21 カ条を突き付けられた。さらに第 1 次世界大戦が終結し 1919 年ベルサイユ条約が締結されると、それに抗議する五四運動が勃発、これに伴い世界における中国のポジションを模索する知識分子たちによって新文化運動が推進される。末次玲子によれば、新文化運動の影響を受けて、民族運動に救国とジェンダー構造の変革を意識的に結合させる姿勢が生じ、この時期においてナショナリズムとジェンダー構造の変革は友好関係にあった。⁸⁰ こうしたなかで女性の社会進出も増加し、上海や北京など大都市では職業をもつ女性があらわれる。末次はまた 1920～30 年の上海には、近代

⁷⁷ 小野静子『良妻賢母という規範』（勁草書房、1991）p.234

⁷⁸ 白水紀子「中国における『近代家族』の形成—女性の国民化と二重役割の歴史—」（横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ（人文科学）（6）p135-151 2004.3）白水紀子はまた同論文において、それ以前の「女子は才なきが徳」「三従の教え」という儒教の説く女性像とは大きく異なり、19 世紀末に日本経由で伝えられたものであると指摘している。

⁷⁹ 落合恵美子『近代家族像とフェミニズム』（1989）によれば、近代家族の特徴は 1. 家内領域と公共領域の分離、2. 家族成員相互の強い情緒的關係、3. 子ども中心主義、4. 男は公共領域・女は家内領域という性別分業、5. 家族の集団性の強化、6. 社交の衰退、7. 非親族の排除、8. 核家族である。またエドワード・ショーター『近代家族の形成』によれば、近代家族の要件は 1. ロマン革命、2. 母子の情緒的絆、3. 世帯の自律性である。

⁸⁰ 末次玲子『二〇世紀中国女性史』（青木書店、2009）p.103

的な職業をもち、主体的に生きようとする「新女性」が登場した、と指摘している。⁸¹ Sharon R. Wesoky もまた、清末から民国期（1912年以降）にかけ、西洋思想が流入し、中国におけるモダニティの発生に伴い、女性問題が主要なテーマとして注目されたことに言及している。⁸² 遷台女性作家とは、大陸時代、まさにこのようなジェンダーの変革期を経験してきた女性たちであった。

上述のように、良妻賢母思想とは中国の近代国家建設と緊密に連携しながら誕生した概念であったが、遷台女性作家の描く主婦像も、このような良妻賢母—近代家族の主婦像に通ずる。白水紀子はまた別の論文「中国文学にみる『近代家族』批判」において、良妻賢母の存在場所としての“近代家族”に対し、中国ではすでに1920年代半ばころには廬隱、沈櫻、丁玲らの女性作家たちによってこの“新しい家庭”に対する批判—恋愛によって結ばれた近代家族であるにもかかわらず、結婚後は夫との関係はヨコからタテの関係に変わり、家事や育児に追われ、男性に社会事業を独占され、独立した人格を失う—という批判がおこなわれていた、と指摘している。⁸³ また同論文では、謝冰心の『兩個家庭』（1918年）を、西洋型近代家族を理想的なモデルとした最初の小説としてとりあげている。それによれば『兩個家庭』には高等教育を受けた夫婦と子どもで構成された二組の家庭が対照的に描かれるが、前者の妻は「家庭の主婦として、子供に科学的な教育を施すことに力を注ぎ、女中に文字を教え、余暇に夫の翻訳の清書を手伝い、さらにみずから料理をし室内装飾に気を配る、典型的な近代主婦家庭の主婦」、後者の妻は「子どもに一人ずつ女中をつけ、世話は彼女たちに任せたまま、子供の教育などそもそも考えたこともないような遊び好きの女性」である。家族にとってのオアシスのような家庭を作っている良妻賢母が主婦の理想像として描かれるのである。白水はこれを謝冰心の博愛思想、母の愛の力を讃える思想にもとづくとしながらも、廬隱らが作品中で指摘していた現実的な女性の二重負担や経済的自立に対する問題意識が希薄であることを指摘している。

近代家族の問題という点からみると、遷台女性作家の言説にみられる良妻賢母像、二重負担の問題をかかえる近代主婦像は、1920年代の大陸で、女性作家たちによってすでに描かれていたことがわかる。そして林海音、鍾梅音、艾雯の描写からみると、その主婦像の理想は謝冰心の『兩個家庭』において示された近代主婦により近く、王鈺婷のいう“家中天使”を彷彿とさせる。

⁸¹ 末次玲子『二〇世紀中国女性史』（青木書店、2009）p.195

⁸² Sharon R. Wesoky. “Bringing the Jia Back into Guojia”, *Signs*. Vol.40, No.3, spring 2015, 649-669

⁸³ 白水紀子「中国文学にみる『近代家族』批判—日中女性文学を通して—」『東洋文化研究所紀要』（143）（2003.3）p.123-169

五. 「婦女與家庭」をとりまく女性政策と背景

ここで、「婦女與家庭」をとりまく社会背景として、国民党の政策と、その理想とする女性のあり方について触れておきたい。「婦女與家庭」に掲載された文章をみるかぎり、多くの先行研究が指摘するように、政治的スローガンなどは文中にほとんどみられない。しかし、同時期の『中央日報』本体を見れば、国民政府の政策的意図を読みとることができる。

(一) 元旦講話と三八節講話

毎年元旦に『中央日報』一面に掲載される総統講話には、「全国の同胞は心を一つにし反共を徹底せよ」⁸⁴「反共抗ソのための総動員を引き続き全力で推進」⁸⁵「今年は反共復国のカギとなる一年」⁸⁶などといったスローガンが掲げられており、政府の大陸反攻への強い意志がみられる。女性政策については、三八節⁸⁷の社説などからその特徴をみることができる。以下は1950年3月8日の社説「記念三八節」であるが、欧米の女性が自由解放を手にした歴史を振り返りつつ、中国（中華民国）の女性の地位の低さを指摘し、男尊女卑の伝統的観念を打破すべきと呼びかけている。

中国女性が社会的なあるべき地位を得ていないこと、その原因は女子教育の機会が少なすぎることにあり、今後われわれの女性運動の方針としては、男女の教育の機会均等を第一の意義とすべきである。男女の教育の機会均等は、立法の問題ではなく、一般人のもつ男尊女卑の伝統的観念をいかに打破するかという問題なのである。ゆえに、今後はまず先に覚醒した女性が、各分野で男尊女卑という伝統的観念を打破するための文化闘争を展開すべきであり、今日三八節を記念する真の意義はそこにある。⁸⁸

上記の伝統的観念の打破、女性の地位向上という呼びかけには、進歩的な男女平等という思想がうたわれる一方で、知識人女性に対する国家の期待感も窺える。しかし女性の地位向上というスローガンは“自由中国⁸⁹”の知的な女性が反共の国家建設において担

⁸⁴ 「總裁號召全國同胞 萬眾一心反共到底」『中央日報』（1950.1.1）

⁸⁵ 「總統發表元日文告 提示軍民努力目標」『中央日報』（1953.1.1）

⁸⁶ 「總統元日照告軍民 擴大成就迎接艱鉅」『中央日報』（1954.1.1）

⁸⁷ 1909年3月8日にアメリカの婦人団体が自由解放を求めるデモをおこない、翌年同日に平等な権利を勝ち取り世界婦人大会を開催したことに因んだ女性開放の記念日。中国では“三八節”と称する。婦人デー。

⁸⁸ 「記念三八節」『中央日報』（1950.3.8）

⁸⁹ 冷戦下、大陸の「共産中国（レッドチャイナ）」に対し、台湾は「自由中国（フリーチャイナ）」と称された。この「自由中国」という名称は政治的宣伝や女性問題を語る際、国民党の中華民国が自由と民主の国であることを印象付けるため、しばしば用いられた。

う役割へと、巧妙にスライドしていったように思われる。1951年の三八節社説では、欧州の女性運動で自由を勝ち得た女性のなかには、享楽至上主義に走った人々もおり、反動勢力の打撃を受けたと指摘され、女性解放のあり方について以下のように述べられている。

しかし女性たちは自身の解放のために最善の努力をしなければならない。女性たちが今後進むべき道はすなわち、厨房の中でも国家社会を忘れず、社会の各分野の仕事の中でも厨房の重要性を忘れず、また都市の上層の女性、とくに浪費と怠惰という習慣を克服し、勤勉な労働女性たちの模範とならなければならない、そうしてこそ、婦女解放に反対する者に乗じる隙を与えずにいられるのだ。⁹⁰

さらに 1953年の三八節に掲載された文章には、蒋介石夫人宋美齡を頂点とする自由中国の女性という構図がより顕著にあらわれてくる。

自由中国の女性同胞は、蔣夫人の偉大かつ賢明な統率のもと、われわれがなすべき職責をまっとうし、中華婦女反共抗ソ聯合会を組織し、婦女運動委員会を設立し、情熱と良心と誠意を有する女性たちを広く動員して戦時活動を展開した。—中略—現在、全世界8億余の人々が赤色帝国主義の奴隷と化し、財産を奪われ、自由をはく奪され、思想を画一化され、生命を脅かされ、家庭は壊され、身体は凌辱されている。中華民族が、全世界の自由を愛する人民が、永久的苦境に陥っているいま、それらの人民、それらの女性たちを救うことは、自由世界の女性の責任であり、自由中国の女性が担うべき任務である。⁹¹

女性の権利そのものを求めるというより、恐るべき赤色中国から女性を救うため立ち上がるべきだという主張が強く打ち出されている。

(二) 中華婦女反共抗ソ聯合会

1950年に設立された中華婦女反共抗ソ聯合会は、第一夫人宋美齡を中心とし、反共抗ソの偉業を成就するために貢献することを主旨とする婦人団体であった。台湾は戦時体制にあり、大陸反攻に向けて人民は一丸となって団結しなければならず、そのためには、これまで疎かにされてきた女性の力をも重視すべきだというメッセージが発せられた。設立の経緯は国立台湾歴史博物館のウェブサイト⁹²に詳しいが、それによれば、まず婦

⁹⁰ 「婦女節」『中央日報』（1951.3.8）

⁹¹ 「紀念三八節」『中央日報』（1953.3.8）

⁹² 「婦女運動」（国立台湾歴史博物館 HP）

<http://women.nmth.gov.tw/zh-tw/Content/Content.aspx?para=307&page=0&Class=85>

人運動家として著名な皮以書、錢劍秋、錢用和、王亜権らにより組織が構築され、鄭毓秀、呂錦花、李緞ら政府・軍高官及び外交官の夫人が主要な幹部として招かれ中華婦女反共抗ソ聯合会（婦聯会）が設立された。これら高官夫人が模範を示したことで各地の女性の関心を呼び、組織は迅速に拡大し、台湾全土に分会と実動部隊が設立された。活動主旨は軍人及びその家族に対する奉仕であり、とくに物資の乏しい 1950 年代の台湾において、軍服の縫製は同会の大きな仕事となった。また同会は良妻賢母の模範を示し、夫を助け子を教育する役割を担うことにより、「齊家報国（家庭を整え国の恩に報いる）」の任務を果たすべきとする主張を提示した。このほか、軍の慰労や眷村の建設、牛乳供給所の設置、小学校や託児所の設立などをおこなった。さらに女性問題についても高い関心を持ち、「養女保護運動」などを通して社会的弱者である女性の生活改善と地位向上のための活動を展開した。さらに、中華婦女反共抗ソ聯合会が発行する雑誌『中華婦女』にも、反共抗ソのスローガンが顕著にみられる。

女性は過去の社会において、もとは抑圧された一群であった。しかし時代は変わり、女性の偉大かつ潜在的な力は、現在社会において絶えず示されている。われわれ女性は生理のうえでは先天的な制限があるが、優美な品性をもっている。社会において女性の力をおろそかにするならば、人的動員において半分の戦略的パワーを減少させることとなる—中略—今日、われわれ女性は迅速に動員され、偉大な女性指導者蒋介石夫人率いる反共抗ソの鮮明な旗印のもと、全世界の民主国家の女性と力を合わせ、世界の平和を護り、民主と自由のために徹底的に奮闘しなければならない。

93

国民党の女性政策は、大陸での抗日戦争時期から、一貫して国家建設と密接に結びついたものであった。1934年2月、蒋介石はその国家建設において重要な役割を担ったとされる新生活運動を発動、1949年まで15年間にわたり実施した。段瑞聡『蒋介石と新生活運動』によれば、新生活運動とは「礼・義・廉・恥」という伝統的な道徳を基本精神とし、国民生活の「軍事化・生産化・芸術化（合理化）」を中心目標とし、「整齐（整然さ）・清潔・簡単・素朴・迅速・确实」を実施原則とし、それを「衣・食・住・行」、つまり人々の生活に体現させることにより、近代国家の達成をめざすものであった。⁹⁴ 女性政策の面においては、宋美齡を指導長とする新生活運動促進総会婦女指導委員会によって、全国の女性を「抗戦建国」に動員するための活動が推進された。女性たちは婦

（2015年4月29日閲覧）

⁹³ 莫希平「創刊献詞」『中華婦女』（中華婦女反共抗ソ連合会、1950.7）

⁹⁴ 段瑞聡『蒋介石と新生活運動』（慶應義塾大学出版会、2006）p.4

人生活の指導、軍人に対する奉仕、生産活動、児童保育活動などに参加し、婦人幹部の養成もおこなわれた。⁹⁵ これに関連して、洪宜嬪は「中国国民党婦女工作之研究（1924－1949）」のなかで、抗戦建国の要求に則り、国民党の抗戦期における女性政策の主要な目標は、女性をいかに抗戦に動員するかであったと指摘している。そのなかには女性の権益保護、生育奨励、母親による教育、賢母精神、家事教育の重視、女性による家庭生活と社会活動の両立、男女分業を強調することなども含まれていた。国民党にとっての理想的女性とは、前線の男性が安心して戦えるように支え、後方で人的・物的資源を生産し維持する女性であった。さらに戦後、国家の再興と国共内戦の政治的局面に合わせ、女性政策は女性の反共活動への参加に対する呼びかけへと転換していった。⁹⁶ 国民党は国家建設への女性動員のために、政府主導によって女性組織と活動を推進し、それは一定の成果を上げたが、その一方で、民間の大規模な女性運動や組織は抑制された。洪は国民党の女性政策が台湾の女性運動に与えた影響について、国民党は管理しやすいよう、民間の運動を一つの組織で管理しており、それは婦人運動家にとって障碍となり、組織団体の設立を制限し、女性団体と婦人運動の発展をさりげなく抑制していたことを挙げ、国民党の女性政策は、婦人運動家にとっては利害、弊害ともに存在していたと指摘している。

小結

1950年代前半、『中央日報』「婦女與家庭」の掲載がスタートし、遷台女性作家たちの台湾における作家活動が開始した。自ら有する知識を生かし、台湾という見知らぬ小島にありながら、ようやくたどり着いた新たな活躍の場で、作家たちは筆を振るった。そこで発信された主婦言説には、家庭を守り仕事をもつ、家事と仕事の両立に悩む職業婦人、家庭での役割に疑問をもつ女性、読書や創作によって知識を広め、心豊かに日々を送ろうと呼びかける主婦、子どものために快適で幸福な家庭を築きたいと願う母親の姿が表れていた。それらの描写を総合すると、伝統的家父長制における女性とは異なる近代主婦の自覚をベースにした主婦像が看取できる。それは、すでに19世紀末から近代国家建設を目的として提唱された、“近代家族の良妻賢母”という概念の延長線上にあるとみることができる。一方、当時の台湾における社会状況から考えると、国民党政権により反共抗ソ一色の政策が推進されるなか、大陸反攻という政治目標のもとで政府が求めていた女性像とは、知的であるとともに、内助の功を発揮し国家建設のために奉仕する女性であった。それは、前向きで有能な主婦を理想とする点で、遷台女性作家の言説

⁹⁵ 段瑞聡『蒋介石と新生活運動』（慶應義塾大学出版会、2006）p.233

⁹⁶ 洪宜嬪「中国国民党婦女工作之研究（1924-1949）」（国立政治大学歴史学系研究所修士論文、2008）p.341、p.347

と少なからず重なる。また 1950 年代の遷台女性作家による主婦像は、少なくとも『婦女與家庭』をみるかぎりでは、二重負担の問題を提示しながらも、その背景にある社会構造や思想を批判する姿勢はみられない。問題提起しつつも、批判へ発展しなかった背景には、自由な女性運動を抑制しようとした政策の影響があったと思われる。フェミニズムの観点からみれば、1920 年代の女性文学において近代家族への批判がすでにあったことを考えると、遷台女性作家の言説は比較的保守的であったとも言える。しかし、本稿ではこれらの言説を、単に政策に迎合した保守的なものとして説明するのではなく、むしろそこに、戦争の苦しみから逃れ、ようやく落ち着いた新しい生活環境で自らを向上させようとした、女性たちの現実的な声が反映されていたととらえたい。そのうち、林海音と鍾梅音は、台湾の新家庭で生活する主婦を非常に肯定的に描いていたことに特徴がある。次の章では、“半山”のアイデンティティを持つ林海音との比較として、まず生粋の“唐山”（外省人）である鍾梅音の主婦像について、その形成過程を分析する。

第二章 鍾梅音—風と緑に囲まれた海辺の“小家庭”

第一節 病魔と闘い続けた写実の名手⁹⁷—プロフィールと評価

鍾梅音は1922年1月25日、北京に生まれた。父の本籍は福建省上杭であった。3歳のとき、医者 of 誤診で風邪から気管支炎を発症し、生涯を通して悩まされる持病を患うことになる。

鍾梅音の生涯とは、絶えず死神と病魔との闘いであった。しかし彼女はそれを理由にすることなく、むしろ力を尽くして創作に励み、生命の一瞬一瞬を燃やしつづけた。⁹⁸

台湾に渡った後、62歳の生涯を終えるまで精力的に活動した鍾梅音を、応鳳凰はこのように評している。応鳳凰によれば、鍾梅音の文芸への興味は、父と祖父の影響によるところが大きかった。父鍾之琪は、西南長官公署⁹⁹の軍法処長も務めた人物であり、文才にも優れ、著書に『盧園詩存』がある。また祖父邱澥山は、別号を潜廬主人といい、南社の詩友であった。この二人から受けた薫陶は、大学を卒業できなかった鍾梅音の、創作と芸術の素地をつくる源となった。しかし少女時代の病弱な梅音にとって、進学は険しい道のりであった。

1928年、一家で南京に移り住み、漢西門小学校に進学するが病気のために登校も途切れがちとなる。ようやく小学4年生を修了したときには、もう12歳になっていた。5年生に上る際、名門の中華女子中学（現南京大学附属中学）に合格したものの、両親は通学できるかどうか定かでないこの贅沢な投資を許さず、市立の漢西門小学校に進学させた。1936年に同校を卒業し、南京市の統一試験で二位という優秀な成績で、奨学金を受け中央大学実験学校（現南京師範大学附属中学）に進学する。だが、結局一学期が終わらないうちに再び喘息を発症し、わずか二カ月で実家に戻り、静養しなければならなくなった。1937年、5年制の湖北藝術専科学校に進学することができたが、同年7月7日、

⁹⁷ 本節のタイトルは応鳳凰、鄭秀婷「與病魔抗争的寫実能手」『台灣現当代作家研究資料彙編』64（封徳屏・総策畫、王鈺婷・編選、財団法人台湾文学發展基金会・編印、国立台湾文学館出版、2014）p.141を参考に日本語訳したものである。

⁹⁸ 応鳳凰、鄭秀婷「與病魔抗争的寫実能手」『台灣現当代作家研究資料彙編』64（封徳屏・総策畫、王鈺婷・編選、財団法人台湾文学發展基金会・編印、国立台湾文学館出版、2014）p.141

⁹⁹ 国民政府と国防部の中国西南地区の派出機関であり、各省市の地方軍政機関の指導的立場を担った。

盧溝橋事件が勃発し、梅音の生活にも戦争が影を落としはじめる。

従兄とともに漢口へ転居した梅音は、湖北藝術学校に進学しようとするが、武漢大撤退のために入学をあきらめ、さらに広西へ避難する。1939年、鍾梅音は広西大学文法学院法律系に合格する。芸術方面に関心の深い梅音だったが、父の勧めにより法律系を受験したのである。ともあれ、夢にみた学生生活を始めようとしたその矢先、鍾梅音は、第五軍付きのエンジニアであった余伯祺と知り合う。二人はすぐに婚約し、1942年には結婚して雲南に転居する。

雲南で長男余伯正を出産し、光復後の1945年12月、夫と息子とともに初めて夫の実家がある上海へ戻り、梅音はそこで善後救済復員会の中国語秘書の職を得る。1947年秋には、長女余令怡を出産。翌年1948年3月1日、余伯祺と長男とともに台湾の基隆へ渡る。このとき長女を大陸においていくが、その後連絡がとれなくなったという。

1948年、鍾梅音一家は台湾の北東部海岸の蘇澳へ転居し、自然に囲まれた静謐な環境で創作を始める。1949年『中央日報』副刊でデビューし、一年後には故郷への思いや家庭生活について書かれた三十篇をまとめた散文集『冷泉心影』(1951)を出版している。ものを書くということのきっかけは、実は幼い頃からしばしば母や外祖母の手紙の代筆をしていたことも、その一つであった。母は、字は書けなかったが読むことはできた。母は子どもには理解しがたいような内容を表現するよう梅音に求めたため、常に三、四回は書きなおさねばならなかった。また、祖母は字が読めなかったが、代筆したあと、孫に書いたものをすべて読ませ、一字一句漏れがないかを確認した。梅音は祖母が満足するまで手直ししなければならなかった。二人の代筆の内容はいずれも複雑なことばかりで、それが鍾梅音を早熟な子どもにし、間接的に表現力が磨かれ、後の創作の基礎となったのである。1950年～1953年にかけて、鍾は『中央日報』「婦女与家庭」をはじめ、同報「副刊」、『大華晚報』、『中華日報』などに多数の文章を発表した。

1955年、一家は台北へ転居し、同年次女余令恬を出産する。翌1956年、王文漪、林海音らに請われて月刊『婦友』の主編となる。編集者としての鍾梅音について、同誌の前主編であった王文漪はこう回想している。

梅音の編集は素晴らしく、仕事も他の誰より速かった。—中略—編集者の苦労は編集の仕事をした者にしかわからない。以前、梅音がある女性作家の原稿を採用しなかったことがあった。その作家は非常に憤慨し、私たちの上司に抗議の手紙を送りつけてきた。その文面は本当にすさまじく、遠慮のないものだった。上司は梅音に、その女性作家に返事を書くよういつけたため、梅音はその作家の“偉大な”文章を細部まで詳しく分析し解説して返信した。原稿はすでに返してしまっていたが、梅

音は内容を明確に覚えており、彼女が原稿をすみずみまで読んで、真摯に編集の任にあたっていたことが分かった。こうしてようやく件の女性作家は心服し、その事件はおさまった。¹⁰⁰

梅音の編集に対する態度は非常に真面目で、「人を見ず、文を見る」——相手が有名な作家であるかどうかは関係なく、良い文章であれば採用したという。王文漪はまた、一般読者からの投稿を募った際、鍾梅音とともに掲載候補者の自宅を一つ一つ訪問し、本人が本当に書いたものであるか否かを調査したことなどにも触れている。このように、仕事を徹底して行っていたために、喘息が悪化し度々発作に見舞われるようになり、1957年には辞職している。

一方、遷台当初の鍾梅音は文筆業のかたわら、芸術への夢をかなえるために画を習い始め、晩年にはロサンゼルス芸術学院で個展を開いた。また娘をピアノの稽古に送った後の閑な時間を利用して、自らも音楽鑑賞力を養った。1958年、鍾は青年写作協会の招きにより、金門島へ軍の慰問に赴くが、そのときまさに八二三砲撃戦¹⁰¹が勃発する。台北へ戻った鍾梅音は、この経験をもとに、国軍の勇敢な若者たちを思い、混声合唱曲「金門頌」を作詞した。翌年には馬祖島を訪問し、俞南屏と協同による合唱曲「不朽の八二三」の歌詞を手がけ、芸術面におけるその才能を十分に発揮した。さらに1963年には、台湾テレビのトーク番組「芸文夜談」の司会者を務め、テレビ番組の司会を務めた初の女性作家となり、好評を博した。こうした仕事と家庭に追われる忙しい日々を送りつつ、散文創作は続けており、『母親的憶念』(1954)、『海濱隨筆』(1954)、『小樓聽雨集』(1958)、『塞上行』(1964)などの著書をのこした。散文作家として有名な鍾梅音であるが、唯一の短編小説集に『遲開的茉莉』(1957)もある。

鍾梅音の創作のうち、紀行文の分野は定評があり、とくに紀行エッセイ集『海天遊蹤』(上下巻 1966・1967)は高い評価を得ている。1964年6月、鍾梅音は夫の仕事に伴い、アジア、欧州、米国など13か国、25の都市を80日間かけて旅した。帰国後、旅行の見聞をもとにした散文を『中央日報』副刊に連載し、後にそれらをまとめて『海天遊蹤』全二冊を出版している。本書は大きな反響を呼び、16回も再版され、1966年の第二回嘉新新聞賞の文芸創作賞を獲得した。応鳳凰によれば「本書は単なる旅行記にとどまらず、各国の風景を描きながら、国々の歴史、文化、盛衰、民族を観察し、台湾と比較して、社会と教育の問題を指摘し、国家の発展が停滞する原因を指摘した」¹⁰²。張瑞芬は

¹⁰⁰ 王文漪「懷思梅音」『中央日報』(1984.2.18)

¹⁰¹ 八二三砲撃すなわち金門砲撃は、1958年8月23日から10月5日にかけて、中華人民共和国の人民解放軍が、中華民国の金門島に対して行った砲撃戦をさす。

¹⁰² 応鳳凰・鄭秀婷「與病魔抗争的寫実能手」『台湾現当代作家研究資料彙編』64(封德屏・

「文学両『鍾』書—徐鍾珮與鍾梅音散文的再評価」において、この書が鍾梅音の散文創作の分岐点であり分水流であると指摘している。

このスケールの大きな旅行記の前は、鍾梅音は新聞の文芸欄に短い文章を書いていたが、それらは典型的な日常のこまごまとしたことがらであった。文章は短く、芸術、文学、人生という多方面にわたり、面白味に溢れ、時には女子教育、生活時事、愛情、詩と画など多様なテーマについて書いていた—中略—二冊の『海天遊蹤』は、空前的な売れ行きを記録し、彼女の最も有名な代表作となったと言える。この「最も美しい旅行記」の後、鍾梅音の歩みは次第に海外へ向けられていった。¹⁰³

1968年に娘の日記をもとに書いた児童文学「我從白象王國來（私は白象の王国からやってきた）」には、タイの風土や人々、古跡、産物がみられる。1969年にはバンコクに転居したが、執筆の手を緩めることなく、『中央日報』「副刊」で「蘭苑隨筆」という連載を持ち、それらの文章をまとめた『蘭苑隨筆』（1971）を上梓した。1971年には夫の事業に随行してシンガポールへ転居し、再び欧米を旅行し、二カ月の旅行の感想を『旅人的故事』（1973）にまとめた。この本はその地に因む人物に焦点をあてたもので、訪れた都市とアンデルセン、シェイクスピア、ベートーベンなど偉人の紹介を組み合わせ、又は歴史や動植物の紹介をしており、鍾梅音の人文的素養と知識の広さを物語っている。1977年には、夫とともにロサンゼルスに移住した。

鍾梅音の一生は喘息との戦いであり、さらに1979年にはパーキンソン病を発症したが、衰えつつある身体の不便さも彼女を意気消沈させることはなかった。1980年には19本目の散文集『天堂歲月』を出版する。1982年には病気が悪化して台湾での治療と家族のいるアメリカを行き来するようになり、夫余伯祺が口述を代筆した「何處是歸程」をアメリカの『世界日報』に発表したのが、最後の一篇となった。余伯祺は同じ病気を持つ人々のために、自ら出資して慈光療養センターを設立した。1984年、鍾梅音は台湾の林口長庚醫院にて、病気のために亡くなった。享年63歳であった。応鳳凰は、鍾梅音を台湾における女流作家の紀行エッセイの先駆者とみなし、男性作家が反共または懷郷文学だけを執筆していた時代、率先して台湾に立脚し、台湾での生活における感情を叙述し、自らの場所を果敢にも模索していたという点で大きな意味があるとの見解を示

総策畫、王鈺婷・編選、財団法人台湾文学發展基金会・編印、国立台湾文学館出版、2014）
p.141

¹⁰³ 張瑞芬「文学両『鍾』書—徐鍾珮與鍾梅音散文的再評価」『台灣現當代作家研究資料彙編』64（封德屏・総策畫、王鈺婷・編選、財団法人台湾文学發展基金会・編印、国立台湾文学館出版、2014）p.175-176

している。さらに王鈺婷は、鍾梅音が海外在住以降、バンコクやシンガポールの研究機関で講演を行うなどの交流をしており、台湾と東南アジアの文壇の交流という点が、今後新たな鍾梅音研究のポイントとなることを指摘している。¹⁰⁴

第二節 鍾梅音の主婦言説

上述したように、鍾梅音は「婦女與家庭」において最も多くの作品を掲載し、「毎週漫談」の連載が始まった1952年後半～1953年に、とくに集中して大量の散文を発表している。そこに現れる主婦像は、同欄で発信されていた全体的な言説のなかでも、より家庭を第一に考える、温厚で、慈愛に満ちた良妻賢母である。ここではまず、「婦女與家庭」における鍾梅音の言説をさらに少し詳しくみることにする。

一. 賢く、知的で、使命感をもった主婦

「婦女與家庭」における鍾梅音の言説には、良妻賢母型の主婦のイメージがしばしば現れる。それは、あるときは子どもの育児について心を砕いて考える母親である。次の「望子成龍（子が龍となるを望む）」では、子どもに期待しすぎて空回りする母親が開いた悟りの境地が描かれている。

私はよく、賢い妻になるのはたやすいが、良き母になるのは難しいと言ってきた。しかし今自分のとるべき道を見出した。これまで私が100パーセント子どもにやらせようとしていたことを、五割だけを望むようにしたことだ。私が100歩走ったとしたら、立ち止まって50歩ぶんだけ待ってやればいいではないか。¹⁰⁵

子どもは次世代の主人公として教育すべきだと鍾梅音は常々主張していたが、現実の子育ての難しさにも言及し、ここでは子どもに対する要求が高すぎてむしろ悪影響を及ぼすことのマイナス面を述べている。子どもが龍になるようにと期待したことが裏目に出て、蛇になってしまっただけでは元も子もなく、完全無欠を要求しすぎないことが肝要だと述べている。

また、あるときは、分をわきまえた温順な主婦が肯定的に描かれる。「保留三分」は、結婚前は言葉少なくしとやかだった女性が、結婚後は往々にしてしゃべりすぎる傾向にあり、結婚前の魅力を失くしてしまうと指摘している。

¹⁰⁴ 王鈺婷「作家・編者・旅者—鍾梅音的創作生涯」『台灣現當代作家研究資料彙編』64（封徳屏・総策畫、王鈺婷・編選、財団法人台湾文学発展基金会・編印、国立台湾文学館出版、2014）p.104-105

¹⁰⁵ 「望子成龍」『中央日報』「婦女與家庭」（1953.9.2）

私のいう「魅力」とは故意に甘えた感を装うこと（あれは鳥肌が立つ）を指すのではなく、ただ結婚後の女性は自分の性格や、表現の機会に関わらず、“三分を保留しておく”ことが最も賢いと言っているだけである。¹⁰⁶

噂好きや喋り過ぎは女性としての魅力をなくすと言っている。ほかにも、女性自身の心の修練を促す文章も多々みられる。次の「不老術」は、やはり女性の多くが三十を過ぎると、口うるさく文句が多くなり、厨房の中に閉じこもり単調すぎる家事をし続け、少女時代の栄光を懐かしみ、今の自分は色々なことで他人より劣っていると感じてしまうが、それはコンプレックスの裏返しであり、もっと前向きに考えるべきだと主張している。

こうしたコンプレックスを消し去りたいなら、まず過去を忘れ、将来を見据えるべきである。子どもをよく教育できれば、それが誇りになるではないか？子どもが大きくなって余裕ができたなら、心身を注ぎ込めることを探して学ばばよい。画を描くとか、洋裁や、ピアノ、創作、撮影、彫刻など...科学はまだ青春を取り戻す段階に来ていないが、私たちは策を講じて若者の性格、若者の心理、若者の活力を保つことができる。その「不老の術」の秘訣とはすなわち、快活と学習なのである！¹⁰⁷

一方、鍾梅音の言説ではこのような控えめな主婦像がよしとされるが、決して盲目的に夫に従うというわけではない。例えば次の「給新郎（新郎に）」では、幸せな家庭を築くためには、男性もその責任の一翼を担うべきであるという考えを述べている。

ですから、あなたはあなたの妻を理解すべきであるし、彼女を助け、愛し、まもり、幸せだという自信を与えるべきである。妻こそ、喜びも悲しみもあなたと共にする真の伴侶だということを知らなければならない。¹⁰⁸

さらに、男性とうまく共存するための秘訣にも言及している。「談話」は小芙という筆者の（実はこれも鍾梅音の筆名なのだが）文章に対するコメントとして書かれている。小芙の「奥さんは旦那さんたちの会話になるべく参加して、見識を広めよう」という意見に対し、「夫たちの会話が本当に学ぶに足るものであるかは定かではないが」と冷やかな視点を示す。このなかで作者は“食事”を“会話”に喩えて、「もし彼らが出して来たの

¹⁰⁶ 「保留三分」『中央日報』「婦女與家庭」（1953.6.3）

¹⁰⁷ 「不老術」『中央日報』「婦女與家庭」（1951.10.4）

¹⁰⁸ 「給新郎」『中央日報』「婦女與家庭」（1953.4.15）

が牛肉なら、あなたは野菜を出してあげればよい」として、男性の会話がスムーズに進むよう、絶妙なさじ加減で適した会話をできるようにすべきだと述べている。さらに、知恵をなるべくひけらかさず、その場の雰囲気がよくなるようにふるまうことがよい、としている。

男の人たちが話しているところに居合わせたら、三分の愚かさを装ったほうがいい。もしはっきり理解できたとしても、あまり物が分かっていないように装っていたほうがいい。そうすれば、おしゃべりの場の空気を愉快的なムードにできるのだ。—中略—これは封建時代の名残りではなく、男性が三分の優越感を持つことは、エホバが泥で人間を造ったときすでに決められていた歪んだ考えである。私のこの「高論」を情けないと批判しても構わない。しかし、この事実を否定することはできないのだ。¹⁰⁹

ここには、場の空気を読むことを優先させる態度と、したたかさも見て取れる。男性と対抗するのではなく、関係をうまく保持しようとする姿勢がそこにはある。ただ総じて、描かれているのは“聡明で有能な”主婦なのである。夫に対しては、服従でなく支えること、子どもに対しては、育児と教育の責任を担う賢い母親であり、自らの家庭にある使命感を持っていると言える。さらに、台湾という新天地において自己を実現しようとする前向きな主婦像も描かれている。次は大陸時代の友人から手紙が来て、実はその友人も台湾へ移住していたという設定の散文である。

長い間思っていた古い友人が、私と一緒にこの自由な宝の島で生活していたなんて！—中略—古い友情に勝るとも劣らない、新しい友人ができたのよ。台北に行ったら一人一人紹介してあげるわ。彼女たちもほとんど貴女と同じ、家庭の主婦になっているけれど、凡庸な生活に征服されるのをよしとしない人たちなの。言ってみれば、凡庸な生活のなかに理想を探すということね。¹¹⁰

作者はこの文章のなかで、自分は平凡な主婦で、台湾に渡ってきた当初は誰も知り合いがなかったが、執筆活動を通して文壇の多くの人々と知り合ったことを友人に伝えている。また、知識も経験も豊富な中年時代こそ、真の人生の黄金時代であると語っている。一人の主婦ではあるが、日常生活に埋没するのをよしとせず、与えられた場所を十分に活用して自己実現をしようとする前向きな姿勢が描かれている。鍾梅音も他の遷台

¹⁰⁹ 「談話」『中央日報』「婦女與家庭」(1953.1.21)

¹¹⁰ 「人生的黄金時代」『中央日報』「婦女與家庭」(1951.5.16)

女性作家と同様に、自らが管理することのできる“小家庭”を守り、創造し、台湾というこの新天地において努力奮闘し、自身の仕事を発展させていこうとする。そこに存在するのは祖国を追われた悲哀や郷愁ではなく、むしろ台湾で新しい家庭を創造していこうとする主婦の、柔軟で積極的な意志が看取できる。

二. “自由中国”の良妻賢母として

鍾梅音の有能で前向きな主婦言説が、国民党の政権下にあった当時の社会状況と無縁ではないことは確かである。1950年代、国民党政府は大陸反攻を全面的に推進しており、この大きな時代のなかで、主婦も重要な役割を担わなければならなかった。「婦女與家庭」には政治的プロパガンダはほぼみられなかったが、希にそうした文章がみられる。1952年10月、蒋介石総統の66歳の誕生日に寄せた文章に、鍾梅音のこのような言説をみることができる。

軍隊は苦難を乗り越え成果を上げることで誕生日を祝い、工場では生産を上げることで誕生日を祝う。われわれ家庭の主婦も後れをとってはならない。「仁に当たりては譲らず（すべきことを進んでやる）」という言葉に則り、一人一人の軍人・公務員・教育者の家庭の主婦は、いずれも無名の不屈の英雄なのである。これは数年来の事実が証明していることである。¹¹¹

ここには国民党政府の統治のもとに活動する一女性知識人の立場とともに、大陸反攻という非常時における主婦のあるべき姿が示されている。非常時の男性の補助役ではあるが、きわめて重要な役割を担っている主婦、このような内助の功を奏する主婦像は、当時台湾における女性知識人層のトップに君臨していたファーストレディ宋美齡の主張と多分に重なる。鍾梅音が描いた主婦像にも、宋美齡が主張する“才より徳を重んじる”“母親たちは子どもたちの頭脳を養成しなければならない”¹¹²などの主張に重なる部分がみられるのである。

さらに、この時期の主婦像は、“自由中国”というキーワードと組み合わせ、ある種の特殊な意味を持っていたことも注目すべきであろう。ここで、国民党政権下における主婦の位置づけが顕著にあらわれている例として、鍾梅音が1956年～1957年の間主編を務めた月刊婦人誌『婦友』¹¹³の記述についても触れておきたい。鍾は作家としての知

¹¹¹ 「祝壽」『中央日報』「婦女與家庭」（1952.10.30）

¹¹² 宋美齡「我將再起—婦女與家庭」『蔣夫人言論集』（生生印書館、1940.6）p.44-46

¹¹³ 『婦友』は1954年10月に創刊、1990年に隔月刊となり、1997年に停刊した。

名度と実績によって、1956年に『大華晩報』甜蜜家庭版の創刊にあたっての編集、さらに請われて『婦友』の主編を務めることとなった。『婦友』は国民党中央委員会婦女工作会（婦工会）が発行する月刊誌であり、創刊の辞（一部）には次のように発行動機が述べられている。

本会の設立にあたり、一年を経て、各々の仕事は、徐々に進展し、文化を提唱し、またその果たすべき責任とは、婦人を組織し訓練し、建国復興という偉業に参加させ、婦人を教育し、家の秩序を保ち国を治める本能を養い、女性を覚醒させ、共産党の災いと暴挙を暴き出し、道理が正しく、言葉が厳格という理論と、読みやすい雑誌を作り、それにより民族復興の精神教育という任務を実現する。これが本刊の発行動機である。¹¹⁴

『婦友』については、游鑑明の「是為党国抑或是婦女？1950年代的『婦友』月刊」に詳しい。それによれば、1950年から1960年の台湾では、中国共産党に対抗し台湾の民心を安定させるために、政治的プロパガンダが非常に重視された。戦闘、懐郷、通俗及び理論など様々な内容に渡る60種以上の雑誌が創刊された。多くの作家が編集の仕事に携わり、質の高い文芸作品を世に送り出し、また反共抗ソの使命と民族意識の回復を伝播する任務を帯びていた。こうしたなかで1954年10月『婦友』は創刊されたが、それは同年8月に中国文芸協会（文協）が「文化清潔運動」を開始した2カ月後のことであった。「文化清潔運動」とは赤色の毒（共産主義思想）、黄色の害（卑猥）、黒色の罪（内幕・誹謗中傷）という三害¹¹⁵の撲滅を各界に呼びかけるものである。このような時期に創刊されたため、『婦友』の任務は国民党政府の思想を宣伝し、反共復興のスローガンを唱えることに加えて、文化界と連携して三害の一掃運動を推進することであった」と游鑑明は指摘している。¹¹⁶

同誌の表紙には、毎回、庭園でたたずむ宋美齡や、蒋介石との仲睦まじい様子の写真が載せられている。落ち着いた品のあるデザインの旗袍に身を包み、知的かつ優雅な雰囲気なたたえる宋美齡が、“自由中国”という近代的な場所における理想の存在として、宣伝的な役割を果たしていたことが窺える。鍾梅音が主編を務めたのは1957年までで

¹¹⁴ 『婦友』創刊号（国民党婦女工作会、1954.10）

¹¹⁵ 1950年代の通俗文芸に関する研究を主に行っている張文青の「1950年代初期の台湾における通俗雑誌の出版—通俗文学市場の形成とその諸相—」『野草』第89号（中国文芸研究会、2012.2.1）によれば、文化清潔運動は「反三害運動」とも言われ、三害とは「赤色の毒（共産主義思想）」、「黄色の害（卑猥）」、「黒色の罪（内幕・誹謗中傷）」を文化界から一掃するための運動であった。

¹¹⁶ 游鑑明「是為黨国抑或是婦女？1950年代的『婦友』月刊」『近代中国婦女史研究』第19期、中央研究院近代史研究所（2011.12）

あったが、『婦友』にみられる主婦像は、宋美齡の主張に沿った徳と知を兼ね備えた賢母であり、進歩的な良妻であった¹¹⁷。さらに“自由中国の家庭主婦”の位置づけが最も顕著にあらわれた例として『婦友』で行われた“幸福な家庭”の活動が挙げられる。游鑑明によれば、“幸福な家庭”というキーワードは、『婦友』以外の雑誌でもしばしば発信されていたが、1958年8月、中国共産党が人民公社制度を展開して以降、『婦友』は婦工会と連携して「幸福家庭」運動を積極的に発信していく。1959年2月に婦工会により同運動が提唱されると、『婦友』53号（1959.2.10）、54号（1959.3.10）において社説「建立幸福家庭」及び「推進幸福家庭運動記念本年婦女節（幸福な家庭運動を推進し本年の婦女節を記念する）」が掲載され、さらに女性記者張明、立法委員趙文芸、女性作家林海音、潘人木、王文漪によるラジオ座談会「婦女節談幸福家庭」の内容が掲載された。¹¹⁸とくに第54号では、見開きの左右に、それぞれ「私たちの幸福な家庭」と「悲惨な共匪の『人民公社』」という題字と、それを説明する漫画が各4枚掲載されている。4枚の漫画にはそれぞれキャプションがつけてあり、以下のようになっている。

『私たちの幸福な家庭』

「私たちはお年寄りを敬い、孝の道を提唱します」

「私たちは保健教育の常識を研究し、児童福祉を増進します」

「わたしたちは戦時の生活を実践し、家庭での副業を提唱します」

「私たちは世の中の動きに注意を払い、正しい娯楽に従事します」¹¹⁹

『悲惨な共匪の『人民公社』』

「共匪の『人民公社』は家庭を引き裂き、大陸同胞の家は没落し一家離散！」

「共匪の『人民公社』は奴隸の如く人民を働かせ、妊婦まで製鉄に駆り出す」

¹¹⁷ 倫理観、道徳という観点はしばしば宋美齡自身の主張と重なる。例えば宋は「我将再起——婦女與家庭」（『蔣夫人言論集』1940.6 生生印書館 44-46頁）という一文において、女性にとっては才よりも徳が重要であると述べている。段瑞総『蒋介石と新生活運動』（応義塾大学出版会、2006）によれば、宋美齡は日中戦争時期、蒋介石の推進する新生活運動の一環として、新生活運動促進総会（1934年設立）婦女指導委員会（1936年南京で設立）の指導長として戦争救助や児童の救助など各地の活動を指導した。婦女指導委員会は抗日民族統一戦線の一翼を担い、全国の女性を「抗日建国」に動員するために一定の役割を果たした。宋美齡によれば、戦時は女性の役割を際立たせ、前線の男性を補助するために女性の後方での役割は欠かせないものである。新生活運動の流れをくむ道徳、倫理感、さらに戦時中における夫を支える賢い妻という構図が「家庭主婦」のイメージとして国民党政権下の台湾社会において強調されていたと思われる。

¹¹⁸ 游鑑明「是為黨國抑或是婦女？1950年代的『婦友』月刊」『近代中国婦女史研究』第19期（中央研究院近代史研究所、2011.12）p.111

¹¹⁹ 『婦友』第54号（1959.3.10）頁数なし

「子は強制的に『人民公社』の託児所へ、生き別れ。母親は悲しみ泣き叫ぶ！」

「年寄りも『人民公社』の光復院に閉じ込め、生きて重労働、死ねば肥料！」¹²⁰

「幸福な家庭」の漫画には、良妻賢母ふうの主婦の挿絵が掲載されている。かいがいしく子どもに勉強を教え、自分の庭でつましく野菜や鶏を育てる女性は、みな上品な旗袍を身につけ、落ち着いて、有能そうである。対する大陸の女性たちは、みすぼらしいつぎ当ての人民服、髪も振り乱し、悲壮な面持ちに描かれている。それはまさに“共産中国”の悲惨な女性と“自由中国”の幸福な女性、という対比構造を呈している。この品のある旗袍を着た主婦たちは、当時の女性作家たちの姿そのものである。

三. 二つの家庭

鍾梅音の主婦言説には、賢く、知的で、使命感に溢れた主婦のイメージが映し出されていた。それは国民党の女性政策、1950年代の政治的意図と複雑に絡み合う、“自由中国”の幸福な家庭という記号を含んだ主婦像であった。一方、鍾梅音の主婦言説に影響をもたらしたもう一つの要因として、鍾本人の家庭における経験という問題がおのずと浮上してくる。ここでは大陸における家庭、遷台後の家庭という二つの家庭について、その散文における叙述を挙げて考察したい。

(一) 大陸時代—暗闇のなかの希望の光

個人の家庭観に対し、育った環境が影響を及ぼすことは容易に想像できる。鍾梅音の散文においても、大陸時代の家庭についての叙述から、両親への思いや少女期の家庭環境を知ることができる。その言説は鍾の主婦言説を構成するうえでの大きな要素である。いくつかの散文を読むと、少女期の鍾梅音は、長女であったが非常に病弱であったため、健康で頼りになる長女としての信頼を、母から得られなかったと記していることがわかる。母親と比較的冷淡な関係であった少女梅音にとって、心の支えは父親であった。

父はあまりしゃべらず、その痩せた顔に笑みが浮かぶことはほとんどなかった。人に与える印象は無口で、冷ややかだったが、父は私を愛しており、その愛がとても強いということを私は知っていた。人の心の冷たさと温かさをみると、子どもの直観というのは最も正確な温度計になるのだ。物心ついたとき、最初に私の命の大部分を占めていたのは、やはり父であった。母は私の下に3人の弟と3人の妹がいたので、早々と私の世話を父に「移行」した。二カ所の職場で働き、朝から晩まで駆け回っている父だったが、家に帰れば帰ったで、忙しく私に字を教え、私の手を

¹²⁰ 『婦友』第54号(1959.3.10) 頁数なし

とって筆で赤丸をつけ、それに着替えや、洗顔、爪切り、添い寝もしてくれた。¹²¹

3歳で喘息を患い、しばしば発作を起こしていた鍾梅音は、健康な長女として母の期待に応えられなかったと感じていた。鍾梅音は長女で、下に弟妹が多く、父は娘の教育に熱心な知識人だが母はそれほど教育を受けていないという点で、林海音と似通っているが、父の死後13歳で一家を取り仕切っていた林海音とは異なり、鍾梅音は母親から頼りにされるような娘ではなかった。

もちろん、梅音は質素で無口な父を愛していたが、親に決められた相手同士の結婚であった両親の仲は睦まじいとはいえなかった。さらに、2人の弟と1人の妹が相次いで夭折したことで、父の人生に対する態度は突然消極的になった。その頃、タイミング悪く父は官職を解かれ、生活のために別の都市に単身赴任した。着るものにもこだわらず、ただ母の作った料理だけが好きだった父が、家族と離れて家事を自分でしていることを考えると、娘は非常に同情した。

あるとき、私は父の荷物のなかにタバコの缶を発見した。父がタバコを？好奇心で開けてみると、そこには縫い針を指した針刺しと、何本かの白と黒の糸が入っていた。父は裁縫などできるわけがないというのに。靴下ひとつ繕ったこともない私でさえ、何に使うものなのかすぐに分かった。熱い涙が私の目から溢れ出た。¹²²

母はあまり感情を表に出さない人で、父が仕事で一段落すれば自分から迎えに来るだろうと頑なに待ち続けた。二年目に父が大病を患ったときでさえ、父を訪ねようとはしなかった。やがて、父に愛人ができるという「最严重的錯誤」¹²³が発生する。母の愛を感じたことはなかったが、泣き暮らす母に同情し、父を憎んだ。父はいつも通りやさしく梅音の病気を気遣ってくれたが、娘の父に対する感情は冷やかになっていった。

しかし先入観が私の心の中にはびこっていた。母がなぜ「捨てられた女」の苦しみを舐めなければならぬのか、自ら目の当たりにした私は、父を憎み、世の中のすべての男性を強く憎んだ。母にも少なくとも半分の責任はあったとはいえ、その時はまったく考えてもみなかった。¹²⁴

121 「父親的悲哀」『中央日報』「婦女與家庭」（1949.8.14）

122 「父親的悲哀」『中央日報』「婦女與家庭」（1949.8.14）

123 「父親的悲哀」『中央日報』「婦女與家庭」（1949.8.14）

124 「父親的悲哀」『中央日報』「婦女與家庭」（1949.8.14）

この散文は、もとは1949年8月14日に、中央日報「婦女與家庭」に掲載されたものであり、最後には父への感謝の気持ちで締めくくられている。しかしこの事件は当時の鍾梅音にとって衝撃的な出来事であり、新たな台湾での生活と対照的な古い家庭のイメージとなった。さらに、13歳の夏、母のつかいで父と愛人の女性を訪ねた際のことを書いた「希望之光」には、暗澹とした少女期が描かれている。これは1968年に出版された『我只追求一個圓』に収載された散文の一つであり、同著によれば1967年に執筆された。そこには、暗澹とした少女時代の体験が描かれている。

「私」は母の代理として父の住む漢口へ行った。母は私に対しずっと不満と失望を抱いていたはずなのに、なぜ突然私を「重用」したのか、しかもこんなにも尋常でない使命を負わせたのかは、分からなかった。父が漢口で新しい家庭をもったことを、母は最初信じず、次に憤りと悲しみでずたずたになったが、やはり直接会おうとしなかった。「私」もこの間何度となく、字が書けない母の為に父宛の手紙を代筆した。大好きな父を傷つける文句を書くのは苦痛で、何とか逃げようとしたが、毎回母の要求に負けて父を責める手紙を書いた。ある時ついに、父について3日間の船旅をし漢口へ行った。

私は今でもその人を最初に見たときの情景を思い出すことができる—彼女はまだ27歳で、色白で太っていて、眼がとても美しく、少しだけつりあがっており、ただ唇はとても薄く、ぎゅっと結んでいた。私の来訪にはとても驚いた様子で、敵意もないようだったが、歓迎もしなかった。彼女にはすでに男の赤ん坊を抱いていた。その子は痩せぎすで、粗暴な性格で、普通の乳飲み子のような愛嬌とか可愛さなどなかった。育児の方法について、彼女と父は意見がことごとく違い、子どもが二人の間で争いの導火線になっていた。¹²⁵

父との諍いのため、彼女は機嫌が悪く、しかも「私」に彼女のことを『娘(母)』と呼ぶよう言いつけてきた。南京に本物の母がいるからと頑なに申し出を断ったため、冷戦が開始した。ここまで母のために誠意を尽くしたが、母はといえば、この7年後に「私」が父から養育費をとってきたときまで、ずっと「私」を疑っていた—母は、父が私を愛していたことをよく知っていたのだ。そして「私」は船旅の疲れで、持病の喘息を発症してしまう。一度発症した病気は悪化していった。父は薬をのませるために来てくれはしたが、優しい看病も、声をかけてもらえることもなく、暗がりのなかで虫の鳴くような自分の息の音だけを聞きながら、一日中籐の椅子に横たわっていた。

¹²⁵ 「希望之光」『我只追求一個圓』三民書局(1968.2)p.159

私は突然、家を恋しいと感じた。あの家は完全ではなく、しかも楽しくなかった。発病したとき、いつもこんなふうに机の上か籐の椅子に突っ伏して、そうやって何度も冬を過ごした。しかしどうであれ、私はそこで育ったのだ、母がどんなに私に対する不満を持っていても、私に失望していたとしても、毎回私が止まらない咳にのたうち回っていたとき、それを聞きつけて起きてきてくれたのは、やはり母だった。¹²⁶

タイトルの「希望の光」とは、暗闇のなかで病と闘う「私」を照らしてくれた、窓からさしこむ街灯の光のことである。どんな病気でも昼間は落ち着いており、夜は症状がひどく出るものだが、長く心細い夜の間、「私」は窓から差し込む月光のような街灯の光とともに、夜が明けるのを待った。その後外国へ行って、美しいシャンデリアや街灯の光も目にしたが、そのときの平凡な街灯の光を決して忘れることはできない。なぜならそれは「私」の一番暗かった子ども時代に、私を照らしてくれた「希望の光」であったからだ、という結末となっている。

この散文には「婦女与家庭」や『婦友』の「幸福な家庭」のような、幸せな家庭のもつ要素—良妻賢母、睦まじい夫婦愛、子どもが保護される幸福な家庭といった要素が何一つ描かれていない。なかでも、父と愛人の子どもと思われる赤ん坊は、本来幸福の象徴であり、夫婦のかすがいとなるはずの存在であるが、全く正反対の描かれ方をしている。

大陸時代の家庭がこのように悲惨な描写をされているのは、これが鍾梅音自身の実体験に基づくものであったからに相違ない。しかし、敢えてこのような描かれ方をしていることについては、范銘如の主張を少なからず連想させる。「畢竟、台湾はあらゆるものが再構築される状況にあった。一つには、家父長制度が、政治及び文化メカニズムのなかにまだ全面的に浸透しておらず、二つ目には、台湾の作家はまだ中国語の習得と格闘している最中で、競争することができなかつたのである。」¹²⁷。すなわち、大陸において女性を苦しめた家父長制度・伝統的家庭のしがらみは、台湾に渡ってきた外省人の小家庭においては作用していなかった。ここには、大陸＝伝統的旧社会、台湾＝新天地の小家庭（核家族）という二極的な描写のメカニズムをみることができる。大陸時代の家庭に対し、台湾における“小家庭”は、鍾梅音にとって自らが主婦として主体的に管理できる幸福な家庭であった。

¹²⁶ 「希望之光」『我只追求一個圓』三民書局（1968.2）p.160

¹²⁷ 范銘如『衆裏尋他』（台湾女性小説縦論、2002）p. 31

(二) 遷台後の小家庭—自然に囲まれた海辺の我が家

鍾海音が海辺の蘇澳での暮らしをもとに書いた散文「我的生活」(1949.11.10)には、上述の「希望之光」とはまったく異なる家庭が描かれている。

生活に秩序があるのはよいけれど、一日中機械のように動き回るのは好きではない。朝のラジオで音楽番組を聴くために、食事が後回しになってしまうこともよくある—もちろん小瀬とお父さんは、場合によっては女中さんまで、私にかまわずそれぞれのことをやっている。—朝の風と光を浴びて野菜を買いに行き、見れば緑の山は一幅の絵のよう、木々の梢から聞こえる小鳥のさえずりが心地いい。秋以来病気にかかって、菜園には掘り忘れた山芋があるだけで、「農作業」はすっかりお留守になってしまったけれど、鶏や鴨を育てるのはやはりとても面白いことだ。¹²⁸

ここには、自然のなかの生活を楽しみながら暮らす主婦の姿がみられる。この散文のなかの「私」は、小家庭の主婦であり、家族のケアを十分にしながらも、自分を豊かにする楽しみも忘れない。家族の食欲が一番旺盛な昼食はすこし豪華にして、食後は裁縫をしたり子どもと遊んだりする。しかし前の晩執筆のため睡眠不足のときは「うるさくしないで」と言い置いて午睡する。亜熱帯の台湾では、“虫の声と緑のカーテン”の春の夜が冬でもあるし、“小楼で春雨の音を聞く夜”も、物を書くのに最適である。夫と子どもが寝た後に、朝まで執筆してしまうこともままあるのだ。とはいえ、夕方4時半には、必ず「すぐに部屋をきちんと整えなおし、お茶を入れ、充実したひと時の為に準備をする」のである。

なぜなら黄昏時は私たちの一日のなかで一番ゆったりできる時間だからだ。夫は慌ただしい仕事から帰宅し、小瀬のいたずらも少し落ち着いてくる。夕食後は皆一緒に無線ラジオを聴いたり、新聞のニュースについて話したり、小瀬は本を読んだり字を練習したり、ときにはパパに絵を描いてとねたり、夫はご機嫌ならクレヨンを手で「子どもの前で小学生になる」こともしてくれる。「やっぱり機械が専門だから飛行機の絵が上手ね！」私は夫の絵を見てほめるが、小瀬はパパの飛行機は「痩せすぎ」だと不満で、ママがもう一度描いてという。私が描き終ると、夫がお返しに褒めてくれる。¹²⁹

仲睦まじく穏やかな家庭の風景である。天気の良い日はトマトとお皿を持って海辺で

¹²⁸ 「我的生活」『冷泉心影』(重光文芸出版社、1951) p.53

¹²⁹ 「我的生活」『冷泉心影』(重光文芸出版社、1951) p.54

ピクニックをする。自然を満喫できるこの方法は、お金をかけて別の場所へ行くより余程いい。最後に、作者はこの生活について「良妻賢母という基準で評価したら、この主婦ぶりは、だいたい 59 点くらいもらえたら御の字である。夫も子どもも要求があまり高くないから助かる」と述べている。そして、ある人が家庭における夫は野党であり、妻が与党であると言ったことにかけて、こうしめくくる。

それなら私という「与党」は幸いにも「野党」の支持を得て、「人民」の敬愛をいただき、みんなで「楽しく暮らす」ことができ、「穏やかさ」を失っていないと言える。¹³⁰

「人民」とは子どもを比喻しているのであろう。ここには、主婦が自ら主体性を持って管理する“小家庭”が描かれ、上世代のしがらみのない自由な空間を、夫・子どもと協力して創造していくという、近代家族の主婦像が表れているのである。

小結

1950年代という特殊な社会の状況において、大陸から台湾へ渡った知識人女性は、その多数が台湾という新しい領域において創作活動を開始した。日本語が禁止となった台湾文壇は作家の総入れ替えとなり、その新たなフィールドが遷台女性作家の活躍の場となったことはすでによく知られている。本章ではこのうち鍾梅音の言説をみてきたが、その主婦像には、台湾で家庭を営み、子育てに悩むきわめて日常的な生活が描かれる一方で、国民党政権下で求められる主婦に通ずる道德・倫理観もあらわれていた。さらに特徴的なのは、鍾梅音の大陸時代の家庭は、決して幸せとはいえず、遷台後の家庭は、それと対照的に非常に快適な、みずから主体性をもって切り盛りできる“小家庭”として描かれていたことである。その文中にいる主婦像には、仕事と家庭で力を発揮する喜びがみなぎり、仕事と家庭の二重負担への批判や苦悩は描かれていない。その指向は、目の前にある生活をいかに創造し、家庭を大事にしつつ自らを充実させるかという点に集中している。鍾梅音にとって、遷台という空間移動こそ、新しい幸福な家庭を形成するためのプロセスだったのである。

¹³⁰ 「我的生活」『冷泉心影』（重光文芸出版社、1951）p.55

第三章 林海音—大陸・台湾・日本を漂泊する家庭

上述のように、1949年3月、国民党機関紙『中央日報』でいち早く掲載を開始した女性向け文芸欄「婦女与家庭」において、多数の遷台女性作家が誕生した。それらの遷台女性作家はいずれも中国大陸の各省から台湾という未知の島へ移民した外省人知識層の女性であり、互いの境遇と心境が似ていることから、親しい交流が生まれた。林海音は、女性作家の慶生会を立ち上げるなど人との交流に積極的で、女性作家たちの交友の主要な人物であったが、そのプロフィールには台湾籍の両親をもち、幼少期に北京へ移民したという他者とは異なる特徴があった。

第一章で述べたように、林は「婦女与家庭」において1951年9月～1952年に6月にかけて、家庭に対する短い散文を大量に発表しており、その言説には近代的良妻賢母への肯定感が表れている。林海音にかぎらず、遷台女性作家の家庭観には、国民党の女性政策における良妻賢母像の枠組みから逸脱しない言説がみられ、このような言説の背景には政策の影響があったことは否めない。しかし一方で、作家たちの大陸時代の家族経験が、台湾での主婦言説に影響していたことも事実である。たとえば第二章で示した鍾梅音には、林海音と同様に良妻賢母を肯定する言説がみられ、それは国民党の求める有能な主婦像とも重なっていた。だが、彼女が理想の家庭として描いていたのは、その大陸時代の暗い家庭との対極にある台湾で築いた“小家庭”であった。こうした視点に基づき、筆者は、台湾における日本の植民地支配と大陸での日中戦争を背景とする林海音という作家の言説から、いま一度その主婦像の形成を考察したい。本章では、日本→台湾→北京→台湾と3回の漂泊を経験し、“半山”という特殊な背景をもつ林海音について、生い立ちと家庭経験に焦点をあて分析をおこなう。

第一節 “半山”の女性作家

一. プロフィールと評価

林海音は本名を林含音、幼名英子（インツ）、1918年3月18日に日本の大阪で生れた。父の林煥文は台湾苗栗の出身で、日本統治下の台湾で日本語教育を受けたが、事業を興すため16歳の妻黄愛珍を連れて日本へ渡り、そこで英子が誕生する。商売は思わしくなく一家は台湾へ戻ったが、1923年、煥文は再び新天地を求め、妻子を連れ北京へ渡った。5歳の英子はすぐに北京城南での暮らしに慣れ、7歳で廠甸師範大学第一付属小学校へ入学する。だが日本の侵略が次第に激しくなり、1931年、楽しかった少女時代は父の病死とともに終わりを告げる。英子は総領娘として一家を支えるため、働きながら学べる北平新聞専科学校へ入学し、19歳で『世界日報』の記者・編集者となる。1939

年、同僚の夏承楹（何凡）¹³¹と結婚、旧式の大家族に六男の嫁として入り、三人の子どもを出産、1948年に家族とともに台湾へ渡った。

30歳で台湾へ戻った林海音は、以降約50年にわたり文壇で精力的に活動する。《國語日報》特約編集者として職を得て「週末版」の主編を経たのち、1953年～1963年まで《聯合報》副刊の主編を務め、戦後の統制下で萌芽した台湾文学界に貢献した。一方では雑誌《文星》の文学編集を1957年～1961年まで務め、1967年からはアメリカ訪問記などを掲載した雑誌『純文學月刊』を発刊、これをきっかけに純文学出版社を設立する。その後は編集と出版にたずさわり1995年まで27年間のうちに400余冊の書籍を世に送り出した。編集者として活躍するなかで、林海音はまた台湾文壇に多くの新進作家を送り出し、優秀な人材の発掘に尽力した。¹³²七等生、鄭清文、黃春明、林懷民など若手作家のほか、日本語から北京語での創作に移行したベテラン作家たち—楊逵、鍾肇政、鍾理和、廖清秀らも林の支持によって作品を発表した。児童文学の分野では、政府刊行の児童読み物集の編纂、小学校の国語教科書執筆に従事し、児童小説も執筆した。著作としては1955年35歳のとき、家庭や女性に関する日常的エッセイ集『冬青樹』が出版されたのを皮切りに、59年には初の長編小説で台湾に住む女性の愛の葛藤を書いた『曉雲』が出版される。そして60年代には林の代表作とされる小説集『城南舊事』、『婚姻的故事』、『燭芯』などのほかアメリカ訪問記『作客美國』、児童文学『金橋』をはじめ、30数冊の散文・小説集がある。晩年は児童文学の翻訳も手がけ、ビアトリクス・ポターの「ピーターラビット」シリーズなどの改編・翻訳もしている。

台湾の文学界において林海音は、編集、著作、出版の三分野において力を注ぎ、著名なエッセイストの夫・何凡とともに、台湾の現代文学の発展に深い影響を与えたと評価されている。率直で好奇心旺盛、責任感が強く常に前向きで、美しいもの、美味しいものを好み、手料理で客をもてなすのが好きだった彼女を周囲の人々は敬意をこめて“林先生”と呼んだ。家の客間は“文壇の半分”とよばれるほど、いつも友人や作家たちで賑わい、没後も多くの文学者や文壇関係者たちが彼女を惜しむ文章を残している。

林海音に関する研究には、現在台湾、大陸ともに研究論文や評論も多い。近年出版さ

¹³¹ 何凡、本名夏承楹（1911-2002）。著名なエッセイスト。江蘇省江寧の人、北京生まれ。北平師範大学外国語文学科卒後、北平『世界日報』編集者。1948年、妻林海音とともに渡台し『国語日報』に入社。「台湾省国語推行委員会」委員、雑誌『文星』主編、『聯合報』主編、『国語日報』主編・発行人など歴任。著作は『何凡文集』全二六巻のほか『不按牌理出牌』『夜讀雜誌』など多数。

¹³² 当時林海音によって紙上に発表された作品に七等生「失業」「撲克」「炸魷魚」、鄭清文「寂寞的心」、黃春明「城仔落車」、林懷民「兒歌」などがある。また林は戦前日本語で執筆していた作家の漢語による創作を重視しこれらの文章を辛抱強く校正して掲載した。こうした作家には鍾理和、鍾肇政、廖清秀、陳火泉、施翠峰らがいる。

れたものでは国立台湾文学館の『台灣現當代作家研究資料彙編』13 林海音 (2011) がある。これは台湾文学研究促進の一環として、台湾文学の父といわれる頼和以降近現代作家 50 名について、作家の生涯や手稿、研究論文、関連資料などを収載した叢書である。これより前の主な関連書籍として、林海音の次女で作家の夏祖麗による『從城南走来：林海音傳』(2000) があり、大量の一次資料により林海音の生涯と創作について詳述されている貴重な参考資料である。また、李瑞騰主編『霜後的燦爛—林海音及其同輩女作家學術研討會論文集』(国立文化資産保存研究中心籌備処出版、中央大学中文系編集出版、2003) は、林海音の没後一周年を記念しておこなわれた学術シンポジウム《霜後的燦爛—林海音及其同輩女作家學術研討會》の内容をまとめた論文集であり、林海音に関する論文 13 編と講評が収められている。林の作品は他の遷台女性作家と同様、大陸を懐かしむ“懷郷文学”として認識されることが一般的であったが、90 年代前後から女性を描写した小説・散文が再評価されており、2003 年の時点でこうした視点の論文が収載されている。このうち、江寶釵の「童女的旅途—林海音小説中的作者與叙述研究」では、林海音の作品における主人公について分析し、66 篇のうち 52 篇が女性であったことが指摘されている。散文作家としての評価に陳芳明「在母性與女性之間—五〇年代以降台灣女性散文的流變」があり、林海音の五四精神の受容については范銘如「京派・吳爾芙・台灣主航」もあげられる。また大陸における林海音の評価を考察した梁竣瓘「試論中国大陸林海音小説研究」も収載されている。

ほかに、やはり没後一周年に際し出版された李瑞騰、夏祖麗主編『一座文學的橋：林海音先生紀念文集』(台南国立文化資産保存研究中心、2002) があり、林海音の作品分析のほかその北京・台湾での私生活や人物を回顧する文章と論文などが収められ、1. 追悼と回顧 (17 編)、2. 作品と評論 (17 編)、3. 生活と風格 (11 編) という三部構成となっている。

一方、梅家玲の「女性小説的都市想像與文化記憶」(『性別，還是家國？』麦田出版、2004) は、北京に暮らした台湾人作家・林海音と、海外に暮らす北京人女性作家・凌淑華とを比較考察し、北京という都市を介した二作家の創作について分析したものである。北京にいながらにして台湾への思いを抱き、台湾において北京への思いを馳せる林海音の故郷想像に焦点をあてており、“半山”のプロフィール分析に繋がる点で興味深い。林海音の出版事業に対する考察では、汪淑珍『文學引渡者—林海音及其出版事業』(秀威資訊科技出版、2008 年) があり、林海音が主編した雑誌《純文学》を中心に詳細な考察をおこなっている。大陸では、まとまった論文集に舒乙、傅光明の主編による『林海音研究論文集』(台海出版社、2001) があり、林文月、何凡、夏祖麗、蕭乾、文潔若、齊邦媛らによる生前の林海音の資料や追悼文、評論が収載されている。本書の編者である舒乙、傅光明は大陸での林海音作品の紹介に熱心であり、80 年代以降の大陸における林海

音研究の第一人者といえよう。

修士論文には、詹玉成「林海音小説人物論」（玄奘人文社会学院、2005）をはじめ張嘉惠「林海音小説中的五四接受及影響研究」（国立中山大学中国文学研究所 2004）「林海音小説研究」（国立台湾師範大学国文科、2005）など多数あり、作品中の人物分析、女性の描写、林作品における五四精神、文学思想の受容と台湾の女性小説への影響などがテーマとして頻繁にとりあげられている。

日本語の文献では、『城南舊事』日本語版の訳者でもある杉野元子の「林海音『城南舊事』雑考—映画との比較の視点から—」『藝文研究』（慶應義塾大学藝文学会 No.70、1996）があり、小説の内容と時代背景および映画版「城南舊事」との描写の差異について詳述されている。同様に映画との比較分析をおこなったものとして応鳳凰「林海音著『城南舊事』—その小説と映画化された作品との比較—」『中国現代文学—台湾からみる中国大陸の文学現象—』（井上欣儒・岩本久美子訳 晃洋書房、2008）が挙げられるが、この二つの論文は、映画化によって大陸における林海音のイメージが“郷愁”と結び付けられるようになった経緯が詳述され、非常に興味深い。

二. 「城南舊事」のイメージ—郷愁からジェンダーへ

林海音の作品として、最もよく知られているのは1960年に書かれた『城南舊事』¹³³であろう。この小説は林本人の幼年期をもとに書かれた自伝的小説といわれ、中国大陸でも異なる出版社により何度も出版されているほど人気がある。日本でも杉村元子訳の日本語版が出ており、これは1920年代、まだ城壁が残る北京の城南における、台湾からやってきた少女英子（インツ）の7歳から13歳までの物語である。

小説の内容を紹介しておくとして、この小説は「惠安館」「我們看海去」「蘭姨娘」「驢打滾兒」「爸爸的花兒落了」という5つの短いエピソードからなり¹³⁴、それぞれ中心となる人物—北京大学の学生と恋愛して捨てられ、生んだ赤ん坊も世間体のため親に捨てられた哀れな狂女秀貞、大道芸人の親にいつも折檻されている遊び相手の少女妞儿、弟を学校へやるため盗みを働き捕らえられるコソ泥、困われた男に愛想を尽かして屋敷を飛び出し、英子の家に転がり込んできた妾の蘭さん、ろくでなしの夫に子どもを預け北京で働いていたが、長男は死に、娘も売り飛ばされた農村出身の乳母宋媽—が一話ずつ

¹³³ 1992年に5編すべての中英対訳版が齊邦媛・殷張蘭熙により香港中文大学から出版。

日本では1997年、杉野元子訳による日本語版が新潮社から出版。また同年ドイツ語版も出版され2年後にはスイスの「ブルーコブラ賞」を受賞した。

¹³⁴ 林海音はこの小説を当初『自由中国』や『聯合報』『文學雜誌』などでバラバラに発表し、のちに『冬の太陽、幼年時代、駱駝隊』の一章を付け加え、まとめて一冊にし出版した。

クローズアップされ、そして各章ごとに人々との別れが訪れる。最後に、英子の小学校卒業とともに大好きな父が肺病で亡くなり、英子の少女時代は終わりを告げる。さらに、この小説には、北京城南の風景と人々の生活が詩情あふれるタッチで描かれている。城壁と城門に囲まれた紫禁城の南側、民国期の北平には冬になると石炭運搬用の駱駝隊が鈴を鳴らして通り、人力車や馬車が行きかい、四合院を囲み東西に広がる胡同、井戸水を売る水屋や行商人、子どもたちの声が聞こえる活気に満ちた空間、そのような古き良き北平のイメージから、この作品はしばしば“郷愁文学”というカテゴリーに入れられてきた。

この作品が発表された 1950 年代は国民党の御用文学である「反共文学」¹³⁵とともに「懐郷文学」¹³⁶が数多く生まれた。葉石涛は、1950 年代の第一代作家はおおむね大陸で統治階級に所属していたため、大陸が陥落して台湾に移った際、彼らの心は中共政権に対する無限の怒りと悲しみに満ちていたと指摘し「失意と落胆によって、彼らは中共が支配する以前の華やかで満たされた大陸での快適な生活を回顧し、このようなノスタルジアによって、台湾の民衆とは何ら関係のない懐郷文学が生まれた¹³⁷」と述べている。北京の思い出を抒情的に綴った「城南舊事」は、懐郷文学の代表的作品と評された。さらに、大陸では 1981 年に上映された映画『城南舊事』がノスタルジックな感動作であったため、大陸では原作者のイメージ＝「古き良き北京の郷愁」と見られ人気を博した。中国の国家図書館に所蔵されている林海音の著作リストから出版社・年をみると、82 年の映画化以降 83 年には簡体字版の「城南舊事」が出版され、2008 年までの間に絵本版も含め 25 回以上も大陸で出版されている。¹³⁸これら政治的主張とは無縁な作風は、大陸の人々にとって安心して受け入れられ、親しみをもって読まれたことは想像にかたく

¹³⁵ 反中国共産党を主軸とした文学作品。おもな作家として軍人作家の司馬中原や朱西甯、『異域』の鄧克保、『荻村傳』『華夏八年』の陳紀滢、『秧歌』の張愛玲、『旋風』の姜貴などがある。

¹³⁶ 『城南舊事』は 1949 年頃に台湾に渡った大陸作家の懐郷文学としてよく挙げられる。ほかに潘人木『蓮漪表妹』、楊念慈『廢園舊事』、尼洛『進郷情怯』など。また 70 年代の三三文学が入る場合もある。

¹³⁷ 葉石涛は『台湾文学史』（中島利郎・沢井律之訳 研文出版、2000）において、林海音については 50 年代に輩出された女流作家のひとりとして挙げ「雑誌の編集、出版を通して多くの新鋭作家を抜擢し、台湾文学の発展に大きく貢献した。家庭、子ども、老人をテーマにしたものが多く、反共文学とは関わりがない。」と述べている。

¹³⁸ 林作品はほとんどすべてが『海外中文図書』（台湾・香港版）として所蔵されているほか、北京を舞台とした小説はすべて簡体字版も出版されている。『婚姻的故事』1986 年、『两地』1988 年など。また 1993 年には台湾当代著名作家大系として『金鯉魚的百欄裙』が老舎の息子乙舒編で出されている（『燭』『金鯉魚的百欄裙』『燭芯』『殉』など 24 編が所収）。これらの作品から林小説は老舎を筆頭とする「京味小説」として親しまれる傾向もある。

ない。大陸で編纂された「二十世紀中国女性文学史」には、林海音は内戦後故郷—台湾に戻ったとはいえ、心は“郷愁”でいっぱいであり、その“郷愁”とは故郷の台湾にではなく、北京に対するものだったとして、「城南舊事」はそうした濃厚な思いが対岸の北京に対する思慕と愛情となって吐露されたものだと記されている¹³⁹。こうした「城南舊事」＝“大陸への思慕、愛情の証”だという見方に対し、台湾の研究者范銘如は、その見解は単純すぎるとして「そこに描かれる北京は外地／台湾人の目線によって浮き彫りにされた他者である」と本小説の特徴を指摘している。¹⁴⁰ また台湾の研究者梁竣瓘は、大陸の論者は20～30年代の北京を舞台にした作品を好んでとりあげ、林海音の「祖国中国への愛」という点を常に強調しすぎる¹⁴¹と述べた。ともあれ大陸では映画化以降の1980年代から林海音という作家に対する関心と研究が始まり、現在に至っている。¹⁴²

このように、「城南舊事」の作者林海音は“郷愁文学”作家としてカテゴライズされることが一般的であった。しかし林作品には女性・家族が多く描かれており、葉石濤はすでに1967年の「林海音論」¹⁴³で、林作品の小説はほぼすべてが女性の運命の悲劇を主題にしたものであるとして、新思潮が盛んな北伐から抗日の時期に教育を受けた林は時代の薫陶を受けており、「一人の現代女性として、林海音がとくに関心を寄せたのはまぎれもなく、女性はどうしたら旧時代の牢獄から解放され、心身とも真の自由と平和を得ることができるのかということであった」¹⁴⁴と指摘していた。さらに近年では、台湾・大陸を問わずジェンダー的視点で論じられている。梁竣瓘によれば、林作品は1990年代ころから女性主義の立場から論じられるようになったが、林が好んで書いたといわれる「伝統思想の慣習に翻弄される不遇な女性像」はおもに北京が舞台であり、これら一連の作品—「燭」「金鯉魚的百欄裙」「燭芯」「殉」「婚姻的故事」などは往々にして「封建社会に対する批判」という位置付けで分析されると指摘する。とくに中国大陸においては、五四運動を発端とする儒教的封建制度、道徳観念への批判という視点から、林作

¹³⁹ 盛英主編『二十世紀中国女性文学史』（天津人文出版社、1995）p.19

¹⁴⁰ 范銘如「如何收編林海音」『中国時報』（1998.4.11）

¹⁴¹ 華語文教學研究所専任助理教授。梁竣瓘「試論中國大陸林海音小説研究」『霜後的燦然—林海音及其同輩女作家學術研討會論文集』（李瑞騰主編、国立文化資産保存研究中心籌備処出版、2001）

¹⁴² 梁竣瓘によれば、林海音作品に対する評論は映画上映翌年の1983年から『城南舊事』に関するものが出始めた。『城南舊事』以外の作品論に言及したのは1984年で、蔡美琴「林海音小説創作初探」（暨南大学学報第二期）があげられる。さらに林海音に関する大規模なシンポジウムもこれまで数回大陸でおこなわれ、作家研究のうえで一定の成果を得ている。

¹⁴³ 葉石濤『台灣郷土作家論集』（遠景出版事業、1979）

¹⁴⁴ 国立台湾文学館『台湾現当代作家研究資料彙編』13 林海音（封徳屏・総策畫、張瑞芬・編選、財団法人台湾文学發展基金会・編印、2011）p.155

品はこうした「反封建」のニーズに合致するという点で評価された¹⁴⁵。また陳碧月¹⁴⁶は、1950年～70年代の台湾の女流作家の小説には懐旧的な傾向がめだつたが、林海音の小説には他者にはない強いジェンダー意識がみられると指摘し「城南舊事」を例に挙げている。例えば「ろばのころげ回り」に登場する乳母宋媽は、賭け事好きな夫の稼ぎがあてにできないため、自分の子どもを田舎に残し、北京郊外の農村から出稼ぎに来ている。宋媽は英子の家の子供たちを本当の家族のように愛情をかけて世話し、自分の子どもたちのために毎年服や靴を作ってやるのだが、夫に子どもの様子を尋ねてもどうもはつきりしない。結局、息子はずっと以前に川で溺れ死んでおり、赤ん坊だった娘は最初の年に北京から出る前に他人にあげてしまったことが発覚する。宋媽の嘆きは計り知れなかったが、結局彼女は英子の家を離れ、また子どもをつくるために夫と農村へ戻っていく。そこには経済的圧迫のもとで過酷な運命に耐え忍ぶ女性が描かれている。また、大陸で撮影された映画では削除されていた「妾の蘭さん」の主人公蘭さんは、病気の兄の医療費のために3歳のときに北京に売られ、20歳で68歳の金持ちに身請けされるのだが、のちにその家から飛び出し英子の家に転がり込んでくる。三従四徳¹⁴⁷の伝統概念で生きてきた英子の母は、夫と彼女の微妙な関係に気を揉みつつも無言で受け入れる(その後、少女英子の機転で蘭さんは北京大生の革命家とカップルになり家を出ていく)。「このような女性たちは家父長制のなかの弱者として描かれており、作者の女性問題と婚姻生活への関心がうかがえる」と陳碧月は述べている¹⁴⁸。このように「城南舊事」をはじめとする林作品はジェンダー的視点を備えていることがしばしば指摘されている。ただ、そうした“主張”に、当の林海音はさほど興味を示していなかったようである。次女夏祖麗は「母の小説をふたたび読んで」¹⁴⁹と題した文章のなかで、林海音が友人のアメリカ人研究者から「なぜその時代の女性を描くのか」と尋ねられたとき、こんなふうにやりとりしたと回想している。

林海音—中国の新旧時代が交代するなかで、五四新文化運動の頃の中国の女性の生活というのにずっと関心がありました。あの時代は、多くの女性が時代の

145 梁竣權「試論中國大陸林海音小説研究」『霜後的燦然—林海音及其同輩女作家學術研討會論文集』(李瑞騰主編、国立文化資産保存研究中心籌備処出版、2001)

146 崇右企業管理專科学校専任副教授、台湾科技大学共同科、中国文化大学中国文学科副教授。著書に「大陸女性婚戀小説：五四時期與新時期的女性意識書」(秀威資訊、2002)など。

147 “三従”とは女性は生家では父に従い、嫁しては夫に従い、夫の死後は子に従うこと。“四徳”とは女性が重んじるべき徳目のことで、貞節、言葉遣い、家事、身なりをさす。

148 陳碧月「林海音小説的女性自覺書寫」(『霜後的燦然—林海音及其同輩女作家學術研討會論文集』李瑞騰主編、国立文化資産保存研究中心籌備処出版、2001)

149 夏祖麗「重讀母親の小説」『婚姻的故事』(北方婦女兒童出版社、1986) p.4-5

こちら側に飛び越えてきた一方で、また多くの女性が時代のあちら側にとどまり飛び越えてくることができなかつた。このとき時代の変化による物語が数多く生まれました。

友人— では時代を飛び越えられた女性とできなかつた女性に対して、結局あなたはどのような同情心をもってそれぞれを描いたのですか？

林— あまり考えていません。

友— (笑って) あなたの小説を読むと、飛び越えられなかつたほうの女性たちへの同情心をもって書いているとわかりますよ。

林— (やはり笑って) それは自分でも気付かなかつたわ！

夏祖麗はこのやりとりについて、同情というより母海音は不幸な少女や哀れな女性を描きながらも、日ごろからこうした“旧女性”への敬意を口にしていたことを挙げている。林海音の視点は、フェミニズム的観点からの批判というよりは、生身の女性たちの生活や境遇への関心であり、より現実に則したものであつた。例えばこんな逸話もある。国立編訳館の小学校の教科書を編纂していたとき、林海音の書いた「ママは早起きして床を掃くのに忙しい、パパは早起きして新聞を読むのに忙しい」という文章が、男女平等の原則に反するという理由で修正されたことがあつた。これを知つた林は機嫌を損ね「どこが悪いっていうの？私は毎日掃除のほかにテーブルも拭いているわよ」と言つたという。しかし現実的であるために、林本人の意志に関わらず、それは往々にして、読み手にジェンダーの問題を示唆するものとして写るのである。

第二節 自己肯定感の強い近代主婦—「婦女與家庭」の散文を中心に

上述のように、女性、家庭、主婦という題材を好んでとりあげた林海音であつたが、本節では、「婦女與家庭」を中心に 1950 年代の散文を分析する。まずは 3 人の子どももち、仕事もする主婦を描いた散文「平凡之家」である。「私」は「3 人も子どもがいるのに執筆までするなんて大変でしょう」と友人たちにいつも心配されるが、むしろ子どもたちと平凡な家庭を営む喜びが描かれる。

「平凡之家」(1951)

西洋には、子どもの泣き声がしないのは完全な家ではないということわざがある。ならば子どもがいるというだけでもう幸せではないか？私の小家庭では、私の甲高い声はこどもたちの三部合唱にかきけされてしまう。ときには何かひとこと言おうとして、もっか議論中の次女に一喝されることもある。「ママは口出ししないで！」

私たちの平凡な生活のなかで、子どもは主要な成分なのだ！¹⁵⁰

ここには子どもを中心とする核家族が描かれている。「私」は執筆業もしており、夫は出世欲がないため生活は少し切り詰めなければならないが、それでも忙しさの中に楽しみを見つけることを忘れない。

しかし楽しい気持ちというのは、自分から味わいに行くものである。子どもたちがぐっすり寝ている時、私たちが鍵をかけて映画を観にでかけるのを、台湾のコソ泥はすごくたちが悪いのにとハラハラする人もいる。でも私たちは、やはり子どもたちが寝た後のひと時を放棄したくない。夜の読書、夜の執筆、夜のおしゃべり、夜の遊び、どれもこのうえなく楽しいものだ。夜の読書に疲れたら、子どもたちに寝ながら留守番をさせ、二人で近くの夜市へ担仔麵を食べに行く。帰って来て気分がのったら、原稿用紙を広げ、ひらめいた感情をそこに記すのだ。¹⁵¹

決して裕福ではないが、夫婦二人で精神的に豊かな生活を送っている様子が描かれる。「私」は、現代生活のなかで人はみなお金があるかどうかばかりを気にかけるが、「おばあちゃんの心得（原文：祖母的精神生活）」という本の中に書いてある人生観を大事にしたいと思っており、文章は次のように締めくくられる。

「孤独は孤独でなく、貧しさは貧しさでない、弱さは弱さではない。もしいつでも楽しい気持ちで彼らを迎え入れれば、生命は花や香草のような芳香を放つのだ—そして生命はさらに豊かに、輝き、朽ちることがなくなるのだ—これこそがあなたの成功である。」

時間という現実を捉えて、楽しく努力して過ごしていく、大げさに悲嘆にくれることもない、一人の平凡な女性の平凡な生活、ただそれだけである。¹⁵²

前向きで、積極的な主婦が描かれている。注意したいのは夫との関係であり、夜遊びや楽しみも、二人で一緒に分け合っているという点で、近代主婦のなかでも進歩的なパターンであると言える。文章から、生活は夫の収入でしていることが窺えるものの、「私」の心理には夫との上下関係は感じられず、比較的対等な精神状態であることがわかる。文中では精神面の豊かさが強調されるが、それは夫の経済力を当てにして裕福に暮らす

¹⁵⁰ 林海音「平凡之家」「婦女与家庭」『中央日報』（1950.3.12）

¹⁵¹ 林海音「平凡之家」「婦女与家庭」『中央日報』（1950.3.12）

¹⁵² 林海音「平凡之家」「婦女与家庭」『中央日報』（1950.3.12）

依存型の主婦—前述の『兩個家庭』の非近代主婦とは、まったく異なるものである。

次は同様に、3人の子どものいる家庭を描いた散文である。子どもたちはとてもやんちゃで、そのうえ台北の6月は梅雨で外に出て遊ばず、客間兼書齋兼食堂の6畳間でソファやいすを動かして、ひっくり返して基地や建物に見立てて、大騒ぎで何やら“ごっこ遊び”をしている。子どもたちの煩さに、「私」はほとんど辟易している。

「三隻醜小鴨」(1951)

料理が焦げている匂いがして、急いで厨房へ行こうとするのだが、子どもたちが作った前衛基地を通過しなければならず、彼らの戒厳に出くわしたら、合言葉を言わなければならない。どうやって答えろというのか？最悪なのは、急な来客があったときで、ソファを動かしてお客に勧めようすると、子どもたちがピストルを撃つまねをして「動くな！」と叫ぶのだ。お客さまは「いいんですよ」としきりに言うが、私は慌てふためき、なすすべがない！¹⁵³

優雅に楽しみをみつけるという前述の散文とは執筆時期が1年ほど離れているが、これは作家の描写の変化なのか。ここには夫の描写がなく、「私」は一人きりきり舞いをしているようだ。しかしすぐに「彼」の描写が続き、夫の存在がやはり家庭に描かれていることに気付く。

彼と私は、子どもたちがあまりにも騒がしすぎるので、ときどき誰かが一日連れ出してくれたらと願う。そうすれば私たちは腰を落ち着けて食事ができ、ゆったりと静かに1000字ほど書けるのだ。¹⁵⁴

果たしてその夢は早々に叶い、祖母が子どもたちを一日連れ出して、友達の家に行くしてくれることになる。「彼」と「私」は今日一日ゆっくり執筆できると喜ぶが、食事のときにいつもの癖で茶碗を5つ出してしまい、ふと何かを忘れたような妙な気持になる。そして2人きりの食事は会話がなく、「魚が水を飲んでいるかのように」全く音がない。しかも食後にいざ執筆を、と思ってもうまくいかない。

机に向かって無理やり書こうとしても、文章が出てこず、気になって仕方ない。子どもたちはいまだどこにいるのか？おばあちゃんに迷惑をかけているかもしれない。バスの窓から頭を出したりしていないか？末っ子に薄着をさせすぎのでは？つい

¹⁵³ 林海音「三隻醜小鴨」「婦女与家庭」『中央日報』(1951.2.14)

¹⁵⁴ 林海音「三隻醜小鴨」「婦女与家庭」『中央日報』(1951.2.14)

に彼が口を開いた。「なんでまだ帰ってこないんだ？」 私は思わずサンダルをつっかけ、通りへ出ていき、うろうろし、遠くを眺め、「ママ」と呼ぶ可愛い声が聞こえてくるまで落ち着かなかった。結局、この日は一文字だって書けなかった！¹⁵⁵

子どもたちが帰宅するとまたしても笑ったり泣いたり、叫んだり大騒ぎになったが「私」は「電灯もさっきより明るく光って、熱さを増したような気がする」と感じる。「彼」もまた子どもたちを見て心底嬉しそうに微笑んでいる。ほんの半日いなかっただけなのに長い時間が経ったように感じる。彼らにとっては、子どものいない生活はすでに非日常であり、子どもと過ごすこの家庭に無常の喜びを見出すのだ。

“近代家族”の定義として、“子どもの発見”が重要な意味を持っていたことは前述したとおりであるが、林海音の描く、自らの分身ともいえる主婦のいる家庭は、まさに“子ども中心”で“恋愛によって結びついた夫婦”による“一夫一婦型”の“小家庭”という、近代家族の構図そのものであるといえよう。ただ、近代家族のもう一つの特徴としての“男は外、女は内”という概念はさほど強調されていない。それは例えば鍾梅音の描く主婦が、外で働く夫のために家の中を快適に整理していた姿とも異なり、より活発な印象がある。ここでもう一つ、活発で自己肯定感の強い主婦の、家族の日曜日をコミカルに描いた散文を紹介しよう。日曜日の朝、「私」がまだ布団の中でうとうとしていると、夫の号令が聞こえてくる。

「今日は星期天」(1954)

「今日は日曜日だ、こどもたちよ！」夢心地のなか、彼が訓示を発するように言うのが聞こえる。「いつも大変なお母さんを寝かせておいてあげよう！」子どもたちが元気にハイイ！と返事をすると、彼があわてて「シー！シー！」とそれを鎮めた。「この世に妻をいたわる夫が一体どれほどいようか？」と誰かが言っていたが、私は最初に反対を唱えよう。この種のいたわりの幸福を、私は存分に味わっているのだから。—いつも大変なお母さんを寝かせてあげようですって。私は微笑み、陶醉し、この「いたわりという幸福な果実」を堪能しながら、あたたかな布団で寝がえりをうった。¹⁵⁶

「私」は夢うつつで、夫が子どもたちに指示を出し、朝食の支度をしているのを聞く。夫はしきりに「今日は日曜日だからお母さんを休ませるんだよ」と言っている。しばらくして、私がベッドから起きて皆の様子を見に行くと、台所はいつもと違う新風景にな

¹⁵⁵ 林海音「三隻醜小鸭」「婦女与家庭」『中央日報』(1951.2.14)

¹⁵⁶ 林海音「今日は星期天」『大華晚報』(1954.2.12)

っていた。

・顔拭きタオルが鍋の上にかぶせられ、紙屑カゴが竈のそばに斜めに置かれ、コーンフレーク、牛乳の缶、鴨の玉子、バナナなどが、洗面器のなかに積み上げられていた！夫はちょうど子どもたちに点火の哲学を伝授しているところだった。彼は言った・・「人は忠心、火は空心、わかるかい？...だが、」と、彼は振り向いて私を見るや、「おや？ どうして寝てないんだ？寝ておいで、ここは僕がするから！」私は幸せな気持ちで微笑み「そろそろ起きるわ！」と言おうとしたが、彼はすかさず続けた・・「だったら、竈に火をつけてくれないかな、どうやら竈の調子がおかしいみたいだ、さもなきゃ火が着かないはずがないんだが。」¹⁵⁷

「私」が子どもたちの讚美の視線を集めながら、容易く火をつけると、長女が夫に、「コーンフレーク・ミルク・エッグ・バナナパンケーキ」なるものを作ろうと言う。それは彼の発明したメニューらしい。竈に火が着いたので、彼は元気を取り戻し、「じゃ、もう何もしなくていいよ、出来たてを食べさせてあげるから、僕らにまかせといて！」と子どもたちと一緒にその“不可思議な料理”を作ってくれる。

「味はどう？」そう聞かれて、私は頷き、思わず微笑みが漏れた。この微笑みの意味はとても深いものだった。こう言ってもいい、子どもたちの前でなかったら、私はきっと、感激して彼の髭ぼうぼうの口にキスして、こうささやいたはずだ・・「あなたのパンケーキの外側が焦げていて中が生だとしたって、誰に何と言われようと、私には 100 パーセント幸せの味よ！」¹⁵⁸

このあと、昼食や夕食まで子どもたちと作ろうとする夫の好意が溢れんばかりに描かれる。しかし、それは実は若干まとはずれであり、彼は食べ終わった食器を洗うことや、食事を作るためにはまず買い物に行かなければならないことにも気づかず、「魚が高かったから買わなかった」という妻に対し「鮮魚を買ってきたらよかったのに」と経済観念のないことを言う。だが、そんな夫に対し、「私」は決して文句を言ったり、批判したりせずに幸福を感じる。この夫をみるかぎり、普段の家事は妻がすべてしていることは明白であるが、家事を負担する不満など「私」の描写には少しもなく、むしろ主婦としての任務を全うしていることへの満足感と優越感すら窺える。

¹⁵⁷ 林海音「今日は星期天」『大華晚報』（1954.2.12）

¹⁵⁸ 林海音「今日は星期天」『大華晚報』（1954.2.12）

一方、当時の林の言説には、台湾の女性、とくに古い婚姻や家庭の因習にとらわれている女性の境遇を案じる描写がある。

「台湾的媳婦仔」(1950)

台湾の物質文明はかなり進歩しているものの、風俗習慣のうえではいまだに封建制度の形式を抜け出せていない。婚姻について言えば、台湾の婚姻は売買式の結納金制度から脱しておらず、「媳婦仔」の運命もまた売買婚制度のもとで生まれたのである。外省人から見れば、台湾の女性はとても開放的であるというのが一般的な見方で、少なくとも「性」の解放は話にならない。「台湾の女は乱れている！」彼らはよくこんなふうに言っている。彼らは、気候、生理、習慣、制度が複雑に関連して生まれた台湾の女性がどんなに自分たちの生命を嘆き惜しんでいるか、知らないのである。¹⁵⁹

媳婦仔(シンプアー・養女)とは福建語で、中国大陸でいう童養媳(トンヤンシー)と同義である。台湾の婚姻習慣では嫁をもらうのに多額の結納金がかかったが、貧しい家の少女を安い料金を買うことで、女中として使えるうえ結納金の節約にもなるため、この習俗は清代から続いていた。1950年代には政府によって養女保護運動が実施された。¹⁶⁰林海音は上記の文章のなかで、当時養女解放が呼びかけられていたことにも言及し、貧しい出身の養女たちは解放されても行くところがないと指摘している。

以上のように、林海音の1950年代の散文には、作家自身の分身ともいえる主婦像が描かれていた。それは、恋愛によって結ばれた夫婦、子ども中心の核家族、家庭役割(男は外、女は内)という特徴をもつ“近代家族”の主婦像であったが、近代家族の良妻賢母が悩みとする、仕事と家事の二重負担の問題などが批判的に描かれることはなく、生活を楽しみ満足度の高い、“自己肯定感の強い”主婦像として描かれていた。その一方で、近代以前の婚姻慣習に苦しむ台湾の女性に対する同情と、半山(台湾籍をもつ身であるがゆえの当事者)としての使命感も窺えた。林の文中の“旧女性”は、自らの分身である“新女性”(近代主婦)と対極をなす存在としてしばしば語られる。次の第三節では、林海音の北京時代に溯り、その家庭観が形成された背景と、“旧女性”に関する一連の描写を散文「我的北京回憶録」、小説「婚姻的故事」などからみていきたい。

¹⁵⁹ 林海音「台湾的媳婦仔」『中央日報』(1950.3.12)

¹⁶⁰ 台湾女性史入門編纂委員会編『台湾女性史入門』(人文書院、2008) pp.24-25、曾秋美(林香奈訳)の記述による。曾によれば、1950年代に政府は養女の救済のため「台湾省養女保護運動委員会」を立ち上げるとともに「台湾省養女習俗改善辦法」を制定した。

第三節 北京における家庭観の形成

一. 異郷の自由な小家庭—「我的北京回憶録」

林海音は、台湾へ戻って 1950 年代の後半頃から、5 歳から 30 歳まで暮らした北京での生活やことがらを散文に書いている。その代表作はさきに挙げた「城南舊事」であるが、1970 年～1980 年代には、北京での両親との暮らしを描いた作品が散見される。夏祖麗『林海音傳』と併せてそれらの作品を読んでいくと、林の家庭観には、両親の影響、とくに両親が北京という“異郷”で育んだ家庭の影響が色濃いものであったことがわかる。

(一) 父と母の漂泊

林海音が日本・北京・台湾という土地に跨るアイデンティティをもったのは、両親、とくに父の行動による影響が大きい。林海音（本名・林含英、幼名・英子）は 1918 年、大阪衣笠町の大阪回生病院で父林煥文と母黄愛珍の第一子として生まれ、大阪から台湾へ一時戻ったのち、最終的に北京へ渡るのだが、それは自由思想の持ち主だった父の意思によるものであった。

林煥文は台湾が日本に割譲される一年前の 1898 年、頭份（現在の苗栗県北部）区長（現在の鎮長）林台の長男として生まれ、地元の公学校¹⁶¹を 1903 年に卒業し、当時台湾の最高学府であった台湾総督府国語学校師範部に入学、卒業後は新埔公学校に配置される。林家は七代前に広東省の蕉嶺から台湾に移住してきた知識人の家柄であり、煥文は幼いころから漢文と書道をよくした。すらりとした長身、涼しげな目元に鼻筋の通った客家人男性特有の端正な容貌と熱心な指導ぶりは、生徒たちの憧れの存在だったという¹⁶²。20 歳の父が小学校に着任したときの様子を、林海音は散文「一位郷下老師」に書いている。

「一位郷下老師」（1980）

彼は中国語と日本語ともに精通し、達筆であったし、その風貌はハンサムであかぬけていた。すらりと背が高く、力強さがみなぎっており、ほりの深い瞳は輝き頬骨が少し高く、鼻筋はまっすぐに伸びた典型的な客家の青年だった。（中略）

いまどきの言葉でいえば「カッコイイ！」となるのであろうが、それはまだ満族の清朝末期のことで、彼が辮髪を切り落としてからそう長くはたっていないころのこ

¹⁶¹ 日本統治時代の台湾人を対象とした初等教育機関。道徳教育と日本精神を涵養する国語教育を主とした。日本総督府は 1895 年に国語伝習所を台湾の主要都市に設置、1898 年に「台湾公学校令」を発令し、伝習所に代わる教育機関として公学校が設置された。

¹⁶² 夏祖麗『林海音傳』によれば、のちに台湾文学史上初の本省人作家による雑誌『台湾文藝』を創刊し、日本統治時代の台湾人の苦難を小説「亜細亜の孤児」の作者として知られる作家吳濁流はこのときの林煥文の生徒であり、台湾人として不屈の精神を形成するうえで林の影響を多分に受けたとされている。

となのである！¹⁶³

その後 1913 年、彼は板橋にある林本源家の総幹事職にあった従兄林清文に、後任として推薦され、故郷を後にする。客家人の住む頭份や新埔と違い、台北近郊の板橋は閩南人の居住地であったが、明朗快活で社交的な父はすぐに板橋の知識人社会に溶け込んでいった¹⁶⁴。地元には何代か前に福建省惠安から台湾の板橋に移住してきた黄という一家がおり、15 歳の愛珍という娘がいた。もともと簡姓であったが、姉妹が多かったため男系家族の黄家に養女に出されており、性格は温厚かつ善良、聡明で家事が得意であった。小柄で色白な彼女は客家の女性たちとは全く別の趣があり、感情豊かな自由人だった 30 歳の父は、自分の半分の年齢である愛珍と新生活を始める。一方、煥文は日本統治下において思うように仕事ができないことに、常に不満とストレスを感じ、植民地となっている台湾は長くとどまる場所ではないと考えていた。1917 年、林煥文はすでに身ごもった愛珍を連れて一旗揚げようと台湾から日本へ旅立つ。そして翌 18 年、二人の初めての子である含英（幼名英子）が大阪で誕生するのだが、林はのちに母が語る大阪での暮らしぶりについてこう書いている。

「舊事三女子」（1985）

大阪での日々を、母はいつも楽しそうに語って聞かせてくれた。当時彼女は家から外に出たこともなかった異国の娘さん（他人の目にはたった 10 数歳の少女にすぎなかった）であり、たまに街を歩いていると、小さな赤ん坊を背負った女中さんが歩いているかのようにみえただけだった。春などは淀川や造幣局のあたりは桜が満開で、とてもきれいだった。また母がいうには、わたしたちが外を歩いていると、腕白な日本の子どもたちが「清国奴」というような中国人を馬鹿にする言葉を浴びせてきたりもした。母が中国服を着ていたためである。¹⁶⁵

父は日本の飲み屋街でたびたび飲み明かし、一晩で通りのすべての店を梯子するほど大酒飲みであったが、「父にはそれを上回るよいところがたくさんあった」と林海音は書いている。父は仕事に対する責任感が強く、よりよく生きようと努力し、人助けをよくし、お金にけちではなかった。躰には厳しかったが、とても愛情をかけてくれたとい

¹⁶³ 「一位郷下老師」（『我的京味回憶録』遊目族文化出版、2000）p.32

¹⁶⁴ 『台湾の歴史』（喜安幸夫、原書房、1997）によれば、明代ころには福建、広東から台湾への移民が増加した。なお、閩南人とは福建省出身者で移民のなかでも多数であるのに対し、客家人は少数派であった。これらの人々は 1945 年以降に大陸から渡ってきた外省人と区別して内省人と呼ばれる。

¹⁶⁵ 「舊事三女子」（『我的京味回憶録』遊目族文化出版、2000）p.47

う。母の愛珍について、林は「母は典型的な中国の三従四徳の女性であり、字はあまり知らなかったが、美しく聡明で、性格がとてよく、明るくて、やさしく、争いを好まず、うらみごとを言わず、勤勉できれい好きだった」と書いている。まだ 16 歳だった愛珍にとって、異国での生活は非常に心細かったはずであるが、母は昔話をするときでも、決して父の悪口や愚痴を言わなかった。

父の事業はおもわしくなく、英子が 3 歳のとき一家は一旦台湾の頭份（父の実家）へ戻る。父はさらに新天地を求め北京へ旅立ち、母子はその間両親の実家で暮らし、そこで次女秀英が誕生している。16 世紀頃に大陸から台湾へ入植した人々（戦後に渡ってきた人々と区別して本省人と呼称される）の中には、客家系、閩南系という異なる言葉や文化をもつ人々がいた。当時、客家の家に閩南人の母が嫁いだのはめずらしいことであった。次の散文には、父の実家で奮闘する母の様子が健気な嫁として書かれている。

母は纏足もしたことがあり背丈も低かったが、客家の女性は纏足しておらず、働くときも力強かった。しかし小柄な母は客家の大家族にいて非常によくなじんでいた。それは母が聞き分けがよく余計なおしゃべりをしなかったからだろう。母がいうには、嫁たちは持ち回りで食事を担当しており、自分も同じようにその順番に加わった。小柄だったため、田舎の大きな台所で薪を燃やし、煮炊きするときにはいつも小さな椅子に乗っかなければならなかったが、つらいと言ったことはなかった。泣き言を言わない、というのも女性の特性のひとつだろう。私は母が泣き言を言うのを聞いたことがない。こうした徳性はひそかに、人としての道理をわたしたち兄弟に受け継がせている。私にしても、性格はせっかちだが苦勞に耐える力はかなりある。これは半分が客家人、半分は母の血であろう。¹⁶⁶

（二）北京での生活

1923 年、北京で日本人の発刊する「京津日々新聞」北京支社に職を得た煥文は、母と英子を迎えにやってくる。一家はまず基隆港から大型船大洋丸に乗って上海に渡り、そこから天津で中国船に乗りつぎ北京へ向かった。5 歳の英子は和服を着ていたという。このころ、故郷台湾はすでに日本の植民地となって 28 年が経っており、日本語による教育が普及していた¹⁶⁷。当時、煥文と同じように日本統治下の台湾を脱出し、北平に新天地を求めて渡った人々がいたが、このなかには台湾の著名な文学者となる張我軍¹⁶⁸も

¹⁶⁶ 「舊事三女子」（『我的京味回憶録』遊目族文化出版、2000）p.48）

¹⁶⁷ 1898 年の下関条約で台湾、澎湖島は日本に割譲され、太平洋戦争後 1945 年まで 50 年間日本の植民地にされた。日本統治下では日本語の使用や日本名をつけることが強制され、皇民化政策が実施された。

¹⁶⁸ （1902 生－1955 没）台湾の文学者、作家。本名張清榮、字は一郎。台北板橋人。1925 年か

おり、林家とは家族ぐるみのつきあいがあった。その息子何標（張光正）が後年書いた文章¹⁶⁹によれば、北京には当時、科挙試験を受けに来る学生のために建てられた各地方の「会館」があった。台湾からの受験生を受け入れる台湾会館も存在していたが、1895年に台湾が日本に割譲されると、台湾会館は効力を失い、台湾から来た人々は広東や福建の会館を利用していた。北京に到着した一家もその後福建永春会館、晋江会館、広東蕉嶺会館などに移り住んだ。外務省の統計によれば、1925年の「北平」には日本人1625人、朝鮮人628人、台湾人は男女合計でわずか66人¹⁷⁰であったと記録されているが、福建などの名義をもちいて居住するケースもあり、実際には数字以上の台湾人が住んでいた可能性がある。ともあれ、当時の台湾人は外国人としては少数であり、言葉なども地元北京の人々とはかなり異なっていた。こうした台湾人の微妙な立場を、林海音は次のように書いている。¹⁷¹

「番薯人」(1984)

私は物心ついてから、よく「番薯人」という言葉を聞くようになった。台湾の同郷の間ではさらにしょっちゅう耳にした。「番薯人」とはつまり台湾人のことで、みなお互いに台湾人という代わりに「番薯人」で代用していて、台湾人の別称となっていた。台湾の地形は番薯（サツマイモ）に似ているからそう呼ばれるようになったという。同郷の先輩たちは北京で、ときに自分のことを「番薯仔」と呼んだりしていた。台湾と言わずに「番薯仔」というところに、異郷人としての無限の辛酸が偲ばれる。台湾人は日本に占領された故郷を遠く離れて祖国へ逃れ、みな祖先の籍がある福建、広東の両省の人間として登記していた。私が小学校に上がる時は父の祖先の籍である広東蕉嶺を本籍として書いたし、父の死後は、母の祖先の籍である福建省同安と書いていた。こうしたやり方は、一つには北京の日本領事館など当局の注意をそらすためでもあったし、もうひとつには、祖先の人々のまえでもし台湾人だと名乗ったら、異様な目つきで見られるかもしれないからであった。なんと可

ら社会派新聞《台湾民報》の編集となり、日本統治当局の圧制を批判。1926年北京中国大学国学科へ入学後、翌年北京師範大学国文科に転学。卒業後は日本語教師、北京大学と中国大学で教鞭をとる。終戦後帰台し「台湾省教育会」編纂グループ主任。評論には20年代に「台湾青年への手紙」「めっちゃくちゃな台湾文学界」を発表し台湾の“新旧文学論戦”を展開、新詩集『乱都之恋』がある。台湾における新文学運動の旗手と呼ばれる。

¹⁶⁹ 何標「北京台湾会館史話」(《台声雑誌》1994年9月)および「《城南旧事》作者林海音青年時代的人和事」(《兩岸關係》2001)。何標はもとの名を張光正、1926年北京生まれ、中国共産党員。大陸在住台湾人の民主派政党・台湾民主自治同盟会員。著作に『番薯藤系兩岸情』『明月多应在故乡』、また編・出版として『張我軍選集』『張我軍全集』などがある。1993年黄河杯征文優秀賞を受賞。

¹⁷⁰ 外務省亜細亜局『支那在留邦人及外国人人口統計表』第18回

¹⁷¹ 「番薯人」(『我的京味回憶錄』遊目族文化出版、2000年) p.23-24

哀想な「亜細亜の孤児」ではないか！

「亜細亜の孤児」とは、戦後台湾を代表する台湾人作家の一人・吳濁流の小説であり、日本の植民地支配下において理不尽な立場にたたされ、祖国と信じていた大陸中国へ渡っても軽視されるという、台湾人知識青年の苦悩を描いた作品である。みずからの確たるルーツと居場所をどこに求めたらよいのか、それは林海音にとっても常につきまとう問題となっていく。

辛亥革命後、北京には台湾人による「台湾同郷会」が設立されており、林海音の父林煥文も北京でこの会の責任者を務めている¹⁷²。上述の何標によれば 1920 年代の北京には 40～50 人の留学生がおり、信仰や主義はまちまちであったが、日本の台湾統治に反対する意思で通じていた。1921 年には台湾島内での日本統治当局に対する闘争を積極支援・連携する目的で「台湾青年会」が結成され、煥文はその一員でもあった。はじめ京津日日新聞社北京支社に勤務していた父はほどなくして北京郵政総局¹⁷³の日本課長に転職し、それからは台湾人学生の送金はすべてみずから処理し、同郷人のもめごとや紛争に巻き込まれればすぐに出て行って仲裁したという。

林海音が暮らした北平“城南”は、現在の故宮の南側、前門や瑠璃廠一帯であり、当時はまだ城壁があったためその内側と外側に跨るエリアであった。林一家はここで椿樹上二条→新簾子胡同→虎坊橋→西公民巷→梁家園→南柳巷と計 5 回引越しをしている。これらの場所は家族の思い出とともに林海音の心に刻み込まれ、1987 年に書かれた散文「我的京味兒回憶錄」において回想されている。一家はまず、正陽門（今の前門）の南側、で“城外”であった西珠市口の謙安客棧に一時逗留する。ホテルや劇場、百貨店や八大胡同芸妓院などが集まる賑やかな繁華街にあり、それらを興味津々に眺めていると、地元の人たちは反対に英子の着ている和服をものめずらしげに見たという。そして最初に居を構えたのは椿樹上二条のもと「永春會館」で、映子はここから現地の小学校へ通い始める。

椿樹上二条で、私は北京の女の子としての生活をスタートした。私は布で裏打ちした布靴を履き、ズボンをはくようになった。豆乳を飲むようになり、羊のシャブシャブ（いつも母が鼻をつまんで、とうとう一度も口に入れることがなかったしろも

¹⁷² 何標が「《城南旧事》作者林海音青少年時代的人和事」（《兩岸關係》2001）のなかで挙げているが、1926 年に台湾同郷会が林宅で開かれたときの写真が林海音の「家在書坊邊」（純文学出版社、1987）に載せられており、魯迅が通ったとされる歯科医陳順龍をはじめ実業家や学生 12 名の台湾人が集っている。そのなかに父煥文とのちに日本人に捕えられ獄死した叔父炳文の姿もみられる。

¹⁷³ 1928 年に国民党政権下に入る。

の)を食べるようになった。そして師範大学付属小学校の一年生になり、中国語のローマ字表記を勉強し、一から十まで中国の新しい教育を受ける生活が始まったのだ¹⁷⁴。

この家では三女燕珠と弟燕生が誕生したが、男子の誕生について林は「弟がきたことは林家にとって慶事だった。なぜなら私には台湾に2人の異母姉とすぐ下の妹がいたので、このとき父にはすでに娘が5人いたことになる。この弟が生まれたのはとても大切なことであった」¹⁷⁵と書いている。また『城南舊事』にも登場し林の思い出に欠かせない人物、宋媽が弟の乳母としてやってきたものこの家である。この時家族は3人から6人に増え、家が手狭になり、一家は城壁内の新簾子胡同に引っ越している。横町の行き止まりにある静かな家で、学校が遠くなったのでようやく人力車通学を父に許してもらった。

1926年、一家は大通りに面した虎坊橋の四合院に引っ越すのだが、林海音はこの家を「少女時代もっとも忘れがたい場所」¹⁷⁶として挙げており、『城南舊事』の主な舞台であると記している。三つの棟からなる大きなこの家は、もともと広東の人が利用する「蕉嶺会館」であった。台湾の祖父は先祖の墓参りに毎年蕉嶺を訪れており、父は北京でも同郷人と親しかったため、この建物全部を借りることができたのだ。当時北京にあった「会館」には各省の学生が住んでいたが、建物の管理費用をまかなうために貸家にされる建物も多数あった。

美的センスがあり清潔好きな父は、すぐさま建物を塗りかえ整頓して一新した。あそこ父の交友関係は広くて、家の人口も多かった。うちにはもう6人の姉弟妹がいて¹⁷⁷、車夫に宋媽ともう1人の乳母を加えるとぜんぶで11人になっていた。週末はいつもお客が来ていて、母は毎日広安門大街の広安市場に野菜を買いに行き、魚やエビは西河沿いに買いに出かけた。¹⁷⁸

父の収入も安定し、家族や使用人も増えて毎日友人で賑わっていたこの屋敷での生活は、のちに客好きで人との関係を重んじる林海音の人柄を形成していったと思われる。仁義に厚く自由な思想を持つ父は、中国文学と伝統藝術を愛好し読書を奨励した。ふだ

¹⁷⁴ 「我的京味兒回憶錄」（『我的京味兒回憶錄』遊目族文化出版、2000）

¹⁷⁵ 「我的京味兒回憶錄」（『我的京味兒回憶錄』遊目族文化出版、2000）父は板橋に移る前、郷里の頭份で張という女性と最初の結婚をして二女を設けている。

¹⁷⁶ 「我的京味兒回憶錄」（『我的京味兒回憶錄』遊目族文化出版、2000）p.7

¹⁷⁷ 1926年に四女燕瑛、1927年に五女燕玢が誕生し、台湾から連れてこられた次女秀英も加わった。

¹⁷⁸ 「我的京味兒回憶錄」（『我的京味兒回憶錄』遊目族文化出版、2000）p.8

んは厳しいが、英子が読みたい本だけは雑誌も本も好きなものを買ってくれた。こうした父のもと、英子は文学に対する情熱を培っていった。

また、このころはちょうど蒋介石が北伐をおこなっていた“革命”の時期であり、女性の身の回りにも変化が起きていたことが文中で触れられる。20年代半ばころは、新文化運動、婦人解放運動が極限に達した時代であり、大勢の女性がおさげを切り落としていた。林海音が通う小学校でも毎日のように髪を切ってくる少女が増え、学校では全校生徒を集めて「体や髪の色は両親からもらったものだから傷つけてはいけない」と説教をされたが、時代の流れをせき止めることはできなかったこと、自分も髪を切ってみたが、両親にはとくに何も言われずホッとしたというエピソードもみられる¹⁷⁹。

その後、林一家は北京の大使館街である西交民巷に移り住む。家は中国銀行の向かいで、近くに宣教師の集まる教会があり、西洋人の宣教師が説教をする声がよく聞こえてきた。

父はその教会へ説教を聞きに行くよう私に言ったが、たぶん英語の勉強になるとでも思っていたのだろう！実際はそこでもらう絵付きカードが好きただけで、英語は一字も勉強しなかった。でもこんな歌は覚えたっけ。「イエスが私を愛して下さるのはなんと素晴らしいこと、聖書が私に教えてくれる、すべての子どもたちは子羊なのだ…」¹⁸⁰

好奇心旺盛で教育熱心な父と、何不自由なく暮らす娘の姿が垣間見える。父は厳しかったとはいえ、父と娘はいわゆる儒教思想にもとづく封建的家族にみられるような、服従の関係ではなかった。また家族の人数は多かったが、異郷に2世代だけで暮らしていた林一家は、嫁姑や妾との上下関係や地域的なしがらみとも無縁の、比較的自由的な“小家庭”だったと言える。

(三) 父の死

だが、父は西交民巷に住んでいたころから肺病で入院するようになり、一家が梁家園に引越しをしてからやがて他界してしまう。父が病に倒れたのは、叔父が日本人に獄死させられたことが大きな原因だったと林海音は書いている。兄を頼って北京に職を得た叔父は、妻子も台湾から呼び寄せて生活も安定するはずだったが、中国大陸では日本軍の侵略が顕著となり、1928年には山東出兵が開始する。叔父は朝鮮人たちと抗日活動に

¹⁷⁹ 同じエピソードが「我的京味兒回憶録」と「文華閣剪髮記」（『我的京味兒回憶録』遊目族文化出版、2000年）にも散文として書かれている。母や宋媽に無理やり納得させて切ったあと、父に怒られるのではとドキドキする少女の様子が描かれている。

¹⁸⁰ 「我的京味兒回憶録」（『我的京味兒回憶録』遊目族文化出版、2000）p.12

参加するようになったが、あるとき現金を運ぶために満州鉄道に乗っていたところを日本軍に逮捕され、大連の監獄で拷問を受けてそのまま獄死したのである。父はみずから遺体を引き取りに大連へ出向いた。台湾の祖父は「せっかく台湾を離れて兄のもとへやったのに、なぜ」と父を責めたという。北京に来た当初には日本の蓄音機を家族揃って聴いたり、日本のすき焼き鍋でスキヤキを楽しんだり、日本文化に親しんでいた一家の様子も、林海音の散文にみられるのだが、10年足らずの間に日本は林家にとって身内の仇に変わってしまった。父の心労は病気となって悪化し、満州事変が勃発した1931年、林煥文は44歳でこの世を去る。その生前の求めに応じて火葬されたが、日本人の火葬場で日本の僧が経をあげた。日本軍の中国侵略がますます激化していくなか、台湾の祖父は寡婦と6人の子供たちを案じて戻ってくるよう勧めるが、それを頑として拒絶したのは英子であった。

父の死後、祖父はわたしたちに台湾へ帰ってこいと手紙をよこしてきた。私はまだ中学一年だったが、すぐに首を横に振った。日本の教科書を学ぶために帰るなんてまっぴらだと私は言ったのである！¹⁸¹

叔父と父を死へ追いやった日本の統治下にある台湾で、中国の言葉と文化を捨てて生きていくということは考えられない、と英子は拒絶する。妹や弟も台湾のことは何一つ知らないし、母に至っては...英子はその昔、父の実家でまだ赤ん坊の自分を背負いながら食事の準備をしていた母の姿を思った。体が大きく力も強い客家の兄嫁たちに囲まれ、小さな体で必死に家事をしていた母、またあの大家族でやっていくのは辛いに違いないと、英子の胸にはそんな思いもよぎった。結局、北京に残ることを決断したのは英子であった。自由を求め北京へやってきた父の意思と同様に、総領娘の英子が一家の長として決断を下し、伝統的な女性であった母愛珍は娘の意思にすべてをゆだねた。

父の死後、一家は支出を抑えるために南柳の晋江会館に引っ越す。晋江は福建省の地方会館で、母の祖先が福建省の出であったためにここに無料で住むことができたからである。英子は福建人なら学費援助がある春明女子中学に入学する。この家で英子は21歳で結婚するまでの10年間を過ごすのだが、幼い弟妹とあまり読み書きのできない母のなかで中学生になった英子は、一家の主として家のことをしきるようになっていく。

「我的京味兒回憶錄」(1987)

父が他界してから、母は一日中家で子どもの世話をしているし、上の兄弟はいない

¹⁸¹ 「我的京味兒回憶錄」(『我的京味兒回憶錄』遊目族文化出版、2000)

し、何を読んで、どこの学校に行くかもすべて自分自身で決めていた。¹⁸²

当時通っていた中学校は福州人が設立した私立校で、宣武門にあった。自宅の近くには新書局と現代書局があり、英子は雑誌《現代》¹⁸³を購読するなど新文学を存分に吸収していた。

雑誌は定期購読していたものの、家族の洋服を新調することはなくなり、父の慰霊金で暮らす一家に経済的な困窮がじわじわと襲ってきていた。「母の性格が明るく楽天的であったため、父なし家庭の悲壮感は感じなかった」と林海音はのちに書いているが、この頃、もともと虚弱体質だった四女が病気をこじらせて5歳で亡くなり、すぐ後に赤ん坊だった末の弟も他界するという悲しい事件が相次ぐ。子どもの葬式は親が出さないというのが旧来の慣習であり、弟妹の葬儀は英子がすべて自分でおこなったという。

春明女子中学を卒業した英子は、新設校の北平翊教女子中学に入学するが、まもなく成舍我¹⁸⁴が創立した北平新聞専科学校に中途転入する。この学校は学費が無料で勉強しながら新聞社で実習させてくれるという、願ってもない条件の学校だった。ジャーナリストの道など考えたこともなかった英子だったが、ものを書くことへの興味はあった。1934年、英子が16歳のときのことである。

(四) 世界日報の女性記者

当時、成舍我といえ、まだ30前後であったが新聞人として非常に著名であった。若く精力的な彼は北京で指折りの大新聞『世界日報』『世界晩報』『世界画報』の三紙を手がけるほか、南京で「民生報」と学校経営もおこなっていた。「新聞学」の授業にはテキストがなく、師みずから語る理論を口述筆記し、家で清書するのはほとんど徹夜だったが、そうした厳しい訓練によって、学生たちは聞き取りと仕事を整理する力を身につけていった。また白話文に優れていても古文をおろそかにしてはならないとの考

¹⁸² 「我的京味兒回憶録」（『我的京味兒回憶録』遊目族文化出版、2000年）

¹⁸³ 1932-35年に出版されていた月刊総合文芸誌。代表的作家に詩人の戴望舒がいる。

¹⁸⁴ 成舍我、1898年南京生まれ、本籍は湖南省湘郷。14歳で《民岳報》に投稿をはじめ《健報》《民國日報》《益世報》などの新聞社でジャーナリストとして働き、1920年～30年代に《世界晩報》、《世界日報》、《世界畫報》という一連の新聞をはじめ上海立報、香港立報、《自由人》半週刊、《小世界》週刊、台湾立報等報刊などを創刊。現代中国新聞史上もっとも多数の新聞を発行した新聞人であり、政治家と教育者としても著名。常に公正な態度を追求した。1952年に台湾へ移ったが、当時の新聞規制ですぐに新聞を発行できず、1956年に台北木柵に「世界新聞職業學校」（現世新大学）を設立。一生を通じ「報道の自由（新聞自由）」と「人権保障」のため奮闘した。

えから、学校では古典も彼が教えた。師の舎我は、完全な新聞人になるためには印刷・業務・編集など新聞社のあらゆる部門で訓練すべきだと考える一方で、個々の学生の才能に合った授業を選択させた。英子は取材の実習科目をとるよう指導され、訪問や質問の仕方以外にジャーナリストとしての考え方を叩き込まれる。

「我的採訪学及其他」(1970)

取材する際もっとも重要だったのは、なにかニュース(たとえば凶悪殺人事件とか)があれば、決して片方だけ取材してはならない。必ず両方の話を聞きに行かなければならない。被害者がなぜ殺されたのかを聞いたらもう一方になぜ殺したのか、さらに多くの関係する問題を聞かなければならない。もうひとつ大事なのは、直接取材することで、家から電話をかけてすましてはならない。これも大変な作業になるだろうが、こうして長く訓練していけば一つ一つのニュースは必ずこうして処理すべきだということに気づくはずだということであった。¹⁸⁵

こうして英子は学校で学ぶかわら仕事として正式に取材をすることになり、昼間は授業、夜は新聞社で原稿書きという生活に入っていた。当時の世界日報は北平西長安街のビルに移ったばかりで、上階の別棟に成舎我の住まいがあり、厳格な師が家から仕事場のほうへ歩いてくる足音はいつもはっきりと聞こえた。成舎我はまだ学生の英子に対しても、仕事には非常に厳しく要求も高かった。上海や南京で発行している「立報」「民生報」の状況を見に出張しているときも北京の新聞は毎日かならずチェックしていた。

先生は「世界日報」と他紙を比べ、とくに北平でもうひとつの大新聞「北京晨报」の報道内容とは逐一比較していた。当時わたしは婦人、教育欄をおもに担当していたが、もし「北平晨报」に掲載されたニュースが「世界日報」には見当たらず、それが私の担当分野のものだった場合には、先生は航空便で報道比較と指示を書き付けたノートを送ってよこし、大いに批判されるのだった。しかし、クラスの中で選抜されて正式に取材の仕事に就いた私に、先生が大きな期待をかけているのだということは分かっていた。¹⁸⁶

厳しい師・成舎我と好対照に、夫人蕭宗讓の人柄はとても穏やかで同僚たちから慕われていた。緊張した職場で仕事を終えると、みな師の自宅で夫人とマージャンをしたり

¹⁸⁵ 「我的採訪学及其他」(『我的京味兒回憶錄』遊目族文化出版、2000年)

¹⁸⁶ 同上

カルタをやったりしてリラックスした時間を過ごした。蕭はフランス留学の経験をもつ女性で、北京の社交界ではいろいろと活動をしていて顔が広く、婦人欄を担当する英子をいろいろな会に出席させ、取材相手となる人物を紹介してくれた。

(五) モダンな職業婦人、同僚との恋愛結婚

英子は1937年、19歳で学校を卒業し、正式に「世界日報」の記者となる。写真回顧録¹⁸⁷に載せられた当時の英子は、体に沿ったチャイナドレスに肩までの髪には細かなパーマ、女優風の細眉というモダンガール風のスタイルで写真におさまっている。濱田麻矢によれば、1920年代後半頃から大都市では商業経済が定着し始め、女性の職域が次第に広がった。下層階級の女性が生活に追われてやむをえず職業につくだけでなく、中上層階級の女性にとっても、社会に出て職業につき、経済的に独立して自己実現をすることが目標となった。¹⁸⁸このころは家から一步も外に出ない纏足の女性たちがまだいる一方で、上海や北京などの大都市においては、小中学校で教育を受けて商業や金融、医師や弁護士といった非単純労働に従事する女性も現れた。新聞記者も当時教師や弁護士などと並ぶ人気職業であった。またファッションの面でも、大都市を中心に新式のチャイナドレスが登場し、収入を得た女性たちは自らの好みに合わせて多様なファッションを楽しむようになった。女性の身体的特徴を隠すように裁断された伝統的服装とは対照的に、“旗袍”は女性の体の曲線をより強調するように作られ、租界社会のある上海などを中心に流行し、纏足をせずに軽快な服装とヒールで闊歩する女性たちは人々の憧れの的となった。英子もそのような女性の一人だったと思われる。

英子が正式に女性記者となった1937年は、すでに中国各地で日本軍の侵略が相次ぎ、北京へもついに日本軍が入城した年であった。「世界日報」の政治面には毎日激化する戦地のニュースが掲載されていたが、その一方で毎週水曜、四面の『婦女副刊』¹⁸⁹には家庭や健康、育児のほか映画女優のインタビューや西洋の主婦の結婚観なども紹介されており、当時の女性をとりまく様相が窺える。たとえば第一回目の掲載記事には「男子が配偶者を選択する条件」と題する文章があり、“結婚してはいけない女性”としての10項目の条件が挙げられている。内容は「自分の家が貧しいからといって、恋人に家族を紹介しない女性は個人主義者である」「母親の手は荒れているのに自分の手がきれいなのは、内助の功とならない女性である」「子どもにやさしくないのは教育に適していない女性である」「着飾ることばかり熱心で本も新聞も読まない女性は家をきりもりする

¹⁸⁷ 『穿過林間的海音』（遊目族文化出版、2000年）

¹⁸⁸ 濱田麻矢「IV-3 近代女性の職業」関西中国女性史研究会編『中国女性史入門—女たちの今と昔』（人文書院、2005年）p.92

¹⁸⁹ 『婦女副刊』「世界日報」第4面、毎週水曜日掲載で1937年9月～12月。

のに適さない」などという項目もあり、教養ある“近代家族の良妻賢母”を賞賛する傾向がみられる。

林海音によれば、当時は時代に生きる女性たちの姿をテーマとした「女性訪問記」を担当しており、美術学校で生活のために裸婦のモデルを務める没落旗人（旧満族）の令嬢を取材したことや、1936年に北京を訪れた林芙美子にインタビューしたことなどが散文に書かれている。林芙美子の取材に関しては、戦争の真只中にあった当時、このご時勢で日本人を取材するとは非常識だと成舎我に非難されたというが、林海音はのちに「貧しさのなかで創作し続ける強い女性として尊敬すべき人物だった」と記している。

女性記者として多忙な日々のなかで、英子と職場の同僚夏承楹との間に愛が芽生える。当時《世界日報》編集部の部屋は空間を節約するため、日勤と夜勤の社員は一つの事務机を共有しており、英子と「学生生活」版編集長の夏は合鍵で同じ机を使っていた。彼は代々続いた知識人の家の出身で9人兄弟の6番目であり、北京師範大学の小中学校を卒業したのち、師範大学外国語科を卒業して新聞社に入社した。中学時代はバレーボール部で活躍したスポーツマンで、ハーモニカも得意で大学のときにはラジオ局で定期的に放送されたこともあったという。『林海音傳』によれば、夏承楹が最初に英子と知り合った時の印象は「きれいで付き合いやすい人柄」であり、二人はやがて家が近いこと、師範大付属中学の先輩後輩同士だったことに気づく。ともに読書や映画、外食したり友人と賑やかに過ごしたりするのが好きで、どちらも仕事熱心で責任感が強く、正直な性格の二人は、自然に意気投合した。二人の“恋愛史”について林海音本人はのちに次のように語ったという。

「他の人が恋愛するときのようなあれやこれやは、わたしたちにはなかったわ。きっといろんな人がモーションをかけてきたでしょうとよく言われたけど、実際わたしはやたらにそんなことさせなかったしね。わたしたちは一緒に遊び、わたしも文章を書き、彼も書いていたから、志が同じだったということよ！」¹⁹⁰

1939年5月13日、英子は夏承楹と結婚し、母や弟妹たちと10年間住み慣れた南柳巷の晋江会館から同じ城南にある永光寺街の夏家へ嫁いでいく。承楹30歳、英子22歳のときのことであった。

南柳巷もわたしが住んだうち重要な存在となった場所だった。住んだ時間も長く、父を亡くしてから10年という成長過程において、学業、就職、結婚、どれもこの家から出発したのだ。わたしの努力、わたしの苦しみ、わたしの楽しみ、わたしの

¹⁹⁰ 夏祖麗『従城南走来：林海音伝』（天下遠見出版、2000）p.78

感傷……さまざまな思いが含まれているが、ひとつ大事なことは、わたしたちは温かくて仲睦まじい、お互いに支えあう家庭をもっていたということだ。なぜならそれはわたしたちに聡明で善良な決して弱音を吐かない母がいたからである。¹⁹¹

母の父に対する尊敬と愛情は徹底しており、奥さん同士がよくするような夫の陰口はおろか、子供たちと思い出話をするときでさえ、決して父を非難するような会話には加わらなかった。そして、英子が外で奮闘していた 10 年の間、母愛珍は家の中のことすべてを担い、快活さと優しさで子どもたちを包み込んだ。仕事をもち、一家を支え、同僚という対等な関係の男性と恋愛結婚した英子は、父に連れられ異国で結婚生活を始めた愛珍とは対照的である。しかし、愛情で結ばれた両親の“小家庭”は、英子の家族観を形成するうえで大きな影響を与えたと思われる。

二. 大家族の 6 番目の嫁—「婚姻的故事」

結婚後の「英子」が主人公として登場する作品に「婚姻的故事」という自伝的小説がある。そこには林海音の結婚生活と当時の北京で見聞きしたさまざまな「婚姻の物語」が記録されており、林の家族観に迫るうえで重要なテキストとなっている。主人公の「私」は作者自身と一体であり、実際の見聞を合間に評論的表現も挿入しながら書いているため、小説というよりは散文または実録的な趣がある。本章では、この作品に描写された内容と時代背景から、林海音の主婦像への影響を探りたい。

(一) “古老的大家庭”—旧式の大家族

林海音はみずからが嫁した夏家について、小説や散文のなかでたびたび「旧式の大家族」という言葉を使って表現している。ここで「婚姻的故事」の内容をみる前に、中国の伝統的な家族観について確認する。

大島立子が『中国女性の一〇〇年』序¹⁹²で述べているように、中国における「家」は父系の継承によって引き継がれることが原則であった。紀元前に編まれた『詩経』にはすでに「男子が生まれれば床に寝せ、晴れ着を着せて玉を手を持たせて遊ばせる。女子が生まれれば土間に寝せ、褌（むつき）を着せ、糸巻きのおもりを手に持たせて遊ばせる」という内容の文言がみられており、家の主となる男子は古くから女子より尊ばれていた。先祖は男子によって祀るものとされ、女性の役割は子を産み血筋を継承することであったが、必ずしも男子が生まれるわけではないため夫が妾をとることは公然とおこなわれた。また婚姻に関しては父またはその代理となる母によって決められ、個人の自

¹⁹¹ 「我的京味兒回憶録」『我的京味兒回憶録』（遊目族文化出版、2000年）p.18

¹⁹² 中国女性史研究会編『中国女性の一〇〇年—史料にみる歩み』（青木書店、2004）p.4・8

由はなく、婚姻の解消についても妻に主導権はなかった。また「女子の才なきはすなわちこれ徳なり」¹⁹³と言われたように、女性たちは読み書きができなかったとされる。一部の上流家庭では母親による子どもへの教育や女性に対する教育もおこなわれていたとはいうものの、家庭内で女子が受けた教育とは、夫や舅姑によく仕えるための「女四書」¹⁹⁴が中心であり、「三従四徳」¹⁹⁵が尊ばれた。

宋代を起源とし明代に至ると一般市民にまで普及したとされる纏足も、家族における女性の立場を象徴する中国特有の風俗であった。女性たちは幼いころから布で固く足を縛り無理やり成長を止められ、この小さくてか弱い足が上流階級の女性の美の条件とされた。人間を作為的に不具者にさせる行為であったにもかかわらず、清代にはすでに女性自身にとって“自らの価値を高めるための武器”として深く浸透し、女性たちは進んでその習慣に従い、母親は娘の将来のために、泣き叫ぶ幼児の足を縛り石で打ちつけた。

一方、ジュリア・クリステヴァが指摘するように、父系的な親子関係のもとでも、また儒教的家族のなかでさえも、女の、とりわけ女の親族の役割の重要性はどこまでも続いていた。裕福で政治的に重要な家族の出身である場合には、この重要性は圧倒的なものになりかねなかった。¹⁹⁶クリステヴァはまた清朝の小説『紅樓夢』のなかに描かれる老母の全能の権勢をとりあげ、正妻がその家族の祖母となったときのその権勢の、専制的な、男性的ですらある様相を述べている。

さらに、同じ家の別々の空間に暮らす正妻と妾の間には、家庭内の女性のヒエラルキーにおいて確たる区別が存在していた。妾がたとえ男子を生んでも、その母権は正妻に属し、その子どもの教育や結婚も正妻が実権を握っていた。そして息子が結婚するとその母は、正妻の地位に加えて、敬われるべき年長者の地位をさらに得て、絶対的権威をもつ。正妻と妾、嫁姑の関係が、閉鎖された“家”の中でさまざまな葛藤と憎悪を生んでいた。社会における男性の優位、女性の劣勢の構図とともに“家”においては息子を生子確たる地位を築いた母親とそれ以外の女性—嫁や娘、妾という上下関係が確立しており、また子沢山で数世代が同居する大家族が繁栄のしるしとして理想となっていた。¹⁹⁷ た

¹⁹³ 女性に対する中国の古訓。民末清初の文人張岱の「公祭祁夫人文」に“眉公曰く‘丈夫有德便是才，女子无才便是德。’の文言がみられる。

¹⁹⁴ 儒家の經典である四書に則り作られた女訓書集。王晋升（王相）編「女誠」「女論語」「内訓」「女範」の四書をさす。清の康熙帝（1662～1722）の時代に成立。（日本大百科事典、小学館）

¹⁹⁵ 三従は古代、婦人がまもるべきとされた三つの事柄で、結婚前には父に、結婚後は夫に、夫の死後は子に従うことをさす。（『儀礼』喪服）四徳とは婦人のもつべき四つの徳目で、婦徳（貞節）・婦言（言葉）・婦功（家事）・婦容（身なり）をさす。（『礼記』昏義）

¹⁹⁶ ジュリア・クリステヴァ『中国の女たち』（丸山静+原田邦夫+山根重男訳、せりか書房、1981）p.127

¹⁹⁷ 堀敏一「古代中国の家父長制」（比較家族史学会監修、永原慶二、住谷一彦、鎌田浩編『家と家父長制—その成立と特徴—』早稲田大学出版部、2003）によれば、漢代には父母・妻子・兄弟から成る三族制家族という形態は実は少数だったとする論があるものの、当時儒学を尊重する

だ、林海音が北京で少女期、青年期を過ごした 1920 年～40 年代は、中国の近代化に伴い、啓蒙的知識人たちによって儒教的な慣習が批判され、女性の地位が大きく変化した時代であった。このため、大家族の上下関係にも、微妙なバランスの変化があらわれた。

「婚姻的故事」の舞台である夏家は、退職官僚の公公（舅）を筆頭に婆婆（姑）と姨娘（第二夫人）、9 人の息子と娘、孫世代、使用人も合わせて 40 人以上の大家族であった。実在の舅で夏家当主の夏仁虎は字を蔚如、号を枝巢子といい、科挙時代の挙人であり、国会議員、財政部次長と国務院秘書長を歴任した官僚で、詩文や詞曲（曲譜に合わせた韻文形式の詩と元曲）に精通していた。林海音の次女で作家の夏祖麗は、実在の夏家について次のように記録している。

夏家の原籍は南京で、仁虎氏は 1899 年 24 歳で科挙試験を受けに北京へ来て、挙人となったのち北京に留まった。夏家には 9 人の子どもがおり、長男が南京で生まれたのを除いてみな北京生まれであった。彼らは北京に居を構え落ち着いたのである。北伐成功後、仁虎氏は官界から引退し、南城宣武門街一号に居を構えており、三世代（老祖母も南京から引っ越してきていた）が同居する幾部屋もある大所帯で、使用人や車夫、コックを合わせて三、四十人の標準的な中国式の大家族であった。¹⁹⁸

「婚姻的故事」では、物語はまず主人公英子が北京の大家族に嫁ぐ直前の場面からスタートする。時代はもう「古い時代ではなかった」が、母は英子のために布団や季節ごとの衣類、長持ち、首飾りから洗面器などこまごました生活用品まで嫁入り道具一式を揃えてくれた。¹⁹⁹

“嫁入り道具送り”のその日、家はとても賑やかだった。母は 4 人の全福太太²⁰⁰（縁起のよい奥さん）にお願いして私の布団を縫ってもらった。母は未亡人だったので完璧な全福太太にはなれないからだが、しかし正真正銘の全福太太たちはみな洋学堂²⁰¹の出身で、裁縫はできるが喜歌（お祝いの時にとなえるめでたい文句）は知ら

風潮にともない、知識人の一部に父子同居を称賛する傾向があった。儒学が重視する父母の権威と父母への孝養を重んずれば、父母の生前に別居を行うことなく、三族制家族こそ最も理想的な形態となる。唐代になると祖父母・父母の在世中は子孫が戸籍を別にしたり家財を分割することが禁じられ、三族制もしくは累計家族の維持が法によって義務付けられた。このように中国古代には三族制維持の思想・法制によって家中における父母の権威が確立される方向が導かれていた。

¹⁹⁸ 夏祖麗『従城南走来：林海音傳』（天下遠見出版社、2000）p.76

¹⁹⁹ 林海音「婚姻的故事」『婚姻的故事』北方婦女兒童出版社、1986）p.6

²⁰⁰ 両親、舅姑、夫が健在で息子と娘がいる奥さんのことで、旧式の婚礼ではその子宝と長寿にあやかるよう全福太太に新婚夫婦のふとんを縫ってもらう習慣があった。

²⁰¹ 清末に建てられた外国式の学校。

なかった。それで母と王媽がそばで一句一句教えた。縫いものが進められ、みんなの笑い声がして、喜びのムードが溢れていた。²⁰²

母や媒酌人の伯父らは英子に「そんな大家族に嫁ぐことになるとは」と案じ、嫁ぎ先での振る舞いには気をつけるよう言うのだが、当の英子はそんなことはあまり気にしていない。自分でデザインした純白のウェディングドレスを親友に見せながら「貸し衣装よりも安く仕上がった」と自慢し、協和医院の講堂に赤い絨毯をしいて行う流行スタイルの結婚式²⁰³を前に気分も高揚している。母はそんな英子を特別論したりもしない。

母は他の母親のように、大家庭で生活した経験をもとに、結婚前の娘にその心得を教授することはしなかった。たぶん私が母とは全然違う性格だと知っていたからかもしれない。私は強情で、せっかちで、努力家で、我慢強いし協調性もある女の子だったが、反面なんにも気にしない性格だった。だから母はたぶん、こんな気の強い娘に何を言ったところで、聞くはずがないし、それならいっそ何も言わないことにしよう、と思ったのだろう。それに本当のところ、母のあの“忍耐を尊ぶ”という古い経験は、どう考えても私には合わない。²⁰⁴

近代的でしっかりものの長女と、伝統的でおっとりした母の様子が窺える。一方、母と自分の結婚について作者の目線以下のように感想が添えられる。

母の結婚生活はなんと面白く新鮮だったことだろう、あの古めかしい時代に、母のような平凡な女の人が夫とともに外国へ出る機会があったなんて。そして私は？22年あと、その母の娘が反対に40数人もの旧式の大家族に嫁いでいくことになるなんて、誰が予測できたろう！²⁰⁵

封建的大家族に従うすべを心得ている伝統的女性の母であったが「白馬の王子様のような」父と手に手を取って新天地に“小家庭”を築いたために、いわゆる“大家族”のヒエラ

²⁰² 「婚姻的故事」『婚姻的故事』（北方婦女児童出版社、1986）p.8

²⁰³ 民国前後から1920年代にかけて女性の服装はさまざまに変化をみせていた。このころ民国当初の女学生スタイルが落ち着き、都市化とともに一時保守的な若奥様やおしゃれな職業婦人という消費能力をもつブルジョア女性が登場した。洋風の結婚式やウェディングドレスを着る習慣もそのひとつで、1927年に蒋介石と宋美齡が上海で挙げた豪華な結婚式が火付け役となり、比較的裕福な職業婦人たちの間で流行した。

²⁰⁴ 「婚姻的故事」『婚姻的故事』（北方婦女児童出版社、1986）p.8

²⁰⁵ 同上

ルキーからは比較的自由だった。反対に“小家庭”に育ち、教育も経済力もある自分が“大家族”に嫁ぐことになることに「私」は興味を感じているのである。

英子と豫生（「婚姻的故事」での英子の夫）は、協和医院²⁰⁶の講堂でモダンな挙式をあげる。新郎新婦はタキシードにウェディングドレス姿、一方親世代とくに両方の母親は裕の上着に刺繍のスカートという旧式の礼服で参列する。夜には自宅でも宴席が設けられ、“慣習”どおり婆婆からの献杯を受けるのだが、これが年長者からの最初で最後の献杯であり、これ以降、英子は六嫂（6番目の嫁）としてこの大家族の一員に加わるのだった。伝統的の四合院で家族は世帯ごとに分かれて住んでおり、英子夫婦は公公の二階の三間に居を構えて新生活を始める。

（二）夏家の人々

「婚姻的故事」には英子の家族や同僚、友人たちの結婚が描かれるのであるが、結婚生活の場でもっとも身近な存在だった夏家の人々についてここで紹介しておく。まずは一家の主である公公（舅）。堂々たる知識人で権威があり、家族全員が尊敬し頼りにする存在である。若いころの公公は風流な好男子であり、“夏布大馬掛儿（薄い麻の大馬掛儿。大馬掛儿は襟元から足元までひと続きになった伝統的中国服）”と呼ばれていた。つまり清潔に洗濯されてぴっしりとアイロンがかけられ、そしてそれは貞淑な賢妻の手によって仕上げられていることを意味するあだ名であり、堂々としてあかぬけたイメージを表していた。英子が嫁いだ時にはすでに隠居生活をしているのだが、しっかり者の6番目の嫁をかわいがり、師範大学の図書館勤めの口を紹介してくれたりする穏やかで優しい舅である。官僚時代に友人にそそのかされ妾にとった嬢嬢がおり、60代になった今、成人した息子たちの前では「一生に一度の過ちだった」と言って同情心をひこうとしている。

婆婆（姑）は堅実で貞淑な典型的な伝統的女性で、60代後半である。彼女が夏家に嫁いできたときには、5人いた嫁のうち他の4人はみな教育があったのに比べ、婆婆は文字を読めなかったが、続けて8人もの息子を産むという記録的偉業を果たした。女性の美しさは色白できめ細かく、福々しいことであると考え、色黒で痩せていて噂好きの二嫂には不満をもっている。また夫が妾をもっていることに対してたびたび辛辣に揶揄する。

嬢嬢（彼女はみなに“おば”をあらわすこの呼び名で呼ばれていた）は、満族の没落貴族の娘。伝統劇の男役俳優になっていた10代のとき公公に囲われ、物語中すでに40歳

²⁰⁶ 北京の協和医院は1921年に米国ロックフェラー財団により設立された名門病院。戦前は外国人や高級幹部を対象に西洋医学による診療をおこなっていた。

を迎えているが子どもはなく、鬱憤が溜まると近くにある実家にたびたび帰るなど自由気ままに暮らしている。

大嫂（長男の嫁）は後妻で、子どもは病死していない。従順な長男の嫁として姑の気持ちに常に配慮し、婆婆が嫌う昔の古傷にさわらないよう気を遣っている。

二哥（次男）は妻子を連れて上海に駐在していたが、太平洋戦争が勃発し職場の関係で内地へ移動し、単身赴任している。

二嫂（次男の嫁）は英子が結婚してしばらくして、上海から5人の子どものと一緒に戻ってくる。嗜好好きで姑からのおぼえはめでたくないが、三嫂が実家に帰った本当の理由など夏家の過去をいろいろ聞かせてくれるため、英子にとっては重要な情報源である。年は英子の母（30代後半）よりも上で子どもは英子と同年代であり40代～50代とおもわれる。

三哥（三男）はすでに故人。北京大学を卒業し留学経験もあるが、親が決めた結婚がもとで亡くなったらしく、その失敗から公公と婆婆は四男以降の結婚に口出ししなくなったという。結婚後まもなく肺病で死去する。

三嫂（三男の嫁）は英子が嫁いできたときにはすでに子どもを連れて実家に戻っていた後である。その後自分の従弟と再婚している。

四哥（四男）は新しもの好きで型破りな革新者である。両親に進言して家庭教師を家に呼ぶのをやめさせ、弟たちに学校で新式の教育を受けさせたのも彼だし、西洋風のスタイルを好み流行の白い革靴を最初に履いたのも彼である。フランス留学中に弟の具合が悪くなったため一緒に北京へ戻ってくるが、南京の交通部に勤務していたこともある。その後また家を出て地方へ行き、戦時中に独身のまま病死する。

五哥（五男）は芸術を専門に学び、フランス留学中に誰か思い人ができたらしいが誰もその詳細を知らなかった。わずかな友人としか付き合わない変わり者で、中山公園の春明館でデッサン画展を開いたりしている。

豫生（六男）は英子の夫。よき夫だが嬢娘のことを「第二夫人」と呼び避けている。英子はそうした夫の態度に疑問を感じる。

七弟（七男）は英子たちのすぐあとに結婚。のち肺病になる。

七嫂（七男の嫁）は英子のあとに家に嫁いでくる。六番目、七番目の嫁は一家のなかでも新しい嫁として見られ「わたしたち二人の若い嫁はまた、この古めかしい大家庭に新しい息吹を注ぎこんだ」と描写されている。

九妹（末の妹）で、英子が嫁いでまもなく他家へ嫁ぐ。英子たちの結婚後七男、末の妹の慶事が続き、夏家はおめでたい雰囲気にも包まれている。

そして六嫂・英子は新式の結婚式を挙げて一家に嫁ぐが、公公や婆婆を敬い兄嫁たちとも上手に付き合う利発でしっかり者の嫁である。旧時代の婚姻で犠牲になった上の世

代の女性たちに同情しそうした慣習に疑問を感じる現代性と、男の子が生まれたあとしきたり通り婆婆に祝福のあいさつを述べる柔軟性を併せ持っている。

(三) 三哥と三嫂

英子が嫁いできたとき、三哥はもう亡くなったあとだった。三嫂は2人の子どもを連れて家を出ていったというが、部屋の整理中に三嫂の写真や持ち物が出てきたときの婆婆と大嫂の態度から、英子は婆婆があまりにもこの話題を避けていることにいぶかしさを感じる。使用人たちの話では、三哥は結婚前に肺病にかかっており嫁をとることに消極的だったらしいが、両親の意向で決められた結婚をしたという。北京大学をでた秀才なのに、そんな結婚を取りやめるすべもなかったのだろうか？それに三嫂はなぜ子どもを連れて出て行けたのだろうか？英子たちの時代にはすでに母親が生んだ子どもを育てる権利が制度化されていたが、旧時代の習慣によれば、子どもは母親ではなく“家”に属するもので、家を出る場合には残していかなければならないはずであった。この疑問は、のちに二嫂との会話で解けることになる。

「あの子たちは本当にあの、うちわの大耳にそっくりだったよ。」二嫂は両手を耳の傍にあてて、そう言った。

「誰に似ているですって？うちわ耳って？」私にはわからなかった。

「本当にあのおじさんに似ているんだよ！」²⁰⁷

三嫂はもともと父方の叔母の嫁ぎ先で育った。その家には兄弟がいて、実は三嫂はその従弟と恋愛関係だったというのだ。その従弟は以前もよく三嫂のもとへ訪ねてきており、耳が大きかったので陰で家族みな「うちわの大耳」とあだ名で呼んでいた。連れて出て行ったのは、三嫂とその従弟との間にできた子どもたちだったのである。

私には義父母の心痛と後悔とを想像することができた。これはまったく意味のない結婚であり、大学まで卒業させた息子を犠牲にしてしまい、どうやっても取り戻せない心の傷をもたらしたのである！道理でお二人は、下の6人の息子や娘の結婚について二度ととりしきろうとする勇気がなくなったはずだ。²⁰⁸

三嫂は実家で従弟と恋愛関係になったため、その家の主（叔母の夫）はそれを案じて急いで彼女を家から追い出してしまうおうとしたのである。それで事態が解決できると思

²⁰⁷ 「婚姻的故事」『婚姻的故事』（北方婦女児童出版社、1986）p.16

²⁰⁸ 同上

ったのだ。まさかその嫁ぎ先が、病気で結婚する気もあまりない三哥のような男性だったとは誰が知っていたらろうか。

(四) 結婚と同時に寡婦となった花嫁

物語の中には、三嫂と同じく夫を結婚後すぐに亡くしたが、そののち寡婦として嫁ぎ先に留まった経験をもつ女性も描かれる。図書館に勤める英子の同僚・怡さんのエピソードである。「婚姻的故事」に登場する怡さんは病気がちな一人暮らしの女性であり、売れない画家だったので生活のために図書館で働いている。英子たち仕事仲間のなかではちょっと年上だが若い部類に入るのに、化粧もパーマもせず、ハイヒールもはかず質素に暮らしている。ある日ちょっとした流れで同僚たちは彼女の家を訪問するのだが、彼女を囲んで談笑しながら、英子は彼女がたった一人で暮らす彼女の暮らしを想像して心を痛める。

私にはそんな孤独な生活なんて想像もできない。だってそんな経験がないもの。父が亡くなってからは母と支えあって生きる日々だったけれど、私にはまだ4、5人兄弟がいた。結婚したあとは大家族だからもっとそうで、豫生の帰宅が遅くなったときなどは、一人でしばらく2階の部屋にいとつい階下に降りて行って婆婆や嫂たちと話したくなる。²⁰⁹

そうしているうち、怡小姐は自分が以前結婚したときことを話し始めるのだが、相手は肺病で結婚後1カ月で亡くなったというのだ。

「じゃあなぜ彼と結婚したの？」誰かが解せないというように聞いた。

「病気だったからこそ、すぐに結婚しなければならなかったのよ」

「ああ——」何人かは意味がわかった。わからない人たちがさらに尋ねた。

「どうしてなんですか？」

「“冲喜”（喜び事で厄払いする）のためよ！」²¹⁰

“冲喜”とは古い習慣で、家に重病人や災難があったとき、新しく嫁を迎えたり新しい物を買ったりして厄払いをするというもので、民国になって十数年もたつというのにこうした習慣により結婚したというのである。しかも彼女はそれに反発することなく、後悔はしていないと話す。英子は理解に苦しむ。その後「子どもを作ればよかったのに」

²⁰⁹ 「婚姻的故事」『婚姻的故事』（北方婦女児童出版社、1986）p.19-20

²¹⁰ 同上 p.29

という誰かのことばに、怡さんは謎めいた微笑みをうかべるのだが、別の日に英子と話すなかで、彼女は夫と一度もベッドを共にしたことはなく、子どもができるはずがないことを漏らすのである。

怡さんは夫の死後寡婦として暮らしたのち、舅姑が亡くなったので一人暮らしをしている。怡さんにも義弟はいるのだが彼は結婚し、その妻子とともに元の家で暮らしている。そして何か家で冠婚葬祭などがあると義姉を頼り、下にもおかない扱いをしているが、それが嫁には面白くないという。また彼女も義弟にはあの嫁は合わないなどと英子に漏らす、そのくせ甥っ子を可愛がり、なにかと世話を焼いたりする。これに対し英子は、なぜそんなに関係がいいのに一緒に暮さないのかとたずねるが、怡さんのことばで納得させられる。

「私は旧時代のなかに放り込まれて逃げられない人間なの、私に新しいことを教えても新しくなれないけど、それで弟嫁が納得するわけがあるかしら？義父さん義母さんが生きていた時代とは比べものにならないわ。義母さんがいなくなったら誰が主婦になるの？義弟は私に礼を尽くしてくれるけれど、あなたたちの新しいきまりでは『ひとつ屋根の下に二人の主婦は存在しない』というんでしょ？私の夫は亡くなったんだから、身を引くしかないのよ。家を出てきてよかったのよ、みんなの関係もよくなるし。」²¹¹

怡さんのいう「あなたたちの新しいきまり」とは、いわゆる近代家族のなかの一夫一妻のことをさしているのである。怡さんは伝統的な慣習に捕われた女性であり、新しい家族のあり方についていくことができない。

(五) 婆婆と嬢

女性同士の確執は夏家にも当然あった。婆婆は9人の子どもを授かり今では堂々たる一家の大奥様であるが、自分の夫に妾がいる不愉快さを比較的あからさまに態度に出している。文字は読めないがことわざをよく知っていてブラックユーモアがあり、ときに皮肉たっぷりに夫と妾にあてつける様子に、嫁の英子はつい笑ってしまう。ある日のこと、公公は友人の葬儀に出て夜遅く帰宅したが食事を済ませておらず、嬢も不在だった。公公は母屋にやってきて婆婆に何か食べ物がないか聞くのだが、冷たくあしらわれる。

どこかの部屋で来客があったり、息子が帰るのが遅くなったときには、みな大奥様のところにやってくるのだ。公公もそうだった。あの日婆婆はハムのスープを作っ

²¹¹ 同上 p.24

ていたことを私はよく覚えているのだが、しかし婆婆は言った。

「私のところには何もありませんよ。」

公はがっかりしたが、婆婆はさらに追い打ちをかけ、つめたく笑って言った。

「これぞ和尚が3人だと水も飲めない²¹²ですわね」

婆婆はそう言うと、わたしたちに向かって目くばせした。これは当然ながら、公公は2人の妻を娶ってしまったばかりに、一度の晩御飯にもありつけなかった、と言う意味だった。²¹³

こうしたあからさまな婆婆に対し、公公は怒るわけでもなく遠慮がちな態度であるが、一方、嬢娘には悲愴感はなくわりに自由きままに振舞っている。近くに住む老母がまだ元気なので、ふらりと実家に出掛けて10日や半月帰ってこないこともよくある。彼女は満州旗人の出なので食習慣も南方の夏家とは違い、実家に帰れば母親が得意のゴマだれ麺を作ってくれる。北方の麺が大好きな英子は「遊びにいらっしやい」と誘われて思わず心が動くのだ。こうして出かける時、嬢娘はいそいそと母屋にやってきて婆婆に言う。

“お爺さんはお任せするわね！行ってきますわ！”

こう言うと彼女はさっさといなくなり、婆婆はその後ろ姿を見ながら、わたしたちに向かっておどけた様子で冷笑するのだが、それは“ほら見てごらん！見ただろう？”という意味なのだ。²¹⁴

こうして押しつけられた老夫は、気の毒にも食事にもありつけなかつたり冷たいしうちをされたりするのだが、嬢娘はおかまいなしで、うまくストレスを発散している様子である。

英子の目には、公公の嬢娘への愛情がその行動の端々から見て取れる。嬢娘の40歳の誕生日に、公公は彼女への言葉をみごとな達筆でしたため、美しい掛け軸にして贈った。それは嬢娘が年若いころから公公とともに過ごし、書物や画、書道などを公公についてどんなに賢く学んだか、いかに大事な伴侶であるかを綴った愛の言葉であるが、文中で嬢娘を形容するとき彼女の名前から一字をとってその下に“姫”をつけた“曼姫”という名で呼ばれていることに英子は気づく。幸い、婆婆は字が読めなかったから夫が別の女性に贈った愛の言葉を知らずに済んだのだが...

²¹² 一个和尚跳水吃，两个和尚抬水吃，三个和尚没水吃（和尚が一人なら水を担いできて飲む、二人なら水をかたげて来て飲む、三人では責任をなすりあうから水も飲めない）ということわざ。

²¹³ 「婚姻的故事」『婚姻的故事』（北方婦女児童出版社、1986）p.24-25

²¹⁴ 同上 p.34

公公の著作のなかには曼姫という人物が何度も出てきていたのを私は思い出した。公公は毎年一度南京の実家へ帰るときにはいつも嬢娘を連れて行っていたのだから、山河を遊覧した詩や文章には“曼姫とともに遊ぶ”が至るところに出てくるのは当然だわ。²¹⁵

そして公公にとっての婆婆はというと、詩の中にときおり“健婦”と形容されている。年下で可愛い存在の“曼姫”とは対照的な呼び名である。

嬢娘はこの贈り物をたいそう喜び、掛け軸を自分の部屋の客間に飾ってながめた。ここで興味深いのは、家の住人たちの対応が立場によって異なっていることであるが、旧態依然とした家族感がなんとなくゆらいでいる感じがある。嫁たちは贈り物を携えて嬢娘の部屋を訪れ、素晴らしい掛け軸をほめちぎりめでたい気分を盛り上げているのに対し、婆婆もゆったりと上品にお祝いの言葉を述べたが、それは「当然嬢娘が贈り物のお礼を言い母屋まで来た時についでに言ったもの」だった。また息子たちは嫁たちより一ランク上のようで、一同揃って夕食をとるときにお祝いを述べたが、“嬢娘”という親しみを込めた呼び方ではっきり呼びかけず、ただ「おめでとうございます！おめでとうございます！」と口ぐちに叫んだ。これは婆婆への配慮によるものだろう。こうした描写から、大家族の女性のヒエラルキーにおける緩みが看取できる。旧式の家族のなかでは当たり前だった妾という存在が、人々の間でなにか「きみょうな、気まずい感じ」を呼び起こすものとなり、表面上は普通に暮らしながら、それぞれ人間関係のバランスをとろうとしている様子がみられる。

このように微妙な環境のなかで、旧いしきたりに慣れない新妻たちはとんでもないミスもやらかし、無理なバランスを保っている大家庭の現状がたまさか露呈する。それは中秋節の夜のことで、家ではお月見の行事をしたあと婆婆と息子、嫁たちが母屋に集まり、お供えが終わった月餅や北京の秋のさまざまな果物を分けようとしていた。大きな月餅を部屋（世帯）ごとに分けるのを七嫂がかってでた。七嫂はこの家のなかでも新しい思想の持ち主でよくできた嫁だったが、少々でしゃばりたがるくせがあり、それがときどきお粗末な事態を招くのだ。このときもこの嫁はこんな粗相をする。

“これはお父様のぶん、これはお母様のぶん。お母様、”彼女は婆婆に言った。“五哥と八弟は、お母様のぶんと一緒にかまいませんわよね！”五哥と八弟はまだ独身だからである。婆婆はわからないふりをして言った。“なんだって？”²¹⁶

²¹⁵ 「婚姻的故事」『婚姻的故事』（北方婦女児童出版社、1986）p.35

²¹⁶ 「婚姻的故事」『婚姻的故事』（北方婦女児童出版社、1986）p.37

弟の嫁は同じことを繰り返し言うがわけがわからず、また英子自身もその場では気づかず、独身の兄弟の分を一緒にしたからいけなかったのか、と思う。婆婆は不満げに“フン！”と嘲笑うだけで説明してくれない。二嫂も婆婆の気持ちがわかったらしくニヤニヤしているが、最後にはやはり大嫂がおっとりと言うのだ。

“あなたたちはわかっていないのね！これは団らんを表す月餅なんだから、お父様とお母様に一切れ差し上げて、嬢娘には単独で一切れ、これでいいのよ！”

“あらまあ！”わたしたちはやっとわけがわかり、全員で思わず大笑いしてしまった。“フン！”婆婆はまた一声もらしたが、これはつまり“そう、その通りよ”という意味だった。²¹⁷

結局、使用人の張媽が公公を呼びに行き、婆婆の一切れを少しだけ切ってお味見をさせ、これで「一緒に召しあがった」ことにしたのだが、英子は「これが団欒を象徴しているのかしら？でもなんて阿Qなことかしら！」²¹⁸とひそかに古いしきたりの無意味さを嘆くのである。

しかし時代は変わっても、家族の一員として暮らしてきた妾たちはそのまま年をとり家に残っている。物語のなかでも、旦那様の友人の妾たちがしょっちゅう夏家に入出入りする。たとえば趙家の姨太太は礼儀正しく、毎回家に来るとまず大奥様のところでひとしきりご挨拶をし、それから嬢娘の部屋を訪ねる。彼女はもと江南の名妓であり、趙家の奥様が死去して久しいので今では彼女が奥様の座におさまった。またもう一人のある妾の女性も自分の夫とたびたび夏家に入出入りしており、婆婆も“稀有な美人”と呼ぶほどの器量のよさであった。ただ、こうした妾たちに対し、婆婆は表面上は礼儀正しくふるまうが、陰では彼女たちを「これ（小指をたてて）」と形容し、「みんな同じ穴のムジナさ」と言い放つ。

ある退屈な午後、英子は階下に降りてきて姑が愛飲する水タバコ用の紙こよりをつくるのを手伝いはじめる。

「ねえ！ちょっと、昨日コノヒトは行ったのかい？」

「えっ？」私は顔をあげ婆婆を見た。婆婆が何を言っているのかわからなかったからだが、彼女が小指をつきたてているのを見て、思わず笑ってしまった。「嬢娘ですか？行きましたよ、お父様と一緒に！」

²¹⁷ 同上

²¹⁸ 同上

「フン！」 婆婆はそれを聞くや、いつもどおりいまいましてに声を発した。²¹⁹

(六) 緩む大家族のヒエラルキー

嬢娘は 19 歳で公公の妾となり、物語中で 40 歳の誕生日を迎えている。時代を林海音の実体験と同じと考えれば、英子が夏家に嫁いだのは 1939 年であるから、嬢娘が輿入れしたのは 21 年前、1918 年ということになる。1910 年代といえば女性の地位はまだ低く、女性たちは纏足し、唇に小さく紅をひく古風な化粧をして伝統的な服装をしていた。しかし官僚層を中心に発展していた一夫一妻多妾制、妻妾同居の絶対的ヒエラルキーは、民国期になると徐々に緩んでいく。白水紀子によれば、中華民国時期（1912-49）は、中国でおよそ 3000 年の歴史を有する畜妾制の最後の時期にあたる。とくに 30 年代以降は農村経済の疲弊によって農村女性が大量に売りにだされ、そのために妾の価値が下落して、蓄妾をする階層が中流層へと拡大した。²²⁰この時期の畜妾制には妻と妾の身分が実際の日常生活において縮小する傾向にあり、正妻亡きあとは妾をその後釜に据えることが許されるようになり、生んだ男子の数によって両者のあいだに地位の逆転が生じることもあった。

『婚姻的故事』に描かれた婆婆・嬢娘と公公の関係、それをとりまく家族たちの姿はまさにこうした時代を映し出している。そして、その語り手となっている「私」すなわち英子（林海音）は、そのような“旧女性”のあり方に驚き、同情しながらも、彼女たちとは立場を異にする次世代の“近代主婦”であり“新女性”なのである。

三. 近代主婦としての視点

(一) 「燭」と「百金鯉魚的百襖裙」にみられる“旧女性”

“旧女性”に関する傍観的な描写は、次に挙げる二つの小説にもみてとれる。夫が妾を迎えることを拒めなかった女性たちのなかには、年老いてから夫をいたぶる婆婆のような妻もあれば、病にふせることで無言の反抗をした妻もいた。林海音はこれを「燭」²²¹という小説に描いている。ある女性が、妾に対し表面上は平静を装いながら、夫と妾にあてつけ同情をかうために病気のふりをしているうちに、本当に死に至ったという話である。嘘のような話であるが、これには実際にモデルがいたという。中学の同級生・傅の母親は、最初に家に遊びに行った時からもうベッドのなかに座っていた。

「傅おばさま！」私がベッドの前でおじぎし声をかけると、彼女は人が来たのをと

²¹⁹ 「婚姻的故事」『婚姻的故事』（北方婦女児童出版社、1986）p.24

²²⁰ 関西中国女性史研究会編『中国女性史入門—女たちの今と昔』（人文書院、2005）p.187

²²¹ 「燭」『燭』（文星書店、1965）にほか 8 編とともに所収。

ても喜び、半身を起した。その髪はもう全部抜け落ちて歯も一本もなく、白くまるい顔で歯のない口を開けてニコニコと笑った。その様子はなんだか不気味でもあり、かわいらしくもあった。²²²

傳は末っ子で、うえには4、5人の兄弟があるが、母親は傳が小さい頃から病気で、“蘭母さん”と呼ばれる女性が子どもたちを育ててきたという。父親もずっと以前に亡くなっている。この女性は父の妾であったのだが、やけにへりくだっていて、ほんの13、4歳だった小娘の自分を“林おじょうさん”と呼ぶ。病床の母はカーテンの奥にいつも横たわり、娘のクラスメートが来ると嬉しそうにちょっとしたお菓子をくれたりするのだが、英子は薄暗い部屋の、長年使い古したしみだらけの蚊帳やベッドや、それを照らす枕元の蝋燭がちらちらするのを見て気味が悪く感じる。老人はこんなところでなぜ日がな一日暮らせるのだろうか？しかも妾の蘭さんはたいして美人でもなく、なぜ傳の父親が妾にしたのか、またその旦那様の死後蘭さんがずっと半病人の老女の世話をしてきたというのが、英子には不可解でならない。娘の傳にとっても、母のこうした様子は見るに堪えないものだった。ある日、英子と傳が外出しようとする、母が自分の部屋で叫んでいるのが聞こえる。

「あたしは、あたしは失神しそうだよ！三毛子！」

三毛子というのは傳の幼名だった。私は驚いて言った。

「おばさまはどうなさったの、叫んでるわ！」

傳は眉をひそめ、煩わしそうに部屋のほうへ叫び返した。

「すぐ帰ってくるわよ！」

私は怖くなって言った、「私、行かない！」

「行きましょ！あの人はああやって、十何年も叫んでいるんだから！」傳は私に言うのだった。

「母は私たちを行かせたくなくて、失神するって言ってるのよ」²²³

結局、傳の母親は子どもが甘えるのと同じで病気を装っていただけで、何の病気かはつきりしなかった。中学生の二人は成長し、社会人となる。傳が仕事先の天津から北京に戻ってきたとき、英子も時おり彼女の家を訪ねたが、母親は以前と変わらず乱れた蚊帳とベッドのなかで娘たちを迎えた。そして蘭娘といえ、やはり相変わらず一日中ベッドにふせった老女の下世話をし、食事やお茶を運び、この家の息子の嫁たちにも気

²²² 「婚姻的故事」(『婚姻的故事』(北方婦女児童出版社、1986) p.28

²²³ 同上 P.30

を遣って暮らしているのだった。母親が亡くなったのは傳が天津で結婚し、英子も傳も2児の母となったのちであったが、そのとき英子は、彼女は実は病気ではなく、父が妾をとった腹いせに伏せているうち本当に病気になってしまったという、嘘のような話を傳から聞いたのである。

「婚姻的故事」「燭」はともに新しい世代の「私」が主人公であり、上の世代の女性たちが旧女性として描かれる。一方、短編小説「金鯉魚的百襖裙」は、清末の話であり、「私」を主人公にした先の作品と比べて、まだ厳然とのこる大家族のヒエラルキーが生んだ悲劇を描いている。

これは金鯉魚と呼ばれていたある大家族の妾の物語で、その家の奥様づきの女中だった彼女は、後継ぎを生むために旦那様の妾となった。奥様は伝統的女性にふさわしい道徳を身につけた賢母だったが、しかし唯一男の子を生むことができなかった。大奥様(姑)が旦那様(自分の夫)に妾をとらそうとするのに先手を打ち、自分がかわいがっている女中の金鯉魚を第二夫人にさせる。

6歳で許家に来て、16歳で旦那様の妾となったとき、金鯉魚の背は旦那様の書斎にある低い書棚の高さにも届かなかった！でも心配することはない、まだほんの16歳なのだからこれからもっと大きくなる！だが金鯉魚は年の初めに旦那様に召されて、年末にはもう身ごもっていた。金鯉魚は本当にお団子みたいにまるまるとした男の子を生んだのだ、許家は家中で大喜びし、みんなが許奥様にお祝いを述べた。奥様は喜びのあまり始終顔をほころばせていた。²²⁴

無事に男の子を生んだ金鯉魚だったが、ただ一人息子だけが彼女を“媽”と呼び(奥様のことは“娘”と呼んで区別していた)、ほかの家族や使用人たちからは相変わらず金鯉魚と呼ばれ続けた。だが彼女は息子の結婚が決まったときに一大決心をする。それは、鮮やかな紅色の絹に、縁起のよいカササギや梅のみごとな刺繍がほどこされた、無数のヒダが入った晴れ着用の礼服—本当の奥様だけが慶事の際に着るのを許される“百襖裙”を着ることだった。金鯉魚が身の程知らずにこんな礼服をつくらせたことは家中の者の噂になったが、金鯉魚は、後継ぎを生んだ自分にはその資格があると真剣に信じていた。しかし、結婚式まぢかのある日、奥様の「新しい時代になったのだから、婚礼の時は一律新式の旗袍をきること」という鶴の一声によって、この願いは無残にも断ち切られる。生みの母親の立場に耐えきれず逃げるように日本へ留学した息子は、金鯉魚が病死した

²²⁴ 林海音「金鯉魚的百襖裙」『婚姻的故事』(北方婦女兒童出版社、1986) p.108-109

あとで家に戻ってくる。そして生母の棺桶を後継者の自分がかかえて正門を通る²²⁵ことで、最後のつぐないとするのだった。男子を産んだことは“功績”ではあったが、祝賀を受けるのは“奥様”であり、彼女は女中としての立場からついに抜け出すことはできなかった。従順で無口な金鯉魚はただ一つ女主人の礼服を着ることで、自分に対する他人からの尊敬、評価を得たいと願ったのである。しかし一方で、後継ぎを生むことで自らの評価を高めるという女性の考え方が当然だった時代が窺える。このような女性の境遇は、漂泊の小家庭で育った新女性の林海音にとっては不可思議な現象であり、それゆえに旧女性への強い関心が呼び起こされたものと思われる。

(二) 新旧交代の時代への視点

ここで、作品から少々離れて民国時期ころの中国女性の状況について紹介しておきたい。林海音の北京時代とも重なりがある 1910 年～40 年代は、女性をとりまく状況が大きく変化し、西洋思想に影響を受けた新しい家族観、女性・母親像が求められた時代であった。すでに清朝末期、国家存亡の危機を感じた知識人たちによって女性教育は見直され、不纏足運動²²⁶や官費による女子留学などが始まっていた。辛亥革命により清朝が倒れると 1912 年に民国政府が成立し、初の憲法的性質をもつ中華民国臨時約法が公布されるが、まだ女子の参政権は盛り込まれておらず、帝制が共和制に変わっても依然男性に劣る従属的存在であった。1910 年代末には女子の普通教育がスタート²²⁷し、初の女子中学校が設立されるに至ったが、そこでの教育は主に家事科を中心に学び、国家の根本となる良好な家庭を維持する良妻賢母を育てることにあった。

一方、知識人の間では 1919 年に起こった五四運動²²⁸、民族覚醒を唱える新文化運動²²⁹の潮流のなかで、デモクラシーとサイエンスが提唱され、封建社会の制度や習俗を批判する動きが活発化した。文学界では新思想の象徴的な雑誌『新青年』²³⁰が発刊され、儒教思想を鋭く批判する潮流が起こった。そして旧来の封建制度打倒のため、これまでの家族制度は悪の温床として徹底的に批判され、女性解放と家族改革が注目されることになる。こうしたなか、家族の解体には婦人の育児による負担を減少させるべきとした「児

²²⁵ 物語中では、妾の棺桶は正門から出すことは許されず、脇門から出棺することが家のきまりだという設定となっている。

²²⁶ 1883 年には康有為が広東に不纏足会を創立、それを受け継いで譚嗣同、梁啓超らが 1907 年、本部を上海におく不纏足会を設立し全国的に不纏足運動を広めた。

²²⁷ 清末までには女子の学校は師範学校しかなかった。(『中国女性の一〇〇年』 p.51)

²²⁸ 1919 年 5 月 4 日、山東半島の日本への譲渡をうたったヴェルサイユ条約に反対し、北京の学生が抗議集会とデモに端を発した反日、反帝国主義運動。

²²⁹ 五四新文化運動ともいわれる。1910 年代に起こった啓蒙運動。雑誌《新青年》を創刊した陳独秀をはじめ魯迅、胡適、李大釗、吳虞、周作人らが同雑誌に文章を寄稿し運動の中心となった。

²³⁰ 1915 年-1921 年。新文化運動の重要な役割を担った。

童公育」論²³¹なども提唱された。伝統的家族制度を打破するために婦人は従来の束縛から解放されるべきだとして育児の公共化を主張したのであるが、本論は大きな反響を呼び批判と論争が展開された。反対意見論者は「児童は家庭生活の中心」であり、「児童を養育することは夫婦にとって重要」「家庭は社会の存続を維持する重要な機関」であるとして真っ向から児童公育に反対した。論争²³²は 1919 年に発表されてから、他雑誌への転載も合わせて 20 数回にわたり、3 年もの間続いたが、結局この理論は資金面などから実現せずこの段階では立ち消えることになる。

20 年代に登場した女学生もまた時代を象徴する存在であった。ラップ型の袖にスカートという清楚な女学生ルックに身を包んだ彼女たちは、みずから反日抗議デモに身を投じ、男子と肩を並べて学生運動に参加するようになった。それは封建社会への反抗の証でもあり、耳の下で切りそろえる女学生の断髪や 1924～25 年に起きた「女子師大事件」などにも受け継がれ、婚姻の自由や男女平等、参政権獲得などを求めて女性運動を展開していく。こうした女学生は新たな女性イメージとなったものの、学校を卒業したあとは依然主婦として家庭を守り、近代的良妻賢母となることが求められた。

このころ、共和国の担い手として対峙関係を形成しつつあった国民党、共産党はそれぞれ女性に関する法制を整備した。共産党は毛沢東を中心に 1922 年 7 月「第二回全国代表大会における女性運動に関する決議」および「女性運動決議案」を採択し、女性運動を支持する一方で党の指導する革命のなかにそれを組み込もうとしていた。また国民党は 1926 年 1 月「女性運動決議案」を第二回全国代表大会で採択、男女平等の原則を実現させることを提唱し、女性の革命への参加を促した。女性運動は革命の実現に伴うものとして推進され、国共が分裂したのちも家族改革と女性解放のコントロールは重要課題であった。一方、国や知識人たちが求める女性像、母のありかたについても諸説が起り、優生学²³³や産児制限²³⁴も提唱された。多産による育児・家事労働の負担から女性を解放し、母性の健康を保ち心身ともに優良な子どもを産み育てることが民族の種の強化、ひいては国力増強につながるという主張であった。

満州事変を発端に日本の侵略がはじまる 1930 代には、蒋介石による「新生活運動」が推進された。共産党との内戦を続けるなか、みずからの権威を高めるために国家建設と民族復興を掲げたが、その内容は伝統的儒教道徳を重んじるものだったため、女性は家を守るべきとする「婦女回家」理論などが盛んに提唱され、女性解放運動は停滞した。1937 年 7 月 7 日、盧溝橋事件が勃発すると、抗日民族統一戦線が成立し、国共合作のも

²³¹ 「児童公育」沈兼士 『新青年』第六卷第六号（『中国女性の一〇〇年』p.58）

²³² 「児童公育」関係参考資料抄録（1919～1921 年）（『中国女性の一〇〇年』p.58）

²³³ 心身の健康な子供を優生とする考え方。

²³⁴ 1921 年に米国の著名な産児制限運動家マーガレットサンガーが訪中したことによりこの理論が普及した。

とに抗日のための女性動員がおこなわれていく。

こうして、外出もせず一生を深窓で過ごしていた女性たちが、革命と抗日の時流に乗って外へ出始め、その存在が社会から注目されるようになった。新しい社会が生まれつつあった民国時期、女性と家族の有り様は変化していったが、「時代のこちら側（新しい時代）」と「あちら側（古い時代）」が交差するなかで、ついに「時代のこちら側へ来られなかった」女性たちもいたのである。

以上のような時代背景とともに「婚姻的故事」「燭」「金鯉魚的百襖裙」などの作品をみると、そこには、儒教的家父長制度による旧慣習から抜け出せない女性たちが常に描かれており、そうした慣習による女性たちの悲劇への疑問と批判、同情が示される。林海音の作品中には、林の分身ともいえる近代主婦—“新女性”と、古い家庭制度のなかで翻弄される“旧女性”という、対照的な2つのモデルが存在している。たとえば「婚姻的故事」の三嫂と三哥の結婚について、英子は「もしその主人がいとこ同士の結婚に反対せず、養女を嫁として迎えてやっていたら、事態はまったく変わっていただろう」²³⁵と思ひ、かれらの悲劇について考える。

新しい潮流が訪れて、若者たちはそれを受け入れようとしていた。しかしいくつかの古いことがらは依然として棄てられず、それによってこうした悲劇を生み出していた。もし三哥が新しい考え方を完全に受け入れられたなら、何も考えず離婚できたはずである。三哥の命は打撃を受けずに守れたかもしれない。そして三嫂にとっても、客観的にいうなら、やはり間違いなく消すことのできない傷痕となったのだ。

²³⁶

そして英子は「あの新旧交代の時代において、こうした婚姻の悲劇がどれほどあったのだろうか。三哥のことはその一例にすぎないのだ」²³⁷と語る。また婆婆と姨娘について、英子はイギリスの思想家ラッセル²³⁸の言葉を引いて次のように述べる。

バートランド・ラッセルの名著《婚姻と道徳》²³⁹という本を読んだとき、近代の婚

²³⁵ 「婚姻的故事」『婚姻的故事』（北方婦女児童出版社、1986）p.17

²³⁶ 同上

²³⁷ 同上

²³⁸ バートランド・ラッセル（1872-1970）、英国の思想家、平和主義者。

²³⁹ ラッセル『結婚論』（岩波書店、1996）。原著『*Marriage and Morals*』（Allen & Unwin, 1929）。結婚と性道徳の諸問題を論じたベストセラー。

姻に対する分析の鋭さに嬉しくなったものだ。彼はこの本のなかで女性解放以降の婚姻の困難についてこう指摘している。“女性解放は多くの部分で婚姻にさらなる難しさを与えた。従来の妻というものは夫に対し自分を抑えていたが、夫は妻に対し寛大である必要はなかった。女性は自分自身の個性と権利を得て、いま多くの妻たちはこのために、あるレベルを超えたら、もう自分を夫に合わせようとはしなくなった。しかし男性はといえば、従来の男性中心の伝統的方法を依然として求めており、なぜ自分たちがすべて女性に合わせなければならないのか理解できない。”その通りだ、姨太太²⁴⁰のことにしても、わたしたち世代の女性には上の世代の女性のことを想像するべくもない、どうして夫のあんな行為を我慢して受け入れられるのか。ある人はきっと夫への愛がなくなったから、自分のほかにも女性を受け入れられることを我慢できたのだというが、ちょっと違うと思う。彼女たちが忍従したのは寛容と当時の社会の伝統で、本当に夫への愛情がなくなったからではない。²⁴¹

そして「私」は、婆婆は当時環境によって嬢娘を受け入れたが、心中ではそれほど寛大ではなく「どんな時代の女性にとっても、愛情とは独占だ」²⁴²と述べ、女性たちの心の奥に閉じ込められた嫉妬の炎がいかに苦しく辛かったかに思いを馳せる。

一方で、「私」は妻と妾という異なる立場の女性たちにまんべんなく温かいまなごしを向けるのである。英子は正妻の苦しみを思いながらも、妾の女性たちの境遇に心を寄せる。傅の家の蘭娘が正妻の息子に引き取られると、嫁とうまくやれるかどうかを心配し、夏家の嬢娘に対しても嫌悪の感情は持たず、あからさまに嬢娘を避けようとする自分の夫に憤慨すらしている。

正妻と妾の関係については、傅の母親と蘭さんの生き方についても疑問がなげかけられる。

一人の男性のために、二人の女性がこんな一生を過ごしたとはなんと奇妙なことであらうか。共通の目的が亡くなり、二人の弱い女性が残された。本来敵対関係だった二人が依存して暮らすようになったのである。最初は一人の女性がもう一人の女性の夫を奪った（本人が主体的にやったことでないにせよ）が、二人の共通の夫が死んだあと、女性はもう一人の病気の女性に一生仕えなければならなくなったのだ。あの年老いた二人が往年のことを語るとき、いったい何を語れるというのか？²⁴³

²⁴⁰ 妾をさす。

²⁴¹ 「婚姻的故事」『婚姻的故事』（北方婦女児童出版社、1986）p.26-27

²⁴² 同上

²⁴³ 同上 p.32

さらに、“冲喜”の慣習によって処女のまま病床の夫に仕え寡婦となった怡さんの結婚について「私」は文中でこのように語る。

「私にはそんな夫婦は想像できない、そんな愛情の意義も想像できないわ。」わたしは彼女（怡さん）に答えた。私には本当にわからなかった。あんなに短い、あんなに不健康な、あんなに親しみのない結婚、それが彼女を孤独で荒んだ生活に追いこんで、それでもいいなんて。これはプラトニックな愛情哲学の賜物なのだろうか？それとも中国女性の運命哲学がかくも根強いのか？いまどきこんな精神で支持される女性がいるのだろうか？彼女に同情したらいいのか？それともお悔やみを言えいいのか？²⁴⁴

この怡小姐には実在のモデルがいたようで、林海音は「婚姻的故事」のなかで、その女性と三嫂の話を併せて別の「殉」²⁴⁵という小説を書いたことにも触れている。林海音は「殉」の女主人公を、亡夫の弟に心を寄せる設定にしているが、怡小姐については「まさかどんな異性にも心を動かされたことがなかったのだろうか？本当にそのまま一生過ごすのか？あのような一カ月だけが愛のすべてだったのか？」²⁴⁶と疑問をなげかける。そして最も大きな問題は“冲喜”という迷信を信じる人の観念であると指摘している。

大家族のなかに6番目の嫁として組み込まれた英子であるが、注目したいのは、彼女が結婚当初から、新しいタイプの嫁として存在していたことである。しかも一家の主である公公も、英子を教育のある女性として評価している。

公公は私にとってもよくしてくれた、それは私が幼くして父を亡くし、母を助けて兄弟を学校へやり育てたからで、私は人を助けられる人間であり、人に依頼する人間ではないと知っていたからだ。²⁴⁷

この描写も林海音の実生活と重なるのであるが、舅は英子たち夫婦の結婚が“一番安心できる結婚”だと評価していたという。それは英子が教育を受け、職業婦人であったことに関係している。上述したように6番目、7番目の嫁はいわゆる新しい世代だったが、とくに六嫂の英子は誰に対しても親しみやすく、一目おかれる新女性であった。し

²⁴⁴ 「婚姻的故事」『婚姻的故事』（北方婦女児童出版社、1986）p.23

²⁴⁵ 「殉」『燭芯』（文星書店、1965）にほか8編とともに所収。

²⁴⁶ 「婚姻的故事」『婚姻的故事』（北方婦女児童出版社、1986）p.24

²⁴⁷ 同上 p.12

かも旧慣習のとおり、長男を出産したあと、婆婆のところへお祝いを述べに行くなど、相手に合わせるそのなさも持っていたため、大家族のなかでも円満に過ごせていた。ただ、そのまなざしは常に中立的かつ客観的であるように思われる。

その“近代主婦”の視点から「金鯉魚的百襦袢」の物語を、もういちど見てみよう。物語の主軸は、古い慣習が根強く人々を支配していた時代を描いているが、林海音はこれを新しい時代から振り返り、物語の冒頭と最後に孫世代の小家族を登場させる。美しいスカートにみとれ、学芸会に持っていくとねだる女学生の娘、それは金鯉魚の孫娘にあたるが、古い時代のことなど何も知らない無邪気な様子が描かれる。

“ああ！本当に凄いわ、こんな綺麗なスカート今まで私、見たことないわ！”

珊珊はかがんで手を伸ばしてその梅の花に触れ、きっちり折り目がつけられたスカートのヒダを触ってみた。それらの細かい刺繍に軽く軽く触れた…まるでちょっと力を入れたらその繊細で柔らかな花びらが散ってしまうかのように。²⁴⁸

こうして金鯉魚の悲しいドラマが回想されたあと、物語の最後に、舞台はふたたび新しい時代に戻る。

“持って行かせてやればいいさ、子どもが気に入ったのなら、好きにさせてやりなさい。実際いま考えてみれば、もうたいしたことじゃないだろう！あの頃は一枚のヒダ入りスカートが女の人にとってそんなに重要なものだったのかな？いま考えてみると本当に不思議なものだ。女学生が喜ぶっていうのなら、それを着て舞台上がって見せてもいいだろう。ああ！時代は…”

話はまだ続きがあるようだったが、溜息とともにそこで急に終わってしまった。だが珊珊は最初の一言を聞いただけで、もう喜んでスカートを抱え上げ、あとはパパが何を言おうとまったく聞いていなかった。

ママも何かを思い出したように、パパに言った。

“振富、あなた知っている、お母さんがどんなにこれを好きだったか。でも…”

ママもそれ以上何も言わず、パパと一緒に一時黙り込んで昔のことを想った。²⁴⁹

実際の物語は古いしきたりに苦しめられた女性の悲しい話であるが、ラストシーンの描写は淡泊であり、次世代にとってその事件は過去のものとして描かれる。

²⁴⁸ 林海音「金鯉魚的百襦袢」『婚姻的故事』（北方婦女児童出版社、1986）p.104-105

²⁴⁹ 同上 p.116

新旧時代の交代は「婚姻的故事」の夏家にも訪れる。繁栄していた大家族は次第に衰えをみせ、抗日戦争に勝利すると、子どもたちは一人また一人と大家族から巣立っていき、最初にこの家から独立したのは「私」たち一家であった。ここでは「私」の語りから、旧い家庭に対する率直な嫌悪感をみることができる。

戦争に勝利してまもなく、私たちは最初に大家族の古巣から飛び立った。私たちにはもう2人の子どもがいて、2階の三間の部屋は暖かく趣があったとはいえ、やはり狭すぎて4人を許容し切れなかった。いいえ、一番大きかったのはやはり私たちの心を許容しきれなかったということだろう！この思いは刻々と外に新生活と新しい発展を求めるようになり、気ままで独立した生活をしたくなってきたのだ。大家族の空気は重すぎて、ときに息苦しくなる。²⁵⁰

二嫂は南京に復員してきた二哥のもとへ、病気で死なずに済んだ二人の子どもを連れて出て行き、七哥夫婦も家から独立し、大きな屋敷はがらんとしていく。

能力のある者はみな遠方へと飛びたっていき、弱い者、病人、幼い者だけが二人の老人のもとに残った。もはや引き留めることもない公公、婆婆たちであった。²⁵¹

英子は古い社会の結婚に疑問をなげかけ、それをあからさまに批判することはない。苦しめられた女性たちに同情的なまなごしをむける一方で、林海音の言説には、新しい時代の主婦として生きていこうとする意志と自負が透けてみえる。

「婚姻的故事」をはじめ一連の小説において、林海音は数多くの“旧女性”の状況を描いた。妾として一生を過ごし情人の死後は生活の保障もない女性、縁起担ぎのために輿入れし処女のまま寡婦となった友人、夫と妾の関係を密かに恨み病気のふりをする正妻、男の子を生んでも結局身分は正妻に及ばない可哀想な金鯉魚—、彼女たちはみな「時代のこちら側へ来られなかった」女性であった。一方、それを語る「私」（英子）は彼女たちとは明らかに別の次元にいることがわかる。そこには、時代に翻弄された女性たちへの熱い同情とともに、常に客観的な観察者のまなごしが看取できるのである。

²⁵⁰ 「婚姻的故事」『婚姻的故事』（北方婦女児童出版社、1986）p.74

²⁵¹ 同上

第四節 “半山”のアイデンティティ「両地」と日本

これまで見てきた林海音の「城南旧事」や「我的北京回憶録」「婚姻的故事」などから、幼年期を過ごした小家庭と、嫁ぎ先の旧式の大家族、そこで見聞きした古い婚姻習慣に翻弄される女性たちの描写をみてきた。そこには自分自身が娘として虐げられたり、嫁として圧迫されたりという描写は見られず、「私」は常に“旧女性”と対極をなす存在であった。五四文化運動の洗礼を受け、比較的自由的な思想の父のもと、異郷人の家庭で成長した林海音にとって、旧時代の儒教的家庭制度や慣習は理解しがたいものであった。むしろ新聞記者時代、林海音はいわば近代家族の夫役として外で働き、家の内は優しく忍耐強い母愛珍によって完全に守られていた。これらの北京時代の経験は、林が近代家族の良妻賢母像を肯定的に描く一要素となったと思われる。続いて、本節では、北京・台湾・日本に跨る複雑なアイデンティティから生じた要素について、散文集『両地』に収載された台湾、北京に関する散文、また日本に関する散文を中心に述べたい。

一. 異郷人としての林海音—疎外感

林一家が北京に渡った 1923 年、日本の植民地であった台湾を脱出し新天地を求めた人々がコミュニティを形成していたことは、前述のとおりである。林海音の次女で作家の夏祖麗が『林海音傳』執筆のため北京で知人に取材したところによれば、1920 年代～1930 年代、北京の台湾人は大体 40 人ほどで、洪秋炎、張我軍など殆どが知識人層であった。父の生前は、兄貴分のような存在だった父の周りに多くの人が出入りしていた。また、父が亡くなった 1933 年以降、林海音は母と弟妹達とともに日々を送っていたが、当時住んでいた南柳巷の晋江会館にも、台湾の福建省出身者が頻繁に出入りし、みな福建語で会話をしていたという。夏祖麗によれば、晋江会館は当時の北京社会にも、台湾にも、むしろ日本にも属さず、人々は互いに助け合い、世話し合っていた²⁵²。民国期の北京において、台湾人たちは異郷のなかに生活していたといえる。そして異郷における疎外感、家族のつながりを一層強いものにしていった。

二. 『両地』—故郷の再構築

このような疎外感、林海音が台湾に戻った後に払拭される。なぜなら林海音は自ら称するように“台湾を故郷にもつ人”であったためである。北京における林の疎外感が、使命感へと変わったことが、その散文集『両地』を読み解くことで浮彫りになる。

「両地」とは台湾と北平をさす。台湾は私の故郷、北平は私の育った場所。私は生

²⁵² 夏祖麗「追隨母親的足跡—我寫林海音傳的心路歷程」(国立成功大学図書館館刊・第十一期、1992.4) p.83-88

涯この二つの場所を離れたことがない。²⁵³

この散文集は 1966 年に三民書局から出版され、計 57 編のうち台湾に関するものが 35 編、北京に関するものが 22 編収められている。台湾に関する散文には「愛玉氷」、「新竹白粉」、「台北温泉慢写」、「艋舺」、「冬生娘仔」など当地の風俗に関するものが多く、3 編を除きすべて 1950 年～51 年に『國語日報』「週末」欄に発表された。『國語日報』社は国民政府の国語（北京語）普及政策に沿って創立された財団法人で、林海音が渡台して一カ月後の 1948 年 12 月、夫の夏承楹が同社に入社し、林海音も翌年から『國語日報』の編集となり、「週末」版の主編を務める。北京語で創作できる人材が限られていた当時、林は自ら文章を書き、掲載していたが、創作意欲は非常に旺盛で、とくに 1949～1952 年の 4 年間におよそ 300 篇近い文章を各紙で発表していた。その多くが台湾の郷土風物を紹介したもので、渡台してきた一部の人々に好んで読まれた²⁵⁴。一方、北京に関する散文のうちほとんどは『聯合報』「副刊」に掲載されたもので、書かれたのはいずれも 1960 年代である。台湾に関する作品が、北京に関する作品よりも先に発表されていたことが分かる。当時、『中央日報』『新生報』『大華報』など新聞各紙には、林と同様大陸から来た女流作家たちの文章が多数掲載されているが、台湾の民俗に関してまとまった文章を発表した作家は、ほかには見当たらない。当時の台湾では国民政府による文芸政策が強力に推進され、メディアにおける日本語の禁止と中国語普及という政策のもと、文壇は外省人作家の天下となった。林海音もその当時デビューした一人ではあったが、彼女のスタンスはあくまでも「追われて逃げてきたのではなく、自ら決断し故郷へ戻ってきた」のであった。北京で長いこと思い描いてきたが、一度も訪れたことのなかった故郷台湾、そこへ戻ってきた林海音は、故郷について調べるために省立博物館へ足しげく通い、日本語の雑誌『民俗台湾』や池田敏雄著『台湾の家庭生活』などを読み漁り、内容をノートに写していたという。実際に『兩地』の散文を見てみると、次のように池田の文章を参照したとみられる個所が確かにある。

①「冬生娘仔」（「冬生娘仔」『兩地』p163～164。初出は『國語日報』1950.12.30）

林海音...

昔台湾の娘たちは十歳くらいになると、「冬生娘仔」と呼ばれる布の人形をよく作っていた。作り方はとても簡単で、線香の棒を十字に縛り手のひらほどの骨組みを作る。短い上着とズボンを着せて頭をつけ、目鼻と口を描く。足は纏足をしている形なので弓靴（纏足用の布靴）を履かせる。でも「冬生娘仔」には足が一本しかな

²⁵³ 林海音『兩地』自序（台北三民書局、1966）

²⁵⁴ 夏祖麗『從城南走来：林海音傳』（天下遠見出版、2000）p.132。

い。伝説では彼女の嫂がひどくきつい人で、足を一本折られてしまったという。

池田...

「冬生娘仔は少女の掌大の人形で線香の脚を十字形に組合せ、これに衫（上衣）と褲（ずぼん）を穿かせる。上にはきれをまるめて首をつくり、顔を描く。脚は隻脚で纏足の弓靴を履かせ色褲（纏足婦人の脚絆）をかぶせる。足が殊更に隻脚なのは何か理由があるに違ひないが今は不明に帰している。ただ冬生娘仔は意地悪な嫂にいちめつけられ、廁につまづいて足を一本失つたのだとも云ふが、確かなことはわからない。」²⁵⁵

二つの文章はかなり似通っていることがわかる。次に、台湾についての散文をもうひとつ挙げる。こちらは台北の艋舺について書いたもので、台湾の民俗が色濃いこの地区は『民俗台湾』でもしばしば取り上げられている。

②「艋舺」（「艋舺」『兩地』p142。初出は『國語日報』1950年12月23日）

萬華と延平路は本省人が多く住む場所で、本当の台湾らしさが沢山残っているところである。日本は五十年間不正にここを乗っ取っていたが、ずっとそれらを変えることはできなかった。名前から見てみると、萬華というのは日本が大正十一年に変えたもので、もとは艋舺と呼ばれていた。延平路一帯は日本人が太平町と呼んでいたが、もとの名前は大稻埕であった。台湾人は日本名を使うのを嫌いこの二つの場所をいつも艋舺、大稻埕と呼んでいた。—中略—当初艋舺は台湾北部で一番の繁華街で、台湾には「一府二鹿三艋舺」という古い言葉があった。府とは台南、鹿とは鹿港のことだが、いまはいずれも昔の精彩を失っている。—中略—萬華の夜市はとても有名で、夏の黄昏時には沢山の人がやってくる。これも台北ならではの風情のひとつだ。台北に行って萬華に行かないのは、ちょうど北平に行って天橋に行かないのと同じである。）

こちらは、なんとなく観光欄の紹介記事のようである。他にも「台北温泉慢記」や「台南『渡小月』」など台湾の名勝や名物を紹介する散文がある。中国大陸の人々にとって、台湾に渡ってくることは想定外であり、予備知識もなかったことだろう。林海音自身、台湾の市場で北京にはない南国の果物を目にし、母の流暢な台湾語を聞いてカルチャーショックを受けたというが、一方で台湾を故郷に持つ身として、読者に台湾について伝えようという使命感を持っていたと思われる。

²⁵⁵ 池田敏雄「冬生娘仔」『台湾の家庭生活』（大空社、2002）p.179

次に、北京に関する散文のうち、城南遊芸園²⁵⁶での出来事を綴った散文を見てみよう。毎週末、乳母に連れられ見に行った芝居小屋で、タオルを放り投げる給仕や観客の様子を描いたくだりである。

③「舞台の上、舞台の下」（「台上、台下」『兩地』 p22。初出は『聯合報』1962年12月15日）

しかし、お客と給仕のやりとりは毎日のように繰り返され、しかもすごく騒がしかった。女給が菓子皿を無理やり持ってきて、私たちが断ると、いつも意味のない争いが展開したものだ。女給はお客が子ども連れなのを見るとなおさら、菓子皿を下げようとしなかった。もちろん、私はそうっと、こっそりと落花生飴を一つ口の中に放り込んで食べ、もう一つ、もう一つ、もう一つとやっているうちに、大人に発見された時にはもう皿の半分くらいも無くなっていて、結局買うことになったのだった。）

②に比べると非常に生き生きとした細かな描写がされており、林海音の実体験に基づいた記憶であると思われる。北京に関する散文にはほかにも秋の食物や京劇役者の子どもたち、妾の女性について書いたものがあるが、焼き栗の香り、連なって歩く子ども役者のさまや子猫と話すお妾さんの声など、どれも音や色、匂いまで伝わってくるようだ。

④「英子の郷愁」（「英子的郷恋」『兩地』 p 123。初出は『台湾文芸』第一卷第一期、1964年4月）

これは書信の形をとった散文で、林海音によれば、実際の手紙ではないが当時の心情に近い内容だという。第一信から第五信まで、台湾にいる祖父や従兄に宛てた手紙となっている。

「英子的郷恋」

お母さんは薪を火にくべながら言います。故郷ではまだ一重の服を着ているころだと。そうですかお従兄さん？それならあなたの綿入れも基隆港に着いてすぐに脱いだのでしょうか？お母さんの話では、故郷の木の葉は黄色くなったり枯れたりしないで、きれいさっぱり落ちるのだと、それから水は凍らずにいつも流れているんだ

²⁵⁶ 郭豫斌『市井生活』（華夏出版社、2008）によれば、城南遊芸園は1918年に江西省議員の彭秀康が建設させた多種目芸能園。大小劇場が並び京劇や文明劇（新劇）、マジックショーなどが行われ、入園料両毛で園内の全施設を自由に観られるスタイルで民衆の人気があった。

と。—中略—それから女のひとたちは裸足に下駄を履いて、いつもいろんな人の家にお呼ばれするんだと。それから、それから……、故郷の一切は本当にこんなに面白いのですか？なぜ早く手紙を書いて教えてくれないのですか？

母から話を聞き、まだ見ぬ故郷に思いを馳せる様子が見てとれる。戦火が日々激しさを増すなか、母愛珍の帰郷への思いも強かったはずである。母の思いは北京っ子として成長した林海音にも伝わったはずだが、しかし林は自分が自分として生きられる故郷にこだわり、日本化された台湾を拒み続けた。そして戻ることのできない故郷への思慕はいっそう強くなっていったに違いない。

夏祖麗によれば、林海音が北京に関する文章を頻繁に発表し始めたのは1957年頃からであり、最初から北京についての文章だけを書いていたわけではなかった。確かに当時林海音がよく投稿していた新聞の副刊などを見てみると、1949年～1950年代初期までに掲載された文章は、女性や家庭生活に関するノウハウやエッセイに加えて、まず台湾の民俗を紹介した一連の文章が続き、1950年代後半になってようやく、北京の生活に関する文章を頻繁に発表し始めている。このような題材の多様性について、王鈺婷は「台湾籍を持つ林海音の特殊な身分が、複雑で重層的なスタンスを形成している」と述べ、他の遷台女性作家と異なる“半山”の身分について指摘している。²⁵⁷林海音の台湾に対する思いは、台湾に渡った（戻った）ことによって遂げられたのである。“半山”の立場をもっていた林海音は、誰よりも的確に台湾という未知の島を表現できる存在であり、それを皆に伝えるという使命を感じていた。林海音の描く主婦像（＝林海音自身）があくまでも活発で積極的であるという所以はここにもみることができる。

一方、台湾の民俗に関する文章を多数発表していたのと同じ時期、『中央日報』『中央週刊』や²⁵⁸『國語日報』²⁵⁹「週末」版などの紙面に、日本に関する文章をしばしば発表している。北京や台湾とは別の意味で人生に深くかかわったもう一つの地、生誕地でもある日本について、林海音はどのような叙述をしていたのか。管見の限りではそれらの文章に関する分析はまだなく、また林自身によってもその問題はとりたてて語られてい

²⁵⁷ 王鈺婷「報道的『中介』位置——談五〇年代林海音書写台灣之發言策略」、『台湾文学学報』第17期（2010.12）。

²⁵⁸ 『中央日報』は中国国民党の機関紙。1928年に上海で創刊。1949年、国民党政府とともに台湾に拠点を移して発行を続けた。2006年以降ウェブ版に移行。

²⁵⁹ 『國語日報』は国語推進、教育普及を主旨とした専門紙。前身は1947年北平で発行された『國語小報』。1948年10月25日の台湾光復節に台湾で現名称で創刊。紙面のすべての漢字に中印字母が付されている。

ない。しかしそれがどのように描かれ、どのような意味を持っていたかを探ることは、林海音の日本に対する複雑な思いを知るうえで不可欠であり、それは北京、台湾に関する言説とともに、林の主婦像をみる重要なファクターでもあると思われる。ここからは、1950年代～1990年代にかけて林海音が発表した日本に関する文章から日本に対する描写を分析し、その描写の意味について考察する。

三. 日本に関する文章（1950年代～1990年代）

ここで、林海音が日本に対する描写が見られる作品を現在調査できる限り列挙する（次頁表）。²⁶⁰林海音は台湾へ渡った当初、まず『公論報』『自由中國』などに投稿し、しばらくして『中央日報』と『國語日報』の文化欄に多くの文章を発表するようになった。1950年代は林がこの二紙を中心に多数の散文と小説を発表した時期であるが、日本に関する文章も1950年前後に集中し、その後は1965年、1980年代～90年代にとんでいる。いずれも散文であるが、これらの文章をみると、1～10までの1950年前後に書かれた文章（かりにA群とする）において、日本に対する描写には肉親を戦争で殺された悲しみ、日本の台湾統治に対する批判、日本占領下の台湾に帰れぬ悲哀などが表れていることに気付く。一方1965年以降に書かれた文章（B群とする）には、日本や日本の文化、人との触れ合いが親しみや懐かしさを帯びて描かれていた。以下、具体的に文章を挙げてみていく。

²⁶⁰（初出）とあるものは1と8以外は実際の掲載記事を確認したもの。1の掲載メディアについては施英美《〈聯合報〉副刊時期（1953-1963）的林海音研究》（臺中：靜宜大學中文所碩士論文，2003.6）の林海音文学年表（1918.4-2002.11）を参照した。本年表は林海音の発表作品について掲載紙を特定できない場合を除きほぼ網羅しているが、11以降は記載されていない。11～16はそれぞれ後に出版された選集や全集に収載されており、文末に初出年が記してあった。15に対しては記載がなかったが、日本訪問記であるため訪問年の1994年頃に書かれたものとみてよいだろう。また8については上述の年表で1964年『台灣文藝』第一卷第一期に掲載と記されているが、本文の後期において作者自身が1951年3月に書いたと記載しているため、この日付によって分析した。

	[タイトル]	[掲載メディア・書籍]	[初出年/月/日]
A 群	1 日本的白面兒房	『國語日報』 周末版 (初出)	1949/3/4
	2 日本房子與其他	『中央日報』 第 6 面 (初出)	1949/7/14
	3 國語家庭	『國語日報』 週末版 (初出)	1950/4/22
	4 艋舺	『國語日報』 週末版 (初出)	1950/12/23
	5 尪叔	『國語日報』 週末版 (初出)	1950/12/9
	6 光復以來	『中央日報』 中央週刊 (初出)	1950/10/25
	7 英子的鄉戀	『台灣文藝』 第一卷第一期 (初出?)	1951/3 月
	8 勿忘婦女讀者	『中央日報』 (初出)	1951/5/9
	9 霧社英魂祭	『海燕集』 海燕出版 (1953)	1951/11/20
	10 白兔跳	『聯合報』 副刊	1951/10/11
B 群	11 絹笠町憶往	『寫在風中』 遊目族出版 (2000)	1965 年
	12 林芙美子和『放浪記』	『春風已遠』 遊目族出版 (2000)	1985 年
	13 我的京味兒回憶錄	『我的京味兒回憶錄』 遊目族 (2000)	1987 年
	14 記日本関西之旅	『寫在風中』 遊目族出版 (2000)	(1994 年?)
	15 英子对英子	『寫在風中』 遊目族出版 (2000)	1995 年

(一) 仇としての日本

日本への批判的描写が強い A 群の作品のなかでも、もっとも感情的に描かれるのは、日中戦争時代に亡くなった父林煥文に関する文章である。日本統治下の台湾で日本語教育を受けたが、そうした社会を嫌って故郷から脱出した父は、北京の台湾人コミュニティ²⁶¹の中心的人物であったという。亭主関白で躰には厳しいが豪胆で愛情深い父、優しく穏やかな母、沢山の兄弟や同郷人に囲まれていた頃の北京での暮らしが、英子（インツ、林海音の幼名）にとっていかに大切であったかは想像に難くない。しかし、やがて日本の中国侵略が顕著となり、父の末の弟林炳文が日本人に捉えられ獄死、父も林海音が 13 歳のとき病死する。叔父は父を頼って台湾から北京へやってきたのだが、抗日活動に参加したため日本軍に捉えられ、監獄で毒殺されてしまったのだ。「尪叔」にはその事件について記されている。

²⁶¹ 夏祖麗『從城南來：林海音傳』によれば、当時北京の台湾人は 4～50 人ほどで、みな植民地下の台湾を脱出し祖国に活路を見出そうとした人々であった。かれらは日本当局の目を逃れ、また地元の人に奇異な目で見られないようにと、台湾人であることを憚って生活し、独自のコミュニティを築いていた。

「尙叔」

後に末の叔父は朝鮮の抗日分子と付き合い、何かことを起こそうとしたとき、運悪く大連で日本人に捕えられ、監獄で毒を飲まされ死んでしまった。叔父の写真が日本の新聞に載ったとき、父は悲しみのあまり声も出なかった。(中略)父は叔父の亡きがらを大連へ引き取りに行き、しばらくすると度々血を吐くようになったのだ。当時祖父は手紙でこの件について父を責めた。父の心労は病気を悪化させ、満州事変が勃発した1931年に帰らぬ人となる。残されたのはか弱い母と、長女林海音のほかに6人の幼い弟妹だった。

さらに、当時の出来事について、ほぼ事実の感情に基づいて書いたという「英子の郷恋」には、父を奪い故郷を奪った日本に対する怒りが露わに記される。これは書信の形をとった散文で、台湾にいる祖父や従兄に宛てた五通の手紙で構成され、以下に挙げる第二信は、台湾へ戻るように勧めてきた祖父に対し、戻らない意思を表明する手紙である。まずは第二信、祖父に宛てたもので、帰郷するようにとの勧めを断る手紙を挙げる。自分は中学二年生、弟妹は小学生であり、台湾に戻れば日本語を勉強しなければならぬから帰らないという内容である。

「英子の郷愁」『兩地』

私たちは勉強をやめたくないですが、途中から日本語の学校へ編入したくはありません。それに、叔父さんが大連の監獄で日本人に殺されてからというもの、大好きな叔父さんを死に追いやったあの国に対する憎しみを、私は永遠に忘れることができません。また父の病も、大連へ叔父さんの遺体を取りに行ってから悪化したのです。—中略—母はとても故郷を恋しがっており、おばあさんがどんなに私たちの帰郷を待っているだろうかといつも言うのですが、やはり私たちの意思に沿ってのこってくれたのです、母はこんなに善良なのです！

叔父とは父煥文の末の弟で、父を頼って北京に留学に来ていた林炳文をさす。幼い林海音をかわいがってくれた叔父だったが、抗日活動に参加して日本人に捕えられ、大連で獄死させられた経緯がある。林海音は最愛の父を失い、読み書きがあまりできない母に代わって自らが家の大黒柱とならざるを得なかった。母からいつも話を聞いては思いを馳せていた故郷、祖父母や親戚のいる台湾へ帰るという選択肢もあったはずである。しかし結局、林は日本の植民地である台湾には決して帰らない、という決断をみずから下したことが記されている。

(二) 疎外感からの開放

戦争で日本に肉親を奪われた悲しみは、ダイレクトに林海音の言説に現れていた。ここではまた、日本の植民地政策への怒りを通して、故郷への複雑な思いが現れた描写について取り上げたい。「光復以来」は1950年10月25日、中央日報「中央週刊」の光復節記念特集号に掲載された文章である。

「光復以来」

私は決して忘れはしない、故郷のためにかつて受けてきた打撃のすべてを。あるとき小さな集まりがあり、皆が日本の問題について憤慨して話していた（当時はまさに日本人の統治下であった）。一人の友人がふざけて私に言った、「君は日本人だからきっと喜んでいるんだろう！」その時私の顔は真っ赤になり、心は怒りではちきれそうになった。しかし私は彼にこう答えた。「今日あなたが言った言葉を、私は絶対に忘れない。」

「日本人だから」とは日本の支配下にある台湾人の身分に対する揶揄である。幼いころから北京っ子として育った林海音にとって、このような扱いは侮辱以外の何物でもなかった。林海音の父世代の台湾人たちは、日本当局の目を逃れるためにコミュニティを形成し、北京の人間になりきれない一種の疎外感のなかで暮らしていた。林海音も時としてこうした疎外感を感じていたと思われる。——もしも台湾が日本の植民地にさえなっていなければ、このような苦しみを背負うこともなかったのだ——。

林海音にとっては、「台湾光復」は心から喜ばしいことであり、北京の台湾人、日本支配下の植民地の台湾人という、これまでのずれのしがらみからも解き放たれた、“あるべき姿”の獲得を意味した。林のアイデンティティと故郷はこのようにして矛盾なく重なったのである。

こうした揺れるアイデンティティは、“台湾意識”という問題と繋がる。黄俊傑は著書『台湾意識と台湾文化』において、台湾意識を「台湾に生きる人々が、彼らが存在する時間的、空間的情況を認識し、解釈する方法およびその思想」と定義づけている。²⁶²黄はおもに在台本省人の台湾意識について論じ、日本統治期における台湾意識の重要な一面は日本に対する「民族意識」であって、光復後のそれは、外省人に対する省籍意識から形成されたと述べている。台湾籍をもちながら北京で育った林海音にとって、その台湾意識とは、日本統治期においては、やはり漢民族としての誇りに基づく抗日的「民族意識」であったが、光復後の台湾意識は、外省人であると同時に“半山”であったがゆえに、複

²⁶²黄俊傑『台湾意識と台湾文化—台湾におけるアイデンティティの歴史的変遷』（臼井進訳、東方書店、2008）p.3

雑なものとならざるをえなかった。

(三) 日本統治への批判

日本の植民地政策に対し、林海音は批判的見解を示している。「國語家族」は台湾で実際に見聞きしたことに基づいて書かれた文章である。

「国語家庭」

私の親戚の青年は台湾語を話す、私と同じようにぎこちなく奇妙な発音だった。あとで隣人の奥さんに聞いたのだが、戦前、かれらは完全に日本語を使うのを強いられてきた。家の中でも外でも、日本語だけで話さなければならなかった。そのため青年たちは台湾語が話せなくなってしまったのだ。光復後、日本語を捨てて国語を勉強し始めたが、話してみるとぎこちなく、日本語をはさまないとほとんど通じない。——日本人は別の言語をさらに教えるのではなく、もともとの言語を忘れさせたのだ。中国の言語は元来複雑なため、政府[訳注：国民党政府]は国語を統一したが、人々に故郷の言葉を話すのを禁じたりはしなかった。この点において、侵略者のやり方というのはやはり違うのだということがわかる。

1937年、日中戦争が勃発すると、日本は戦争への動員の必要から台湾で皇民化運動²⁶³を推進し、台湾人に対し日本式の姓名への改称や、日本語の使用、神道の信仰などを積極的に求めた。“国語家庭”はその一環として奨励された。国語家庭とは日本語の学習と使用を奨励する制度であり、全員が日本語を話す家庭であれば、国語家庭調査委員会に“国語家庭”として申請し、審査を通れば子女の進学や就職にもさまざまな優遇措置がつけられ、栄誉とされた。さらにこの時期、日本総督府はメディアでの漢語使用を禁止し、学校で台湾語を使用した生徒には体罰を加えるなど、台湾人から母国語を奪った。林海音はこのことについて批判したのである。

戦後、台湾では国民党政府による新たな言語政策が推進された。林海音の夫何凡も「台湾省国語推行委員会」のメンバーの一人であり、夫婦ともに『國語日報』の編集を務めていた。林海音はいわば国語推進運動の最前線にいたのである。ただ、戦後の台湾で蒋介石政権がとった国語（北京語）推進政策のなかでも、やはり台湾語の使用が禁止されたという経緯がある。林海音は上記の文中で、台湾人が台湾語を失うことに危惧を示しているが、そこに故郷の台湾に寄り添う林独自の意識が垣間見られる。²⁶⁴

²⁶³ 皇民化運動は日中戦争時期に戦争動員の一環として行われ、1937～1945年まで続いた。

²⁶⁴ 国民政府は1946年、「台湾省国語推進委員会」を正式に成立し、各県市に国語推進所を設けて北京語の普及運動を積極的に推進した。さらに1951年にはすべての教育機関にお

このほかにも、植民地時代の公学校で子どもが罰を受けるとき教師にさせられた「白兔跳（うさぎ跳び）」という“悪習”や、日本人が台北の地名を勝手に日本語ふうの呼び名に付け替えたことに対し、憤慨と非難を示す文章が複数みられる。

（四）台湾を故郷に持つ身の使命感

林海音は台湾に戻り、日々の糧を得るため、そして自らの執筆意欲に突き動かされ、新聞各紙に精力的に投稿を始める。『國語日報』の主編時代には、原稿料も出せないため自ら文章を書いて紙面を埋めることも茶飯事だったという。『聯合報』副刊の主編時代には、本省人若手作家が作品中で使った方言を作者の願い通り掲載したり、日本語世代の作家たちの原稿をみずから添削したりと、多くの作家を助け文壇に送り出した。日本人化された故郷の人々への同情、台湾の文化を外省人に伝えるという使命感、旧態依然とした養女制度に苦しめられる台湾の女性に対する啓蒙など、戦後の台湾で林海音の果たそうとした役割は多様であった。次に挙げる文章にはこうした使命感が表れている。『中央日報』「婦女與家庭」欄で「婦女與文学—女性作家空中座談會」と題した女性作家の座談会が特集で組まれたときのもので、このコラムに常時文章を掲載している5人の女性作家がコメントを寄せている。このなかで林海音は、日本書籍の大量輸入という現象に反対したうえで、次のように主張した。

「勿忘婦女讀者」

私は一人の台湾人としてまた国語推進を行う立場として、当然こうした現象に反対する。なぜならそれは台湾の同胞が祖国の文字を学習する一大障害となるからであり、われわれは絶対にこれに反対せねばならない。しかし日本の書籍を禁止した後それに変えて何を精神の糧となすべきか！——台湾女性の教育がどれだけ普及しているかは周知のことで、彼女たちは読書力があり読書する楽しみを知っている。彼女たちはとくに婦人向けの読みものを好む。そうした読みものは精神の糧を得られるだけでなく、生活の技術や常識を学ぶこともできるからだ。それで日本の「婦人之友」「婦人倶楽部」などの婦人雑誌が人気なのである。正直に言えば、これらの理由は日本だからというのではなく、いかなる進歩的な国でも、女性たちはすべからず重要視されている——台湾の女性にも、祖国のことをもっとよく理解でき、より親しみやすい、完全な婦人雑誌をつくることは重要な仕事なのだ。

この文章からは、林海音の北京語の推進者としての使命感に加えて、台湾同胞の北京語学習に対する関心が浮き彫りにされている。注目すべきは、日本の雑誌にも質の高い

いて北京語の教育を徹底し、方言の使用を禁止した。

ものがあることを認めており、林の冷静な判断を見ることができる。実際、当時林海音が主編を務めた『國語日報』では、欧米など外国の文章とともに、日本の婦人雑誌の文章も翻訳され掲載されていた²⁶⁵。

(五) 語られはじめた日本との繋がり

一方、1950年代に書かれたA群の文章に比べ、B群の文章には親日的な描写が現れている。もっとも新しく書かれたものに1994年来日時の散文があり(表14、15参照)、これは日本老舎研究会の招聘で、関西大学で『城南旧事』の中の北京」と題する講演をしたときの日記風散文である。日本の研究者たちとの交流やその真摯な研究態度への讚美が記され、誰とどこへ行き何を食べたかということまで詳細に記されている。このとき林はすでに76歳、台湾において様々な活動を経て、4人の子どもを育て上げ、文壇で多くの友に恵まれ、まさに成就の頃であったと思われる。しかし日本への懐かしさが初めて描かれたターニングポイントとしてとらえたいのは、林海音が生誕地の大阪に戦後初めて訪れ、それを記した下記の文章である。この時、林海音は10年間務めた『聯合報』の主編を辞職し(一説に蒋介石政権を暗に批判したとみなされた読者の詩を聯合報に掲載したことが辞職の原因だったと言われる)、米国国务院の「認識美国」プロジェクトの女性第一号として、4か月間の訪米を終えた帰途に日本を訪ねた。以下は、林海音がこの病院で生まれたことを病院の職員に告げたあと、さらに古株の看護婦を呼んで当時の様子を探ねようとしているくだりである。

「絹笠町憶往」

私は彼[訳注：病院の職員]に、自分はこの病院で生まれた中国人で、四十年たった今初めてこの出生地を訪ねてきたのだと告げた。また、私が生まれたときの最初の言葉は日本語だったが、惜しいことに今はすっかり忘れてしまった、とも言った。

(中略) 結局、彼女[訳注：古株の看護婦]がこの病院へ来たのは私が生まれた四、五年あとだったのだ！こうしてみると、この病院におけるキャリアで言えば彼女より私の方が先輩だったということになる。わたしたちはみなで大笑いしてしまった。

1965年の林海音には、すでに日本を生まれ故郷として受け入れる余裕があったのだろうか。北京は渡る以前のほんの一時期住んでいた町並みに、大阪で商売していた父や当時の母を思い、病院を訪ねて身振り手振りで日本人々とコミュニケーションしようとした林海音の目には、日本はすでに懐かしい場所としてとらえられていたように思われ

²⁶⁵ 1950年7月8日の『國語日報』週末版には「丈夫的回国」と題し、照井須恵子著『主婦之友』4月号掲載の文章が翻訳掲載されている。

る。1994年に関西へ出張した折にも、林は回生病院を再度訪れている。

さらにもう一つ、1985年に書かれた散文「林芙美子和『放浪記』」に、日中戦争当時のエピソードを書いた興味深い文章がある。当時林海音は、貧困と屈辱のもとに生まれながらも決してその環境に屈せず生きようとした林芙美子の姿勢に大きな感銘を受けていたという。それは『世界日報』の女性記者として、進歩的な女性や新しい時代のなかで葛藤する女性を取材してまわっていた頃で、林芙美子来京の知らせを聞いて早速取材に駆けつけた。

「林芙美子和『放浪記』」

林芙美子はすでに有名で、大体民国二十五年頃だったが、彼女は北平に旅行に来たことがあった。私は二十にもならない新米記者だった。この知らせを聞いて、『放浪記』という小説が好きだった私は彼女を訪問した。彼女は私よりも背の低い女性で、年の頃は三十二、三、穏やかで親しみやすい方だった。この訪問記が掲載された後、南京に到着後すぐに上海へ行く途中だったわが師成舎我先生が、はるばる北平まで手紙をよこし、反日感情があんなに高まっているときに日本人の作家を訪問するなんてとんでもないことだ、と書いてきた。私は責められたがどうしようもなかった、どのみち原稿はもう掲載されてしまったのだから。

むろん、林がこの散文を書いた時期は1980年代であり、親日的な内容を自由に書けたという側面がある。だが反日感情が高まっていた時代であったにも構わず、心酔する作家に取材を申し込んだという行動には、日本人だから一概に批判するという頑なさは見られず、人に対する熱い思いと、自分の考えに従って迷いなく行動する林の強さを見ることができる。

夏祖麗によれば、北京に来た当初の林一家には日本の生活習慣がいろいろと残っていたようだ。英子は和服を着ており、父を「歐多桑（おとうさん）」、母を「歐卡桑」（おかあさん）と呼び、客家語と閩南語と日本語をごちゃまぜで使っていた。父は日本から“sukiyaki”専用鍋を持ってきており、幼い英子もすき焼きが大好きだった。また家には日本製のアイスクャンデーを作る道具や、日本から持ってきた手回しの蓄音機もあり日本語のレコードもあった。英子の家は近所でも有名な、珍しいものや新しいもの、西洋風なものがたくさんある家だった。²⁶⁶ そしてここまで詳しくはないが、林海音自身の文

²⁶⁶ 夏祖麗『從城南走来：林海音傳』（天下遠見出版公司 2000）p.28

章にも、日本の文化や習慣に関する描写があった。

「我的京味兒回憶錄」

うちの隣は回教の外科医の趙炳南さんで、父とはご近所友達だった。うちには日本の手回し式蓄音機や、日本の童謡「桃太郎」などのレコードもあった。趙さんは面白がって、借りて行って聞いたりしていた。

このような日本の文化習慣、事物による様々なことからは、両親と暮らした幸せな家庭とともに、林海音の記憶にとどめられていた。

小結

本章では、林海音の主婦像を形成した要素として、北京の子ども時代、日中戦争最中の記者青年時代、6番目の嫁として嫁いだ妻時代をその作品からみてきた。台湾から漂泊してきて小家庭を営んだ両親のもと、近代化の波がおしよせていた民国期の北京で幸せに暮らしていた英子であったが、父の死とともにその生活は一変する。弟妹が病気でなくなり、生活は困窮した。生活のために英子は職業婦人となり、いわば一家の大黒柱のような存在となる。そのとき培われた自立心は、同僚と恋愛結婚し旧式の大家族に嫁いだ後も、英子を舅や回りから一目おかせることとなった。林海音の散文からその北京時代をみると、比較的自由的な家庭に育ち近代主婦となった知識人女性の姿が浮き彫りにされる。そして待ちに待った光復、長年思い焦がれた“故郷”台湾へ戻った林海音は、水を得た魚のように活動をはじめた。林は真っ先に台湾の風土や習慣を学び、台湾人の両親をもつ自らのアイデンティティを確立させるべく、台湾に関する散文を次々と発表する。また日中戦争はまさに林海音の叔父、父を死に至らしめ、幸せな家庭を崩壊させた原因であったため、1950年代初期までの散文には、最愛の肉親を奪った仇への憎悪とともに、故郷台湾を植民地として苦しめた国への非難と反感が、はっきりと示されていた。そこには光復後の本省人の歴史認識とは異なる、外省人としての歴史認識が看取できる。台湾にいた多くの台湾人にとって、日本はついこの間まで宗主国であり、日中戦争最後の8年間には、多数の台湾人が日本人として戦争で戦う決意をするほどに変化していた。一方、中国大陆にいた中国人あるいは台湾人にとって、日本は祖国を侵略した敵国であり、その支配下に貶められていた台湾は、必ずや本来の姿を取り戻さねばならなかった。光復後における異なる二つの歴史認識のうち、林海音の認識は外省人のものに他ならない。ただ、その認識をより複雑にさせた要素として台湾人としての立場があった。大陸から渡ってきた人々にとって、台湾は見知らぬ土地であったが、林海音にとって台湾とは、長い間思い焦がれた故郷であり「逃げてきたのではなく自ら決断して帰ってきた」

場所だったのである。日本に批判的な文章が 1950 年代に集中していたことは、台湾に対する散文を多く発表したことに加えて、それが林海音の故郷再構築—自己実現と緊密に関わっていたことを意味する。そしてそれは決してネガティブに陥らない主婦像の描写にも繋がっていく。

疎外感から解き放たれ、台湾という故郷で自らの力を発揮しようとした林海音にとって、仕事を持ち、子どもを育て、多忙な毎日を送ることは、極めて喜ばしく、満たされるに十分だったのではないか。

おわりに

本稿では、第一章において、まず 1950 年代当時の文壇状況—国民党政府による文芸政策—「中華文芸獎金委員会（文獎金）」の設立による“反共抗ソ”を主旨とする優良作品の奨励、外省人作家 200 名からなる「中国文芸協会（文協）」をはじめ「中国青年写作協会」「台湾省婦女写作協会（婦協）」など各種作家団体の設立による組織的な文芸普及活動が推進されていた状況について述べた。そのうえで、当時遷台女性作家の代表的な創作発表の場であった「婦女與家庭」（武月卿主編、1949.3.3-1955.4.27）を対象とし、同欄で連載をもっていた 6 人の作家の言説について分析を行い、そこに次のような傾向がみられることを明らかにした。第一に、主婦にとっての悩みとして、家事と仕事の両立が挙げられている。第二に、主婦は家庭の主宰者であり、主体性をもって幸せな家庭を築いていく存在であると指摘されている。第三に、主婦は家と日常にのみ埋没するのではなく、自身を高める必要があると主張している。こうした主婦像は、夫婦と子どもで構成される“小家庭”に存在し、仕事と家庭の二重負担の問題があることなどから、内助の功を果たしつつ一定の経済力を持ち、主体的に家庭を営む“近代家族の良妻賢母”像と重なる部分が見られる。中国における良妻賢母とは、受容された当初から家庭と社会に対する二重役割の歴史が確認でき、女性は国家繁栄のために生産活動に従事する一方で、子どもを産み育て教育を施すことのできる教養ある母像となることが求められた。二重負担に対する表現は作家によって温度差が見られるものの、遷台女性作家の主婦像は、国民党政府の求める主婦像から逸脱してはいない。とりわけ、林海音、そして鍾梅音の文章には、良妻賢母への肯定感が顕著にあらわれていた。

本稿ではまた“半山”林海音のこのような主婦像が形成されたプロセスを追究するために、その比較対象として、外省人である鍾梅音の主婦像について分析し、そこに大陸時代の家庭と対極をなす、自由で幸福な台湾の小家庭が描かれていたことを明らかにした。林海音以外の遷台女性作家（外省人）にとって、遷台とは新天地の小家庭を形成するきっかけともなったのである。そのうえで、“半山”のプロフィールをもつ林海音について、大陸時代の家庭状況、そこで見聞きした旧女性（とその対極にある林の新女性の視線）への言説を分析し、さらに台湾における林海音の“故郷再構築”が自己実現の線上にあるものであり、それが林の主婦像の背景となっていたことを示した。

林海音という一人の作家が、1950 年代の台湾で発信していた、きわめて自己肯定感の強い主婦像は、興味深いいくつかの問題を提示している。第一に、台湾文学史において周縁化された遷台女性作家という存在があり、当時の台湾における主婦像は、かれらによって発信されていたことである。台湾の文学史における 1950 年代とは、国民党政府主導の文芸政策が推進された時代であり、本省人の立場からいえば「反共文学と郷愁文学しか生まれなかった空白の時代」というみかたが定説化していた。1990 年代に入って

ようやく遷台女性作家を再評価する動きが起こり、不毛の時代とされた 1950 年代に、遷台女性作家たちが独自の抒情性を発揮し、それが後の女性文芸の礎となったことが、主に女性研究者たちの手によって指摘された。これらの研究者は「とるに足らない日常の事がら」と評価された女性作家たちの言説にこそ、当時の社会におけるリアルな状況、女性たちの生の声が反映されていると主張し、男性作家たちが大陸反攻に目を向けていた一方で、女性作家たちの言説には、台湾を新しい故郷と認識して受容しようとする姿勢がみられたと指摘した。この気づきは、1950 年代の文学を論ずるうえで、ジェンダー的な切り口として新たな意味がある。

第二に、それら遷台女性作家の言説の背景には、国民党の女性政策の影響があった一方で、その情勢が新たな土地で生きていこうと模索する女性作家たちの需要と少なからずマッチしていたことである。遷台女性作家の主婦像には、夫婦と子どもで構成される小家庭、仕事と家庭の二重負担などの問題がとりあげられており、それは内助の功を果たしつつ一定の経済力を持ち、主体的に家庭を営む“近代家族の良妻賢母”像と重なっている。これに対する各作家の言説には温度差があったが、それは社会批判にまで及ぶことはなく、多くは自己を高めることに解決策を見出す言説に留まっている。これには戦時態勢における内助の功を求め、ラジカルな女性運動を抑制しようとする政策的意図が少なからず反映されていたと思われる。“共産中国”の対極としての“自由中国”の近代的な主婦像という概念が、宋美齡を中心とする理想の女性として政治宣伝のために用いられていた時代、その影響は女性作家の主婦像に大きく作用していたであろう。ただ注目すべき点は、“有能な良妻賢母”という枠組みのなかにありつつも、自己を向上させようと模索する女性作家の意志が表れていたことである。その顕著な例が林海音であり、また鍾梅音であった。

第三に、林海音の主婦像は、その“半山”の立場によって、他の遷台女性作家に比べてより複雑で重層的であったということである。林海音と遷台女性作家、たとえば鍾梅音の主婦像に共通するのは、非常に前向きに、台湾における家庭を描いている点である。鍾梅音の場合、遷台後に海辺の蘇澳にて夫・子どもと育む“小家庭”は、大陸時代における暗い家庭とは対照的で、その文中に描かれた主婦像には充実感と幸福感があふれている。これと同様に、林海音の描く主婦像もまた、前向きで充実感の滲む近代主婦を描いているのであるが、それが形成された背景は他の遷台女性作家とは異なる。鍾梅音を例にとると、大陸における家庭と遷台後の家庭とは、古い、しがらみのある“大家庭”←→新しい、自由な“小家庭”という二極構造を呈する。その親は古い婚姻制度のもとに生きた世代であり、畜妾制度や封建的上下関係、家同士が決めた結婚が一般的であった。これに対し、鍾梅音が遷台後に築いた家庭とは、戦争の動乱のなか恋愛結婚で結ばれた夫と子どもたちとの生活、上の世代や親戚もいない核家族ならではの自由さがあった。

林海音の場合、その主婦像の形成過程はより複雑である。中国の近代化にともなう近代家族の受容という点では遷台作家と同様であるが、日本の台湾植民地化によりもたらされた台湾人としての微妙な立場、日本の中国大陸侵略にともなう故郷への帰還という背景がある。さらに、このような時代のなかで、林の両親は台湾をただ二人で脱出し、新たな土地で自由な“小家庭”を形成した経緯がある。母は読み書きのできない旧時代の女性ではあったものの、夫婦は愛情で結ばれた“新しい”関係であった。それに加えて、北京での一家の暮らしには、大陸における台湾人＝余所者という立場にあったため、家族の絆はより強く結束感があった。林海音にとって、この両親との楽しかった生活が、後の家庭観の一層目の土壌となっていく。しかし、父が死去し、日中戦争が激化するなかで、総領娘の林海音には試練の時期が訪れる。父の死後も、日本の植民地であった台湾には断固帰らず、家庭的で明るい母と弟妹たちを支えて、林海音は一家の主のような立場を担っていく。この経験は後に知識人の大家族に嫁いだ際にも、賢い近代的な嫁としての地位を獲得することに繋がる。英子のもと職業婦人であった進歩的な「六嫂」であって、幼いころから親戚の家で育ち、その家のために病人に嫁がされたものの幼馴染のいとこと不倫の子どもを設けて離婚した三嫂とは、ちょうど対照的である。そこには“異邦人”の小家庭に育ち、抗日戦争期の苦勞を乗り越え、父なきあと一家を支えた強さと、五四時期の新思想を十分に吸収した女性の姿が見て取れる。この結婚後の家庭経験が林の家庭観における二層目の土壌となる。それは近代主婦としての自覚をもつ主婦像につながる。さらに、光復後の“故郷”への帰還が、三層目の土壌となる。それは林海音にとって極めて刺激的な出来事だった。他の外省人作家と異なり、台湾を故郷にもつと自負する林海音は、台湾において女性たちを導こうとする強い使命感も感じていた。仕事も家庭も全方位で励む積極的な主婦像が、林海音自身の投影としてその文中に出現することになる。これに加えて、大陸時代に見聞きした旧女性への視点という要素がさらに一層積み重なり、複雑に絡み合い、その家庭観が形成されていった。その主婦像は、戦争という時代の変動における両親と林自身の漂泊と、何重もの内的・外的要因を含んで生まれたものであった。

台湾に関する描写が集中し、抗日的な文章が集中していた 1950 年代、それはまさに林海音が台湾で故郷の再構築をしようとしていた時期であった。“半山”の林海音にとって、台湾における自らのアイデンティティをより一層明確にするために、その文中における台湾と日本の描写は、一定の機能を果たしていた。林海音による故郷の再構築とは、揺れるアイデンティティを確たるものとするための自己実現の手段であり、幸せな家庭をもち、忙しく働く主婦になることもまた、自己実現への重要なステップだったのである。そのような自己を高める意識こそ、“自己肯定感の強い”主婦像が形成された大きなファクターであったということができるのである。

本稿では、“半山”という特殊なプロフィールをもつ女性林海音について、その主婦像が形成された背景と要因について考察し、光復後の国民党統治下における主婦言説の一端を示した。女性作家、それも二重の省籍のアイデンティティを有する林海音という作家が描いたのは、あくまでも積極的で楽観的な、より充実した自己をめざす主婦像であり、それは時代のなかで漂泊する家庭において生まれたのである。

一方、このような遷台女性作家に対し、日本統治時代を経験した台湾人女性の描いた主婦像とは、どのようなものだったのか。台湾においては戦前すでに女子教育も実施され、“新女性”も誕生していたが、日本語が使えなくなったため沈黙を余儀なくされた台湾人女性作家の言説はどのようなものであったか、遷台女性と彼女たちとの接触はあったのか、それらを分析することにも大きな意味があると考えられる。また、遷台女性作家は一代目の外省人作家であるが、遷台二代目以降の世代の主婦像が、変化する省籍意識とともにどのように変遷していったか、という問題も非常に興味深い。これらの問題については、今後の課題としたい。

新聞・雜誌

『國語日報』(1948～)

「婦女與家庭」『中央日報』(1949.3.13 第一期～1955.4.27 第264期)

「婦女節」『中央日報』(1951. 3.8)

『婦友』創刊号(国民党婦女工作會、1954.10)

『中華民國文藝年鑑』(台北：平原出版社、1966)

『中央日報』(1951～)

莫希平「創刊獻詞」『中華婦女』(中華婦女反共抗ソ聯合會、1950. 7)

小說・散文

(中國語)

何標「北京台灣會館史話」『台聲雜誌』(1994.9)

何標「《城南舊事》作者林海音青少年時代的人和事」『兩岸關係』(2001)

林海音『城南舊事』(爾雅出版社、1961)

林海音『燭芯』文星書店、1965

林海音『兩地』三民書局、1966

林海音『婚姻的故事』北方婦女兒童出版社、1986

林海音『靜靜的聽』爾雅出版社、1997

林海音『剪影話文壇』(台北：遊目族文化出版、2000)

林海音『我的京味兒回憶錄』林海音作品集7 遊目族文化出版、2000

林海音『寫在風中』林海音作品集8 遊目族文化出版、2000

林海音『春聲已遠』林海音作品集11 遊目族文化出版、2000

林海音『穿過林間的海音—林海音影像回憶錄』遊目族文化出版、2000

林海音『英子的鄉愁』(九歌出版社、2004)

王文漪「懷思梅音」『中央日報』(1984.2.18)

鍾梅音『冷泉心影』重光文芸出版社、1951

鍾梅音『我只追求一個圓』三民書局1968

(日本語)

池田敏雄『台灣の家庭生活』大空社、2002

吳濁流「無花果」『夜明け前の台灣 植民地からの告発』(社会思想社、1972)

戴望舒『戴望舒』詩集 秋吉久紀夫訳、土曜美術社出版、1996

林海音『城南舊事』杉野元子訳、新潮社、1997

論文・評論集

(中國語)

陳芳明「在母性與女性之間—五〇年代以降台灣女性散文的流變」『霜後的燦爛：林海音及其同輩女作家學術研討會論文集』(国立中央大学中文系主編、国立文化資産保存研究中心籌備処、2003)

- 范銘如「如何收編林海音」『中国時報』1998.4.11
- 范銘如『衆裏尋她—台灣女性小說縱論』(麦田出版、2008)
- 封德屏『「遷台初期文學女性的聲音」—武月卿主編《中央日報·婦女與家庭週刊》為研究場域』『永恒的溫柔：琦君及其同輩女作家學術研討會論文集』(李瑞騰主編、国立中央大学琦君研究中心、2006)
- 国立台湾文学館『台灣現當代作家研究資料彙編』13 林海音(封德屏·總策畫、張瑞芬·編選、財團法人台湾文学發展基金会·編印、2011)
- 国立台湾文学館『台灣現當代作家研究資料彙編』64 鍾梅音(封德屏·總策畫、王鈺婷·編選、財團法人台湾文学發展基金会·編印、2014)
- 洪宜嬭「中国國民黨婦女工作之研究(1924-1949)」(国立政治大学歷史学系研究所碩士論文、2008)
- 李瑞騰、夏祖麗主編『一座文學的橋：林海音先生紀念文集』(台南国立文化資產保存研究中心、2002)
- 李瑞騰主編『霜後的燦爛—林海音及其同輩女作家學術研討會論文集』国立文化資產保存研究中心籌備處出版、中央大学中文系編集出版、2003
- 劉心皇『當代中國新文学大系—史料與索引』(台北：天視出版社、1981)
- 梅家玲「五〇年代台灣小說的性別与家國—以『文藝創作』与文獎會得獎小說為例』『性別、還是家國？五〇與八、九〇年代台灣小說論』(麦田出版、2004)
- 盛英主編『二十世紀中国女性文学史』(天津人文出版社、1995)
- 施英美《〈聯合報〉副刊時期(1953-1963)的林海音研究》(臺中：靜宜大學中文所碩士論文、2003.6)
- 宋美齡『蔣夫人言論集』(生生印書館、1940.6)
- 汪淑珍『文学引渡者—林海音及其出版事業』秀威資訊科技股份有限公司、2008
- 葉石濤『台灣鄉土作家論集』(遠景出版事業、1979)
- 應鳳凰『五〇年代台灣文學論集—戰後第一個十年的台灣文學生態』(春暉出版社、2004)
- 王鈺婷「語言政策與女性主体之想像—解讀《中央日報·婦女與家庭週刊》中女性散文家之美學策略」『台湾文学研究學報』第七期 p.45-77 (国立台湾文学館、2008.10)
- 王鈺婷「政治駕馭」與「市場主導」下女性抒情散文之生產機制—以《中央日報·婦女與家庭週刊》的書信體專欄與徵文活動為例、《現代中文文學學報》(Journal of Modern Literature in Chinese) (香港：香港嶺南大學人文學科研究中心、2009)
- 王鈺婷『女聲合唱—戰後台灣女性作家群的崛起』(国立台湾文学館、2012)
- 游鑑明「當外省人遇到台灣女性」『戰後台灣報刊中的女性論述』1945-1949 (中央研究員近代史研究所集刊第47期 2005.3)
- 游鑑明「是為党國抑或是婦女？1950年代的『婦友』月刊」近代中国婦女史研究 第19期、中央研究院近代史研究所、2011.12
- 張瑞芬「被邊緣化的台灣當代女性散文研究」『文訊』第205号(文訊雜誌社、2000)(日本語)
- 赤松美和子『台湾文学と文学キャンプ』(東方書店、2012)
- 應鳳凰「林海音著『城南旧事』—その小説と映画化された作品との比較」『中国現代文学—台湾からみる中国大陸の文学現象—』(小山三郎·許菁娟編著 晃洋書房、p.23-45、

2010)

白水紀子「中国文学にみる『近代家族』批判—日中女性文学を通して—」（東洋文化研究所紀要（143）p123-169、2003.3）

白水紀子「中国における『近代家族』の形成—女性の国民化と二重役割の歴史—」（横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ（人文科学）（6）p135-151 2004.3）

杉野元子「林海音『城南旧事』雑考—映画との比較の視点から—」（《藝文研究》慶應義塾大学藝文学会 No.70、p39-59 1996.6）

段瑞聡『蒋介石と新生活運動』（慶應義塾大学出版会、2006）

羅新耀『北京風俗大全—城壁と胡同の市民生活誌』（藤井省三・宮尾正樹・坂井洋史・佐藤豊翻共訳 平凡社、1988）

伝記

夏祖麗「追隨母親の足跡—我写林海音傳的心路歷程」（国立成功大学図書館館刊・第11期、1992.4）

夏祖麗『從城南走来：林海音傳』（天下遠見出版、2000）

夏祖麗「追隨母親の足跡—我寫林海音傳的心路歷程」（国立成功大学図書館館刊・第十一期、1992.4）

林海音『穿過林間的海音』（遊目族文化出版、2000）

文学史・歴史

（中国語）

郭豫斌『市井生活』（華夏出版社、2008）

何標「北京台湾会館史話」『台湾雜誌』（1994.9）

何標「林海音：一位可敬可愛的人」『兩岸關係』（2003.11）

李筱峰『台灣史 100 件大事（下）』（玉山社、1999）

宋美齡『蒋夫人言論集』（1940.6 生生印書館）

張光正「《城南旧事》作者林海音青少年時代的人和事」『兩岸關係』（2003.11）

『中華民國新聞年鑑』（台北市新聞記者会、1961）

『中華民國文藝年鑑』（台北：平原出版社、1966）

（日本語）

外務省亜細亜局『支那在留邦人及外国人人口統計表』第18回

喜安幸夫『台湾の歴史』（原書房、1997）

黄俊傑『台湾意識と台湾文化—台湾におけるアイデンティティの歴史的変遷』（臼井進訳、東方書店、2008）

段瑞聡『蒋介石と新生活運動』（慶應義塾大学出版会、2006）

葉石涛『台湾文学史』（中島利郎・澤井律之訳 研文出版、2000）

山口守編『講座台湾文学』（藤井省三/河原功/垂水千恵/山口守著 国書刊行会、2003）

女性史関係

伊藤るり・坂元ひろ子・タニ・E・バーロウ『モダンガールと植民地的近代—東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』（岩波書店、2010）

- イヴォンヌ・クニビール、カトリーヌ・フーケ著『母親の社会史』(中嶋公子・宮本由美訳 筑摩書房、1994)
- 落合恵美子『近代家族像とフェミニズム』(勁草書房、1989)
- 小野静子『良妻賢母という規範』(勁草書房、1991)
- 関西中国女性史研究会編『中国女性史入門—女たちの今と昔』(人文書院、2005)
- 洪宜嬭「中国国民党婦女工作之研究(1924—1949)」国立政治大学歴史学系研究所修士論文、2008
- ジュリア・クリステヴァ『中国の女たち』(丸山静香+原田邦夫+山根重雄訳 せりか出版、1981)
- 白水紀子『中国女性の20世紀』(明石書店、2001)
- 末次玲子『二〇世紀中国女性史』(青木書店、2009)
- 台湾女性史入門編纂委員会編『台湾女性史入門』(人文書院、2008)
- 早川紀代、李熒娘、江上幸子、加藤千香子編『東アジアの国民国家形成とジェンダー』(青木書店、2007)
- 永原慶二・住谷一彦・鎌田浩編『家と家父長制』(比較家族史学会監修早稲田大学出版部、1992)
- 李子雲、陳恵芬、成平編著『チャイナ・ガールの1世紀』(友常勉+葉柳青訳 三元社、2009)
- Sharon R.Wesoky, “Bringing the Jia Back into Guojia”, *Signs*. Vol.40, No.3, spring 2015. 647-669

【ウェブサイト】

「婦女運動」(国立台湾歴史博物館 HP)

<http://women.nmth.gov.tw/zh-tw/Content/Content.aspx?para=307&page=0&Class=85>、2015年4月29日閲覧

林海音とその時代 年譜

西暦	民国	歴史・ジェンダー関連事項 (数字は月) 中国大陸	年齢	林海音
1914	3	1 袁世凱国会解散。3 褒揚条例公布。5 月、新約法公布。7 孫文、中華革命党結成。第一次世界大戦始まる		
1915	4	1 日本、二一カ条要求提出、反対運動起こる。5 袁世凱、二一カ条要求を承認。9 『青年雑誌』(『新青年』)創刊。12 袁世凱帝制実施を宣言、第三革命		
1916	5	6 袁世凱死去。黎元洪大統領に就任、旧約法、旧国会回復。9 『新青年』 儒教批判、文学革命開始		
1917	6	9 孫文、広州に中華民国軍政府を樹立、南北両政権が対峙。11 ロシア革命修正褒揚条例公布		父林煥文 (台湾苗栗頭份の人で本籍は広東省蕉嶺)、母黄愛珍 (台湾板橋の人) を連れ日本へ移住
1918	7	5 周作人訳の与謝野晶子「貞操論」、『新青年』に載る。6 『新青年』イブセン特集。7 胡適「貞操論」。11 第一次世界大戦終結	0	農歴 3 月 18 日、日本大阪衣笠町の回生病院で生まれる
1919	8	1 パリ講和会議始まる。2 李大釗「戦後の婦人問題」。3 三・一朝鮮独立運動 コミンテルン結成。4 『新青年』貞操論争、性道徳をめぐる論議が活発化。鄧春蘭、大学の女性への開放を訴えて蔡元培に手紙を出す。5 五・四運動始まる。10 中華革命党、中国国民党に改組。12 向警予ら勤工儉学の目的でフランスへ	1	
1920	9	春、北京大学で男女共学実現	2	
1921	10	3 湖南女界連合会結成。7 中国共産党創立。11 湖南省に女性代議士誕生	3	両親とともに台湾へ戻り、頭份と板橋に住む。一番目の妹・秀英誕生
1922	11	4 上海日華紡スト。7 共産党二全大会、初めて明確な女性運動方針を決定。8 製糸女工の大スト北京に女権運動同盟会、女子参政協進会成立、全国に拡大。11 北京政府、学校系統を完全に男女同一とする	4	
1923	12	2 旅順、大連回収運動始まる。京漢鉄道スト、武力鎮圧される。孫文、広州に大本営を設立。6 共産党三全大会「全国婦女運動の大連合」を唱える	5	両親とともに北京へ渡り、城南に定住 二番目の妹・燕珠誕生
1924	13	1 中国国民党一全大会、第一次国共合作。3 広州で中国初の公開の三・八国際婦人デー集会。6 上海製糸女工大ストライキ。11 孫文北上宣言、国民会議開催を呼びかける。向警予ら女界国民会議促成会組織を始める。北京女子師範大学校長追放運動始まる (~25.11)	6	

西暦	民国	歴史・ジェンダー関連事項 (数字は月)	年齢	林海音
		中国大陸		
1925	14	1 共産党四全大会、労農婦女運動重視を強調。『婦女雑誌』新性道德特集。2(台湾)自主的な女性運動組織の彰化婦女共励会が成立(-26)。3 孫文死去。5 五・三〇事件、反帝運動へ。6 省港スト。7 広東国民政府成立	7	廠甸師範大学第一付属小学校に入学 弟・燕生誕生
1926	15	1 国民党二全大会、婚姻法制度などを決定 3 三・一八惨案 7 北伐開始 9 広州で婦女運動講習所開設。11 国民政府、武漢遷都を決定	8	三番目の妹・燕瑛誕生
1927	16	1 湖南全省婦女第一回代表大会開催。2 武漢婦女党務訓練班開設。3 湖北省第一回全省婦女代表大会開催。陝西暫行婚姻条例制定。上海ゼネスト。4 四・一二クーデター。蒋介石、南京に国民政府を樹立。7 武漢の国共分裂。8 南昌蜂起。9 武漢、南京両政府の合流。10 毛沢東ら井崗山に革命根拠地建設	9	四番目の妹・女燕玢誕生
1928	17	2 丁玲「ソフィ女士の日記」4 第二次北伐開始(~6) 5 日本、山東出兵 7 共産党、ソヴィエト革命路線を採用	10	
1929	18	4 毛沢東ら江西省瑞金に革命根拠地建設。10 世界大恐慌始まる	11	末の弟・燕璋誕生
1930	19	12 蒋介石、ソヴィエト区包圍攻撃開始。国民政府民法親屬・継承兩編公布	12	
1931	20	5 国民會議に女性代表が刑法上の男女平等などを要求。9 九・一八事変(満州事変)。10 北平女界抗日救国会成立。11 瑞金で中華ソヴィエト共和国臨時中央政府樹立。2 同政府、婚姻条例公布	13	5 月、父煥文が北京日華同仁医院にて病死。 享年 44 歳 9 月、春明女子中学校入学
1932	21	1 一・二八事変(上海事変)。中国婦女反日救国大同盟が結成。3 「満州国」成立。4 ソヴィエト区で婦女生活改善委員会成立。12 宋慶玲ら中国民権保障同盟結成	14	三番目の妹・燕瑛 (6 歳) 死亡 末の弟・燕璋 (3 歳) 死亡
1933	22	1 日本軍華北へ侵攻。ドイツでヒトラー政権成立。3 ソヴィエト区で女工農婦代表會議成立。巴金「家」。魯迅・許広平「兩地書」	15	舞台劇「椿姫」に出演
1934	23	2 蒋介石、新生活運動を提唱。4 中華ソヴィエト共和国婚姻法公布。10 紅軍長征開始 (~35. 10)。11 刑法改正 (性道德の男女平等) の女性運動成功。12 蕭紅『生死場』。「婦女回家」論争 (~37)	16	成舍我の創立した北平新聞専科学校に入学。 学びながら『世界日報』で見習い記者として勤める 『世界日報』で夏承楹と知り合う
1935	24	1 新刑法公布。遵義會議。映画『新女』。7 コミンテルン、反ファシズム人民戦線結成を提起。8 共産党八・一抗日宣言。12 北京で一二・九運動。上海婦女界救国会成立	17	

西暦	民国	歴史・ジェンダー関連事項（数字は月）	年齢	林海音
		中国大陸		
1936	25	2 新生活運動促進總會婦女指導委員會（新運婦指会）成立、宋美齡が指導委員長に。3 上海で三・八国際婦人デーに救国デモ。5 廬山婦女談話会結成。11 日本在華紡労働者大スト。史良ら救国会指導者逮捕、大虐殺・性暴力事件	18	
1937	26	7 廬溝橋事件、日中戦争始まる。8 宋美齡、中国婦女慰勞自衛抗戰將士總會結成。9 第二次国共合作成立。11 国民政府重慶遷都を宣言。12 日本軍南京占領、大虐殺・性暴力事件	19	正式に『世界日報』の記者となり、婦人欄の取材を担当
1938	27	3 戦時児童保育会成立。5 廬山婦女談話会開催、「婦女の抗戰建国参加動員工作大綱」決定。新運婦指会を改組。7 初の国民参政会に女性10人が参加	20	
1939	28	4 陝甘寧辺区婚姻条例。6 『中国婦女』創刊（～41.5）。9 第二次世界大戦始まる	21	5月13日、夏承楹と北平協和医院の講堂で結婚、当時北平文化界の盛事となる。結婚後は永光寺にある大家族の夏家に入る
1940	29	1 毛沢東「新民主主義論」。3 汪兆銘、南京に日本の傀儡政府樹立。「婦女回家」論争が再燃	22	北平師範大学図書館で図書目録作成の仕事に就く
1941	30	2 鄧穎超、皖南事変に抗議して国民参政会出席拒否。秋、共産党中央婦女委書記、王明から蔡暢にかわる。12 太平洋戦争始まる	23	長男祖焯を出産
1942	31	2 共産党の整風運動開始。3 丁玲「国際婦人デーに感あり」。7 宋慶玲「自由のために戦う中国女性」	24	
1943	32	2 「各抗日根拠地の当面の女性工作方針に関する中国共産党中央委員会の決定」（四三年決定）。丁玲批判。張愛玲『傾城の恋』	25	
1944	33	4 日本軍、大陸縦断作戦	26	
1945	34	7 重慶で中国婦女連誼会成立。8 日本降伏。10 国共間で「双十協定」成立。延安で歌劇「白毛女」を集団創作。台湾、中華民国に復帰。台湾行政長官公署が正式に発足し、陳儀が初代行政長官に就任	27	抗日戦争勝利、大家族のもとから南長街に移り“小家庭”を営む。長女祖美誕生。『世界日報』復刊、復職し同紙「婦人版」主編となる
1946	35	大陸 1 国共停戦協定。政治協商会議開催。5 国民政府、南京遷都。6 - 8 全面内戦へ。12 米兵の女子大生暴行事件に抗議運動起こる（-47.1）	28	

西暦	民国	歴史・ジェンダー関連事項（数字は月）	年齢	林海音
1946	35	台湾省婦女会成立、謝娥、理事長に。 4 国語推進委員会設立。鄭玉麗・劉玉英・謝娥・許世賢ら台湾初の全省的政治組織である台湾省婦女会を設立。謝娥、国民大会代表となる 台湾新運婦指会台湾省工作委員会成立。許世賢と邱鴛鴦が嘉義市議となる	28	
1947	36	大陸インフレと失業深刻化。5 反飢餓・反内戦・反迫害運動高まる。9 人民解放軍総反攻宣言。10 共産党、中国土地法大綱公布。12 鄧穎超「土地改革と女性工作の新段階」 台湾 2 二・二八事件。以降、国民党政府による白色テロの時代へ	29	次女祖麗誕生
1948	37	1 中国国民党革命委員会成立。2 上海で女性労働者の運動、武力鎮圧される。12「当面の解放区農村の女性工作に関する共産党中央の決定」（四八年決定）	30	11 夏承楹、3人の子ども、母愛珍と弟燕生、妹燕玢とともに故郷台湾へ帰る
1949	38	3-4 中国婦女第一回全国代表大会。4 中華全国民主婦女連連合会成立、蔡暢、主席に。 7『新中国婦女』創刊（56.1・『中国婦女』）。 10 中華人民共和国成立、宋敬齡、中央人民政府副主席に。11 北京市、すべての妓院を封鎖 台湾 12 国民政府が台湾移転。戒嚴令施行	31	1 新聞に文章を発表し始める。当時の文章は大半を『中央日報』と『国語日報』に発表した。5『国語日報』に入り編集を担当 12『国語日報』「週末」版の主編となる～1955. 10
1950	39	3 蒋介石が総統に復職。朝鮮戦争開始。3 中華文芸獎金委員会設立	32	
1951	40	米国からの経済・軍事的援助始まる～1965年。台湾、反共陣営の一員に	33	台湾青年文化協会主催の「夏季郷土史講座」に参加。これが台湾での初めての文学活動への参加となる。
1952	41	日華平和条約調印	34	
1953	42	宋美齡、中央婦女工作会設立	35	11『聯合報』副刊に迎えられ主編を務める 12 三女祖葳誕生。
1955	43		37	最初の散文集『冬青樹』出版。
1956	44		38	世界新聞専科学校創立、教師として迎えられる。第二回ロータリークラブ文学賞を受賞
1957	46		39	11『文星』雑誌創刊、文学編集となる。～1961. 10

西暦	民国	歴史・ジェンダー関連事項（数字は月）	年齢	林海音
1958	47	金門砲戦勃発（八二三砲撃戦）。台湾海峡緊迫	40	
1959	48		41	最初の長編小説『曉雲』出版。
1960	49		42	小説集『城南旧事』出版。
1963	52		45	『聯合報』から離職。「聯合報副刊」時代の10年間には多数の作家を育成し、その功績は人々から称えられる
1964	53		46	台湾省教育庁児童読物編集グループに迎えられ第一回文学編集を務める。これをきっかけに児童文学の分野にも創作を広げる。『緑藻與鹹蛋』英語版が出版、殷張蘭熙の翻訳による
1965	54		47	児童読物翻訳グループの仕事から離れる。4米務院の招聘で訪米し4カ月間滞在。アメリカから帰国途中に日本を経由し出生地の大阪回生病院を訪れる。初めての児童読物『金橋』出版
1966	55		49	1『純文学月刊』を創刊、発行人および主編となる
1968	57	許世賢、嘉義市長当選、台湾初の女性市長となる	50	純文学出版社を創立
1970	59		52	国立編集館小学校国語科編纂審議委員会に加入し、小学一、二年性の国語の教科書を作成。～1996年まで、計26年
1971	60	国際連合脱退。	53	6月、54期続いた『純文学月刊』を学生書局に引き継ぎ(学生書局が8期発行し1972年2月に停刊)、純文学出版社の仕事に専念
1972	61	蔣経国、行政院長に就任。日本と中華人民共和国の国交樹立（日中国交正常化）に伴い、台湾と日本の国交断絶	54	
1973	62	十大建設計画開始	55	
1974	63	呂秀蓮『新女性主義』	56	
1975	64	蒋介石死去。蔣経国が国民党主席に就任	57	
1977	65	蔣経国が総統に就任	39	
1979	68	米中国交樹立。アメリカ合衆国が台湾国民党政府と国交を断絶。美麗島事件勃発。呂秀蓮、美麗島事件で逮捕	39	
1982	71	李元貞、婦女新知雑誌社を設立	64	『城南旧事』が上海製片廠で映画化、呉貽弓監督。国際映画祭で何度も大賞を受賞する
1983	72	李昂『夫殺し』	65	母林黄愛珍が亡くなる。享年81歳
1984	73	馬偕医院で台湾原住民促進委員会が設立される。原住民運動始まる。郵政保護法始まる	66	

西暦	民国	歴史・ジェンダー関連事項（数字は月）	年齢	林海音
1985	74	台湾大学「婦女研究室」設立	67	著書『剪影話文壇』が台湾文化出版と学界が選ぶ“1984年の台湾で最も影響力のある10冊”の一冊に選ばれる
1986	75	民主進歩党結成	68	
1987	76	戒厳令解除。雛妓（少女売春）反対デモ。元「慰安婦」を支援する婦女救援基金会、環境問題にとりくむ主婦連盟、DV問題を扱う現代婦女基金会などが設立される	69	
1988	77	蔣経国死去。李登輝副総統が本省人初の総統に就任	70	8 戦後上海に残り 37 年間離れていた三番目の妹・燕珠と香港で再会。 8 ソウルで開催された第 52 回国際ペンクラブ年会で韓国メディアによる台湾作家林海音、大陸作家蕭乾、韓国作家許世旭の海峡兩岸と韓国の文化交流がおこなわれる
1989	78		71	600 万字による『何凡全集』全 26 巻を主編、出版する
1990	79	台湾初のレズビアン組織「我們之間」設立	72	『何凡全集』主編によって図書主編金鼎賞を受賞。 5 月、台湾出版界トップによる訪問団とともに中国大陸を訪問、41 年半ぶりに北京を訪れる
1991	80	女性労働問題に取り組む女工団結生産線設立	73	
1992	81		74	『城南旧事』英語版が出版。齊邦媛、殷張蘭熙の翻訳による
1993	82	学術研究と女性運動の双方にとりくむ研究者団体である女性学学会（女学会）設立。鄭如雯、夫の暴力に耐えかねて夫殺害 DV が社会問題に	75	北京で《当代台湾著名作家代表作大系》の新書発表会に参加。謝冰心、蕭乾とともに同書の顧問を務め兩岸文学交流に大きな一歩を踏み出す
1994	83	セクシャルハラスメント反対デモ。フェミニズム専門店「女書店」誕生。「粉領聯盟」（OL 連盟）設立	76	「世界華文作家協会」と「亜華作家文芸基金会」が主催する第二回「キャリア華文作家に敬意を表す」賞を受賞
1995	84	児童及び少年性交渉防止条例公布	77	『城南旧事』絵本版（全三冊）が出版、《中国時報》の最優良児童図書、《聯合報》読書人年度最優良児童図書に選ばれ、金鼎賞推薦賞を受賞。年末、一手にてがけてきた純文学出版社を閉業。創業以来 27 年 400 余の書籍を出版し、文壇に数多くの質のよい作品を送り出した。『城南旧事』日本語版が日本で出版。杉野元子の翻訳による

西暦	民国	歴史・ジェンダー関連事項（数字は月）	年齢	林海音
1996	85	台北市、婦女權益促進委員会を設置。女性運動家彭婉如殺害事件をきっかけに、性暴力反対の気運高まる。性侵害防止法公布。リカラッ・アウー『誰がこの衣装を着るのだろうか』	77	
1997	86	行政院婦女權益促進委員会設置。台北市、公娼廃止を宣言。セックスワーカーの権利を擁護する公娼たちの団体台北市日日春關懷互助協会設立。台北初の原住民女性組織である高雄県原住民婦女成長協会設立	79	浙江文芸出版社から『林海音文集』（全5冊）出版 北京の中国現代文学館で「林海音作品研究討論会」が開催 『城南旧事』ドイツ語版がドイツで出版。スザンナ・ホーンベックの翻訳による
1998	87	DV 防止法公布	80	第三回「世界華文作家大会」の「終身成就賞」を受賞、李登輝総統から授与される
1999	88	九・二一地震	81	第二回五四賞「文学貢献賞」を受賞。ドイツ語版『城南旧事』がスイスの「ブルーコブラ賞」を受賞
2000	89	民主進歩党の陳水扁が総統に当選	82	5月4日、中国文芸協会の「荣誉文芸勲章」を授与される。 5月16日、『林海音作品集』全12冊および回想録『穿過林間的海音—林海音影像回憶録』が出版、陳水扁総統の主催で新書発表会が開催。 10月、伝記『從城南走来—林海音伝』出版。 10月、『城南旧事』出版40周年を迎え、北京の中国現代文学館など学術機関の共同主催による「林海音作品研究討論会」が開催
2001	90		83	12月1日、台北にて病気のため亡くなる

[参考資料：夏祖麗『從城南走来：林海音傳』、李瑞騰主編『霜後的燦爛：林海音及其同輩女作家學術研討會論文集』、末次玲子『二〇世紀中国女性史』、台湾女性史入門編纂委員会『台湾女性史入門』]

あとがき

大学を卒業後 20 数年ぶりに大学院へ進学しようと考えたとき、文学を研究したいと思った。中国語圏の人々をもっと身近に感じ、そのことを中国語圏とあまり縁のない日本人に伝えたかったからである。それまで仕事で中国語を使い、かれらと出会ってまず文化や習慣の違いにカルチャーショックを受け、そのインパクトの強さに衝撃を受けた。今でこそ街のいたるところで中国語が聞こえる時代になったが、ついこの間までかれらはもっと未知の存在で、日本人は自分と異なる者としてかれらに関心を寄せていたか、または知らなかった。だが同じ人間であれば、例えば思いの伝わらない恋愛の苦しさや、子どもを持つ母親の気持ちなどは何ら変わらないはずであり、その“異なる部分”を中国語圏と接点のない友人たちに紹介してみたかったのである。実際大学院に入ってみると、古典の読解や難しい文法のレジュメをつくるのに四苦八苦し、紹介などという域には程遠く、どんな作家を研究するかもなかなか決められなかった。そんなとき、大学院の先輩西端彩さんが教えてくださった一篇の論文のなかで林海音とであった。林海音原作の『城南旧事』は好きな映画で何度も見ていたが、彼女が生粋の北京っ子でなく台湾人の両親に連れられて北京に来たこと、台湾に戻ってから精力的に創作活動や編集・出版者として活躍していたことを知った。

一時期、夫の赴任に伴い、幼い子どもを連れて海外生活をしたことがあったが、当時それまで続けていた仕事も辞め、友人もなく、自分の立ち位置が分からなくなることがあった。海外に暮らす主婦というテーマに興味を持ったのはその頃からである。戦争経験者の林海音や遷台女性作家の経てきた苦労には及ぶはずもないが、彼女たちもまた見知らぬ場所で懸命に自分の立ち位置を確立しようとしていたのではないか。そう思うと、その作品に深い興味を覚えた。そうした悩みや心情は、日本の主婦とも通ずるはずではないか。

このような研究生生活の機会を与えてくださった宮尾正樹先生、伊藤美重子先生、和田英信先生、伊藤さとみ先生に心から感謝いたします。とりわけ宮尾先生には常に忍耐強く、思いやり深いご指導をいただき感謝の気持ちでいっぱいです。岸本美緒先生には、学部を超えて細やかなご指導をいただき心より御礼申し上げます。またジェンダー的考察に関し力強いアドバイスをいただいた中国女性史研究会の諸先生方に深く感謝いたします。台湾では、林海音研究の第一人者である王鈺婷先生に、常日頃から様々な資料や執筆のチャンスをいただき言い尽くせないほどお世話になりました。心より感謝の意を表します。また、常に心の支えとなってくださった大学院の先輩をはじめ研究仲間の皆さん、本当に有難うございました。“漂泊する主婦”という研究テーマは、友人の高橋幸子さんと佐藤優子さんに捧げたいと思います。そして常に心をこめて励してくれた母、見守ってくれた父と二人の妹に深く感謝します。また病床で論文の行く末を心配してくれた義父に感謝いたします。最後に、大学院進学を強く支持し、ときに叱咤し、経済的にも支えてくれた夫和久と、最愛の息子遼に論文の完成を報告するとともに、心から感謝いたします。